

宮永町遺跡

—福岡県柳川市宮永町所在近世柳川城下町の調査—

柳川市文化財調査報告書 第18集

2024

柳川市教育委員会

宮永町遺跡

—福岡県柳川市宮永町所在近世柳川城下町の調査—

柳川市文化財調査報告書 第18集

序

筑後川と矢部川が有明海に注ぐ筑後平野南西部に位置する柳川市は、柳川藩十一万石の城下町であり、詩人北原白秋の詩歌の母胎となった水郷都市です。

このたび報告をいたします宮永町遺跡は近世柳川城（本丸・二の丸・三の丸）を中心に、外堀に囲まれたほぼ正方形の区域にあたる御家中（城内）で、武家屋敷が並び、町は小路（こうじ）と呼ばれていた地区の宮永小路です。令和2年に市道京町上宮永町線拡幅工事に伴い、柳川市教育委員会が発掘調査を実施いたしました。その結果、廃棄土坑、柱穴など、城下町における人々の暮らしを生き活きと現在に伝える生活遺構が確認され、出土した陶磁器や、木製品、土製品、金属器等と合わせて、城下町の変遷を明らかにする手がかりとなりました。

本報告が今後の調査研究に寄与すると共に、埋蔵文化財に対する理解を深め、文化財保護に対する取り組みの一助となることを願います。

最後に、今回の調査にご理解を頂きご協力頂きました地元の皆様を始め、調査にあたりご助言ご指導を賜りました皆様、発掘調査に従事して頂きました皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和6年9月30日

柳川市教育委員会
教育長 橋本 秀博

例 言

- 1 本書は、市道京町上宮永町線拡幅工事に伴い、柳川市教育委員会が発掘調査を実施した、柳川市宮永町所在 宮永町（みやながまち）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は柳川市教育委員会が事業主体となり、柳川市教育委員会生涯学習課の橋本清美が調査を担当した。
- 3 本書に掲載した遺構実測に用いたグリッド杭の設置は埋蔵文化財サポートシステムの伊藤博樹が、遺構実測図の作成は牧之角健太が行った。遺物実測図の作成は、西美智代、野口宏美、大津幸代、石井朝子、牧之角が行った。
- 4 本書に掲載した空中写真撮影は空中写真企画の諫山広宣が、遺構写真撮影及び、遺物写真撮影は橋本が行った。
- 5 遺物の整理復元は西、野口、大津、石井、牧之角が行った。
- 6 遺物の製図は九州文化財研究所の加藤悠作、金子史雄が行った。
- 7 出土遺物、写真、実測図は柳川市教育委員会において保管している。
- 8 本書の執筆、編集は橋本が行った。

※SA…土居 SK…土坑 SP…小穴 SD…溝

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	1~2
II	位置と環境	3
III	調査の内容	5~52
1	第1遺構面	5~26
2	第2遺構面	27~41
3	第3遺構面	42~46
4	出土土製品	44~46
5	出土瓦	44~49
6	出土木製品	44~52
7	出土鉄製品	51~52
8	出土銭	51~52
IV	総括	53~54

図版目次

図版1	1 宮永町遺跡調査区遠景（東から）
	2 宮永町遺跡調査区遠景（西から）
	3 宮永町遺跡調査区（直上）
図版2	1 SK-3完掘状況（南から）
	2 SK-4完掘状況（南から）
	3 SK-5完掘状況（南西から）
図版3	1 SK-6完掘状況（南から）
	2 SK-16完掘状況（南西から）
	3 SK-20有機物検出状況（東から）
図版4	1 SK-20完掘状況（南から）
	2 第2遺構面遠景（直上）
	3 第2遺構面全景（直上）

- 図版5 1 SA-37完掘状況遠景（北から）
 2 SA-37完掘状況（南から）
 3 SA-37土層堆積状況（東から）

- 図版6 1 SK-38完掘状況（東から）
 2 SK-39土層堆積状況（西から）
 3 SK-41完掘状況（北西から）

- 図版7 1 SK-44完掘状況（南西から）
 2 SK-46完掘状況（西から）
 3 SK-47完掘状況（北西から）

図版8 出土遺物①

図版9 出土遺物②

図版10 出土遺物③

図版11 出土遺物④

図版12 出土遺物⑤

図版13 出土遺物⑥

図版14 出土遺物⑦

図版15 出土遺物⑧

図版16 出土遺物⑨

図版17 出土遺物⑩

図版18 出土遺物⑪

図版19 出土遺物⑫

図版20 出土遺物⑬

図版21 出土遺物⑭

図版22 出土遺物⑮

挿 図 目 次

第1図	柳川市位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	3
第3図	調査区位置図（1/2,500）	4
第4図	御家中絵図（『旧藩主立花家史料』より一部抜粋）	4
第5図	第1遺構面遺構配置図（1/200）	6
第6図	SK-2・3・4・5実測図（1/40）	7
第7図	SK-2・3・4出土遺物実測図（14は1/12、他は1/3）	8

第8図	SK-6・8実測図 (1/40)	9
第9図	SK-5・6・16出土遺物実測図 (1/3)	11
第10図	SK-16・20実測図 (1/40)	12
第11図	SK-16出土遺物実測図② (1/3)	13
第12図	SK-16・20出土遺物実測図 (1/3)	15
第13図	SK-20・第1遺構面その他の遺構 (SD-1・10・11) 出土遺物実測図 (1/3)	17
第14図	第1遺構面その他の遺構 (SK-12) 出土遺物実測図 (1/3)	19
第15図	第1遺構面その他の遺構 (SK-12・13・14・15・17・18) 出土遺物実測図 (1/3)	21
第16図	第1遺構面その他の遺構 (SK-21・22・SP-23・SK-24・25・26・28) 出土遺物実測図 (169は1/12、他は1/3)	22
第17図	第1遺構面その他の遺構 (SK-28・29) 出土遺物実測図 (1/3)	23
第18図	第1遺構面その他の遺構 (SK-29・31) 出土遺物実測図 (1/3)	24
第19図	第1遺構面その他の遺構 (SK-32・SD-35・SK-36) 出土遺物実測図 (1/3)	25
第20図	第2遺構面遺構配置図 (1/200)	28
第21図	SA-37実測図 (平面図1/20、断面図1/40)	29
第22図	第2遺構面SA-37出土遺物実測図① (1/3)	30
第23図	第2遺構面SA-37出土遺物実測図② (1/3)	31
第24図	SP-38・SK-39・40実測図 (1/40)	33
第25図	SK-41・42・43実測図 (1/40)	35
第26図	第2遺構面SK-39・41・42・43出土遺物実測図 (1/3)	36
第27図	第2遺構面SK-43出土遺物実測図② (1/3)	37
第28図	第2遺構面SK-43出土遺物実測図③ (1/3)	38
第29図	第2遺構面SK-43・44・45出土遺物実測図 (1/3)	39
第30図	SK-44実測図 (1/40)	41
第31図	SK-46・47実測図 (1/40)	43
第32図	第3遺構面出土遺物実測図① (1/3)	45
第33図	第3遺構面出土遺物実測図② (1/3)	46
第34図	出土土製品実測図 (1/3)	46
第35図	出土瓦実測図① (1/3)	47
第36図	出土瓦実測図② (1/3)	48
第37図	出土瓦実測図③ (1/3)	49
第38図	出土木製品実測図① (425は1/6、他は1/3)	50
第39図	出土木製品実測図② (1/3)	52
第40図	出土鉄製品実測図 (1/3)	52
第41図	出土銭 (1/1)	52

表 目 次

第1表 出土遺物觀察表	57~76
-------------------	-------

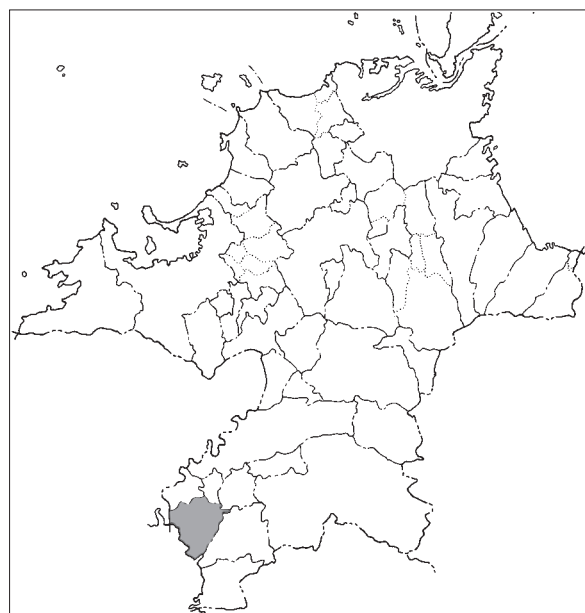
I はじめに

1 調査に至る経過

福岡県柳川市は筑後川と矢部川に挟まれた筑後平野の南西に位置する、人口61,786（2024年6月末現在）人、面積77.15平方キロメートルの地方都市である。市南部には近世以前から戦後まで造られた広大な干拓地が広がる他、本市を含む筑紫平野南部一帯には、水田の灌漑水用の水路が網の目のように巡り、独特の景観を形成している。

今回、市道京町上宮永町線拡幅工事が計画されたことに伴い、柳川市建設部建設課より令和2年8月27日に埋蔵文化財の有無について照会を受けた柳川市教育委員会が、令和2年9月9日に確認調査を実施した。その結果、近世の遺物を伴う遺構面を確認したため、当地が近世柳川城下町の宮永町遺跡に当たることから武家地に関連する遺構であると判断し、その後の協議を始めた。

数次の協議を経て、開発予定地において道路拡張工事により遺構が破壊される範囲で発掘調査を行うことを合意した。発掘調査は文化財保護法による諸手続きを経て、令和2年10月23日から令和2年12月25日まで実施した。



第1図 柳川市位置図

2 調査組織

発掘調査及び報告書作成の関係者は次のとおりである。

		令和2年度	令和3年度	
総括 柳川市教育委員会	教育長	沖 毅	沖 毅	
	教育部長	袖崎 朋洋	袖崎 朋洋	
	生涯学習課長	新開 文隆	新開 文隆	
	生涯学習課長補佐		三小田 祐輔	
	文化財保護係長	高口 祐介	三小田 祐輔(兼)	
	文化財保護係	堤 伴治	堤 伴治	
		橋本 清美(整理・経理)	橋本 清美(整理・経理)	
	会計年度職員	牧之角 健太	牧之角 健太	
	柳川市建設部	建設部長	松永 泰治	松永 泰治
		建設課長	中村 正光	中村 正光
建設課長補佐		梅崎 秋敬	平田 秀史	
新設改良係長		平田 秀史	平田 秀史(兼)	

		令和4年度	令和5年度	
総括 柳川市教育委員会	教育長	沖 毅	橋本 秀博	
	教育部長	袖崎 朋洋	武田 真治	
	生涯学習課長	新開 文隆	野田 学	
	生涯学習課長補佐	田中 規之	横山 雄治	
	文化財保護係長	田中 規之 (兼)	横山 雄治 (兼)	
	文化財保護係	橋本 清美 (整理・経理)	橋本 清美 (整理・経理)	
		川嶋 大輝	川嶋 大輝	
	会計年度職員	牧之角 健太	牧之角 健太	
	柳川市建設部	建設部長	中村 正光	中村 正光
		建設課長	古賀 洋二郎	古賀 洋二郎
建設課長補佐		古賀 正光	古賀 正光	
新設改良係長		今村 日出男	松崎 秀臣	

		令和6年度
総括 柳川市教育委員会	教育長	橋本 秀博
	教育部長	武田 真治
	生涯学習課長	野田 学
	生涯学習課長補佐	横山 雄治
	文化財保護係長	横山 雄治 (兼)
	文化財保護係	橋本 清美 (整理・経理)
柳川市建設部		川嶋 大輝
	建設部長	目野 隆広
	建設課長	古賀 正光
	建設課長補佐	平田 秀史
	新設改良係長	松崎 秀臣

なお、発掘調査及び報告書作成の期間中、大変多くの方々のご指導ご協力をいただきました。
(順不同、敬称略) 福岡県教育庁総務部文化財保護課、九州歴史資料館

Ⅱ 位置と環境

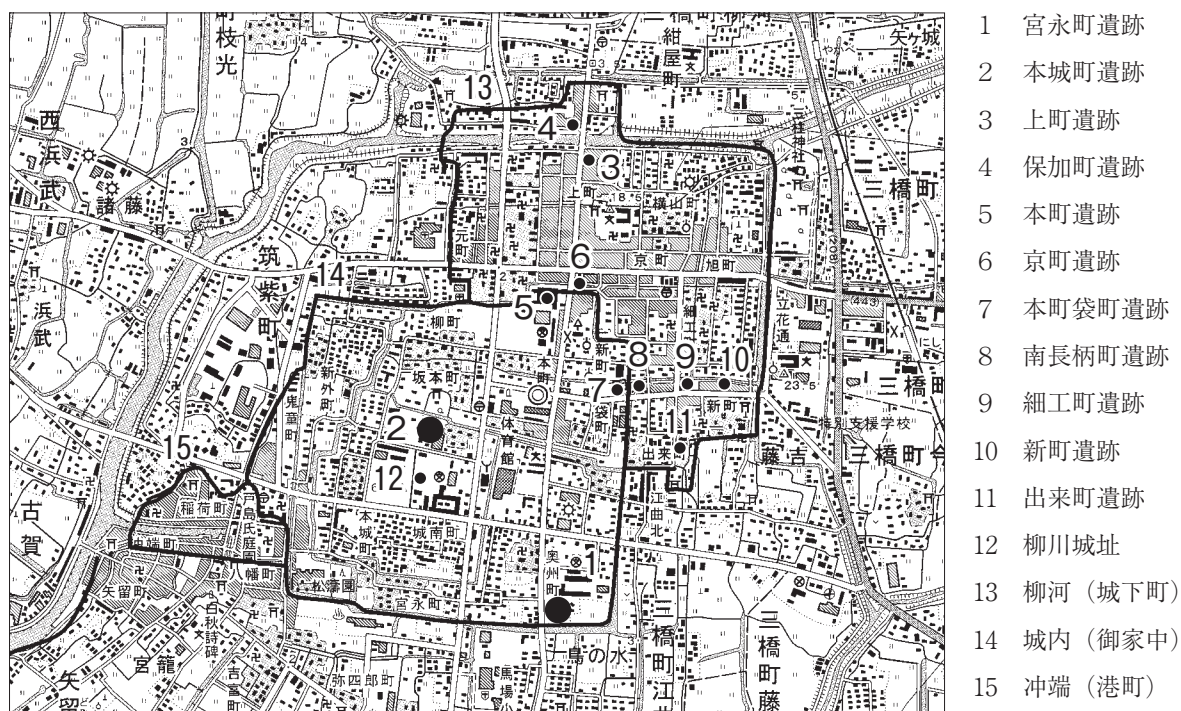
宮永町遺跡は、柳川市の中央部からやや南東寄りの中心市街地の隣接地に所在する、近世柳川城下町の遺跡である。旧城下町の全域が周知の埋蔵文化財包蔵地「柳川城郭跡」にあたり、確認調査により遺構を確認した地点から随時、近世の旧町名に由来する現在の町名を与えた遺跡を登録している。

本遺跡が所在する柳川市は筑後平野南西部の有明海北縁にあたり、西を筑後川、東を矢部川に挟まれた三角州に立地し、標高0～5m程度の平坦な低平地である。柳川市に面する有明海は干満差の激しい国内有数の干潟を有し、沿岸部には干拓地が広がる。柳川城の城郭を形成する城堀は、城下町の東辺にある3ヶ所の水門から二ツ川の水を取水して水路で繋ぎ、さらに城堀の南岸に複数の取水口を備え、二ツ川から市南部の宮永地区及び両開地区に再分配するための中盤施設の役割を果たす。

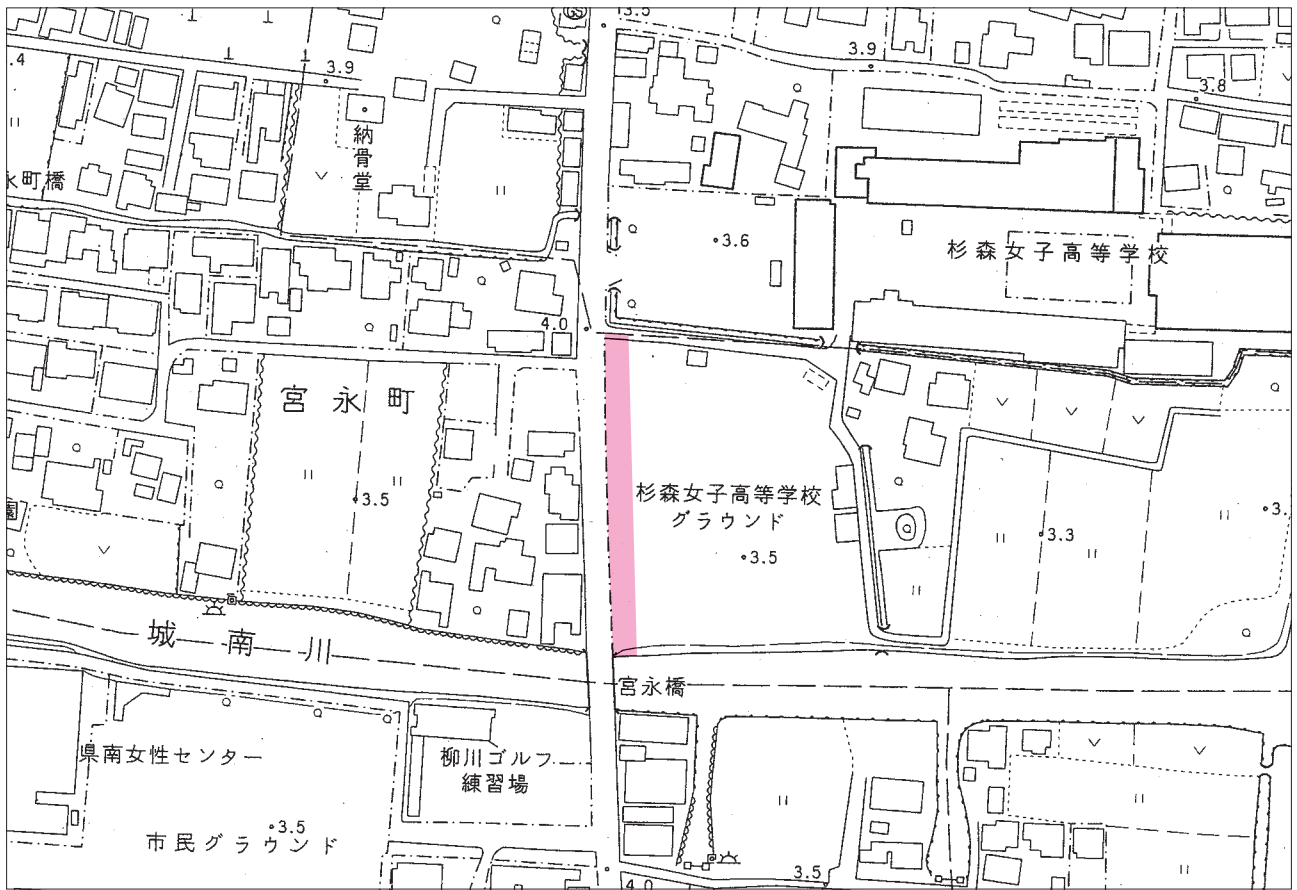
柳川城は国人領主蒲池氏が永禄年間（1558～1570）に築いたといわれるが、史料に乏しく詳細は不明である。豊臣秀吉の九州平定後、天正15（1587）年、立花宗茂が柳川城に入り、三潞・下妻・山門の三郡を支配した。慶長5（1600）年に関ヶ原の戦いで西軍に与した宗茂が改易されると、田中吉政が筑後国の領主として柳川城に入る。しかし2代忠政に後嗣が無く、断絶改易となった。そして元和6（1620）年、立花宗茂が再封され、以後幕末まで立花氏の支配が続いた。近世柳川城下町は柳川城を中核に「御家中」、「柳河町」、「沖端町」の三地区により構成されていた。御家中は、柳川城を中心よりやや南西に配するほぼ正方形の区域である。北と東は柳河町と堀を境として接し、西は沖端町や沖端村・鬼童村と接する。御家中は現在の城内地区に概ね相当する。

御家中の単位は小路で、宮永町は宮永小路に所属した。御家中は原則として藩士のみが居住できるが、例外的に厩には御厩組の扶持人が住居し、外小路の一部には弓足軽、幟足軽が居住した。

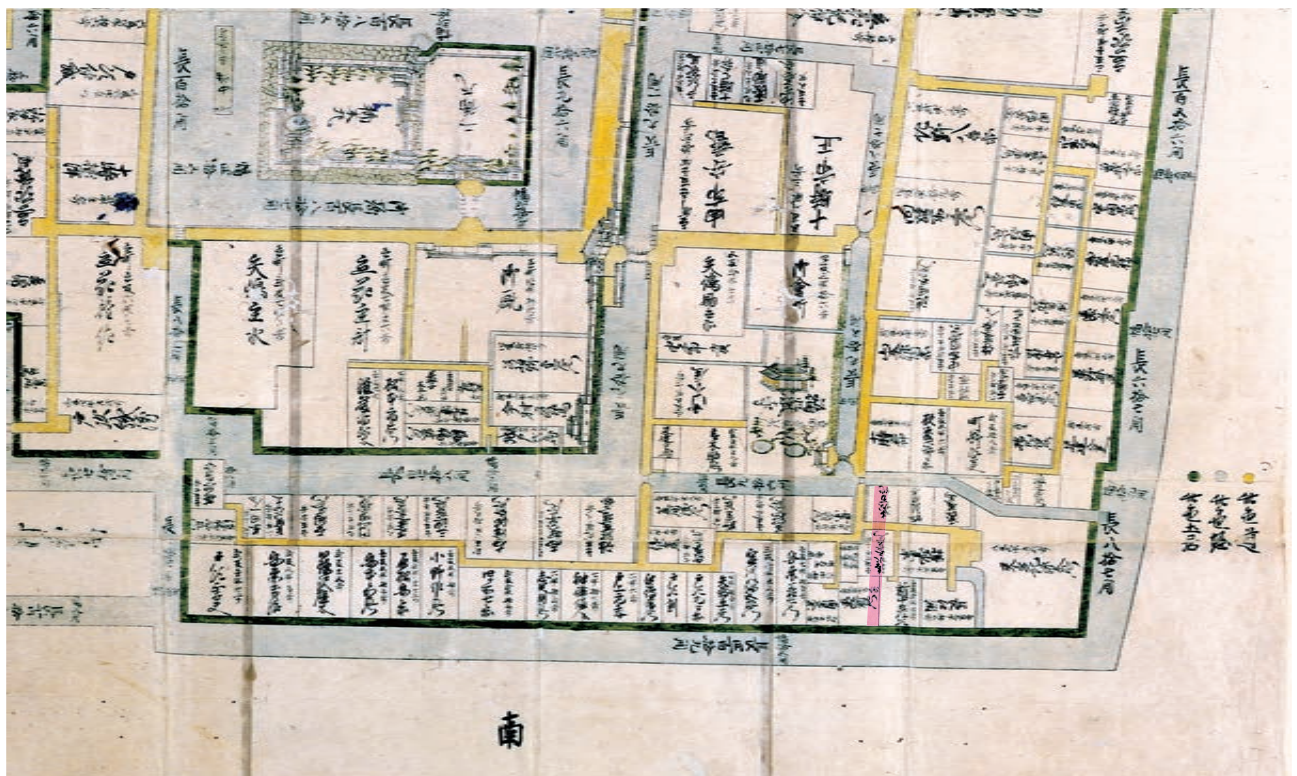
宮永町遺跡は城郭内の宮永小路にあたり、今回の調査地点である宮永町は外堀に南面した城郭南端部にあたる。当地は「文久・慶応・明治・家中変遷」によれば、文久二戌六月年調において、新中重茂、清水正三郎、森喜太郎の3軒の武家地であったことが記され、同資料中の明治廿九年一二月の屋敷地の状況として、3軒とも水田又は菜園へと用途が変化していることがわかる。その後、現在の杉森高等学校の運動場となり現在へ至る。



第2図 周辺遺跡分布図（1/25,000）



第3図 調査区位置図 (1/2,500)



第4図 御家中絵図 (『旧藩主立花家史料』より一部抜粋)

Ⅲ 調査の内容

宮永町遺跡の発掘調査は、令和2年10月23日から作業に必要なプレハブ等の搬入を開始し、重機による表土掘削を開始した。調査にあたっては、安全を考慮し調査を行った。遺構密度はそれほど高くないが、調査区全面にわたっており、全体図を1/20縮尺で実測し、各遺構のレベルを入れる作業を行った。また主要遺構については個別に実測図作成を行い、写真撮影も行った。調査が終了したのは令和2年12月25日である。

調査範囲は東西2.8m、南北90.5m、第1面の面積が287㎡であり、2面調査を行ったため、総調査面積は574㎡である。検出した主な遺構は、土坑、小穴である。出土遺物は、近世陶磁器、青磁、白磁、染付け、土師器、瓦質土器、土製品、瓦、木製品、鉄製品、銅銭である。

1 第1遺構面

SK-2 (第6図)

調査区の南部分で検出した正方形の土坑で、長軸1.9m・短軸約1.8m、深さは最深部で0.2mを測る。埋土は暗黒色粘土で、埋土のしまりは強い。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (図版8、第7図)

1から3は陶器である。1と2は皿で、貫入がある。1は見込みに蛇ノ目釉剥ぎ、高台内面及び高台に胎土目痕がある。2は畳付けに釉剥ぎ及び胎土目痕がある。3は壺で丸みを帯びた器形で内面及び外面に釉だれがあり、外面底部付近にススが付着する。4は白磁の皿で、藁灰釉が施釉されている。5から8は肥前系磁器の染付碗で、外面に草文が描かれる。7の外面には赤絵が描かれる。

SK-3 (第6図)

調査区の西側で検出した不定形の土坑で、SK-2と切り合う。長軸1.68m・短軸0.77m以上、深さは最深部で0.47mを測る。埋土は明黒色土で、埋土のしまりは普通。底面は北側がテラス状になり、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (図版8、第7図)

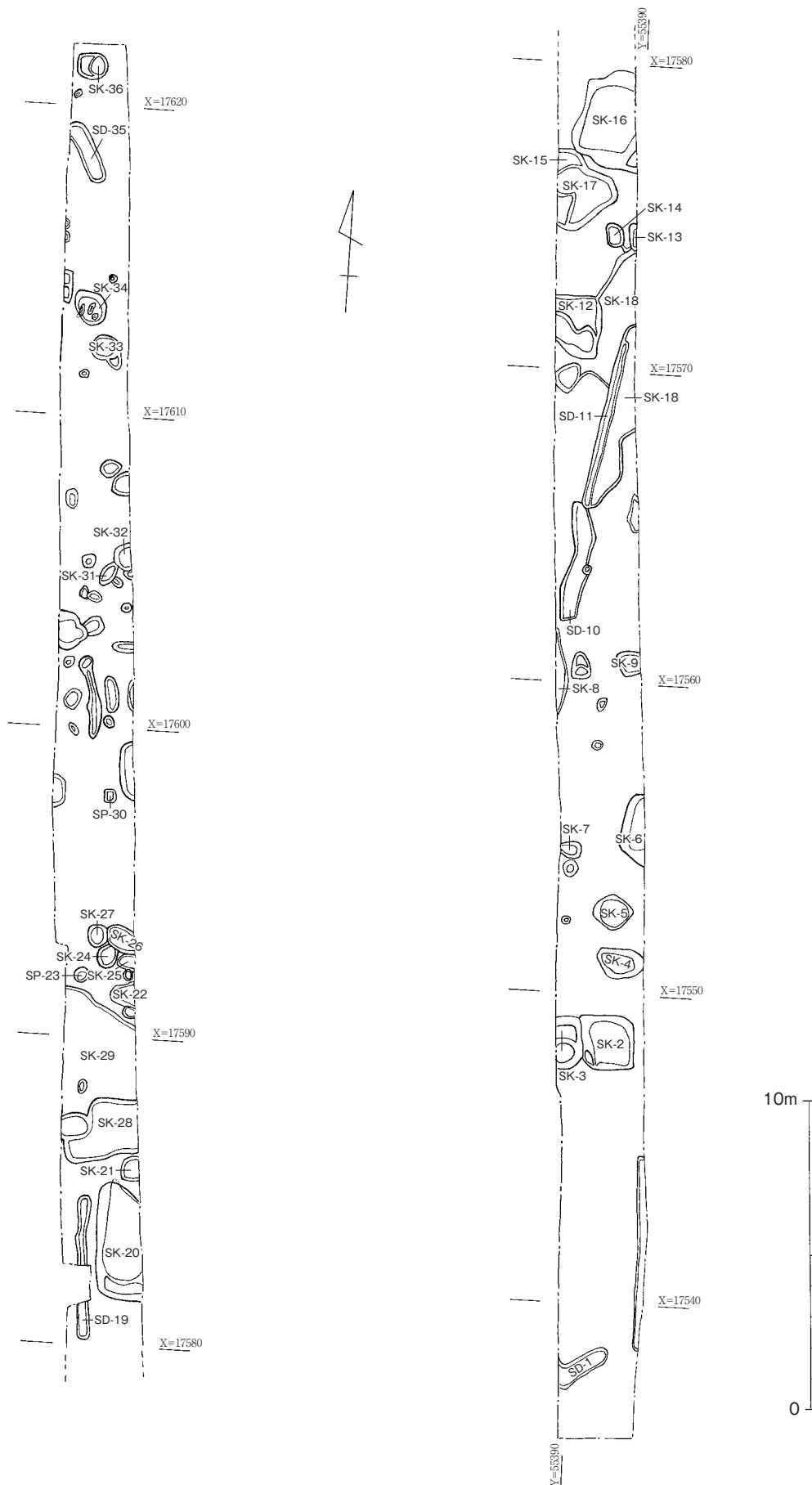
9は瓦質土器の鉢である。内面及び外面にナデ、ハケメ、オサエの調整を施す。10から12が陶器で、10は播鉢である。内面は播目、外面は回転ナデが施される。11は皿である。内面は白化粧土後に緑釉薬を掛け、外面は緑釉後に白化粧土を掛け、貫入がある。12は碗である。高台は露胎で、畳付けに4つの胎土目痕がある。13は青磁の壺である。外面肩部に梅花を貼り付ける。

SK-4 (第6図)

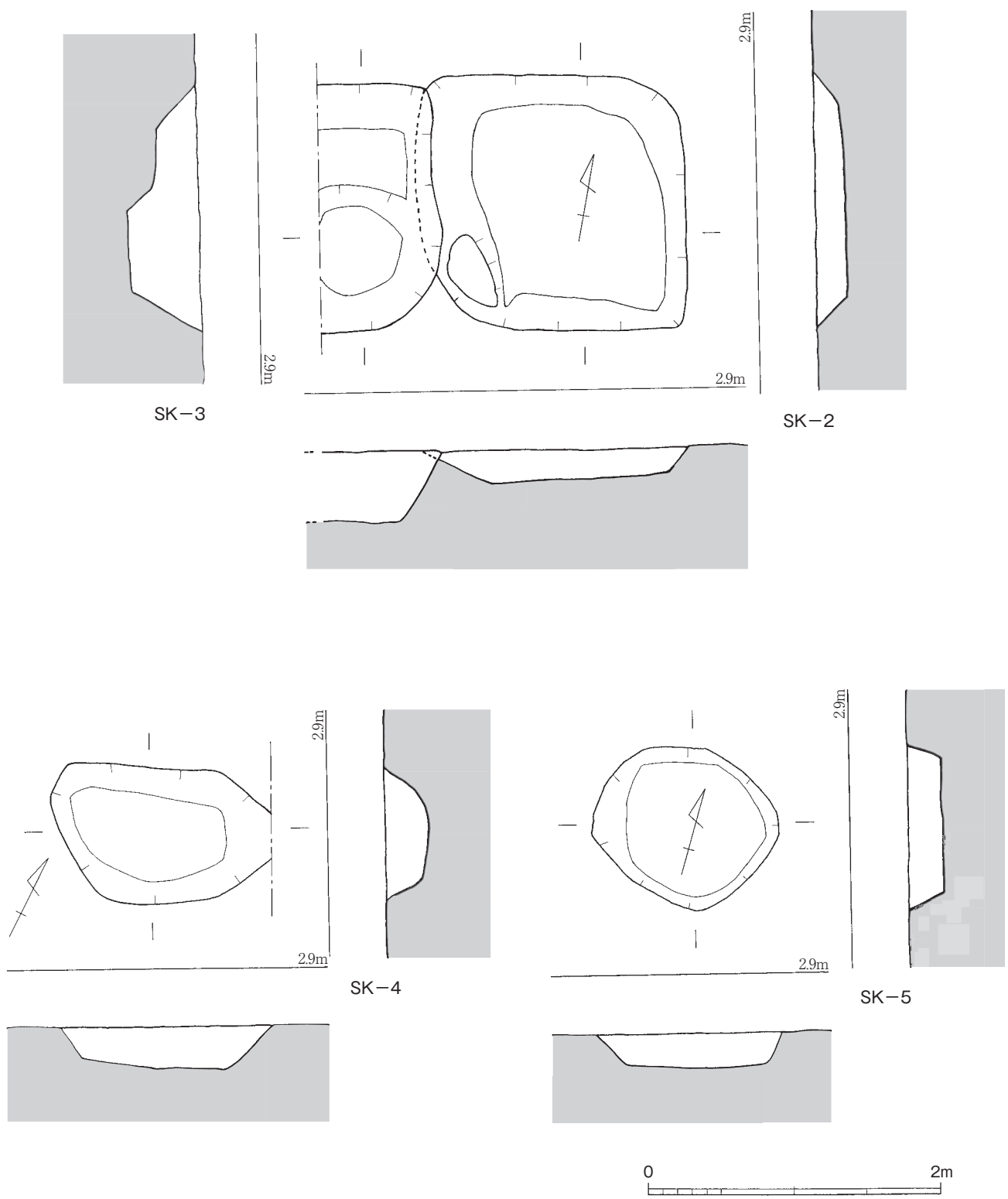
調査区の南側で検出した楕円形の土坑で、長軸1.44m・短軸0.95m、深さは最深部で0.28mを測る。埋土は暗黒色粘土で、しまりは強い。底面は全体的に平坦で、西から東に向かって若干傾斜する。立ち上がりは、比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (第7図)

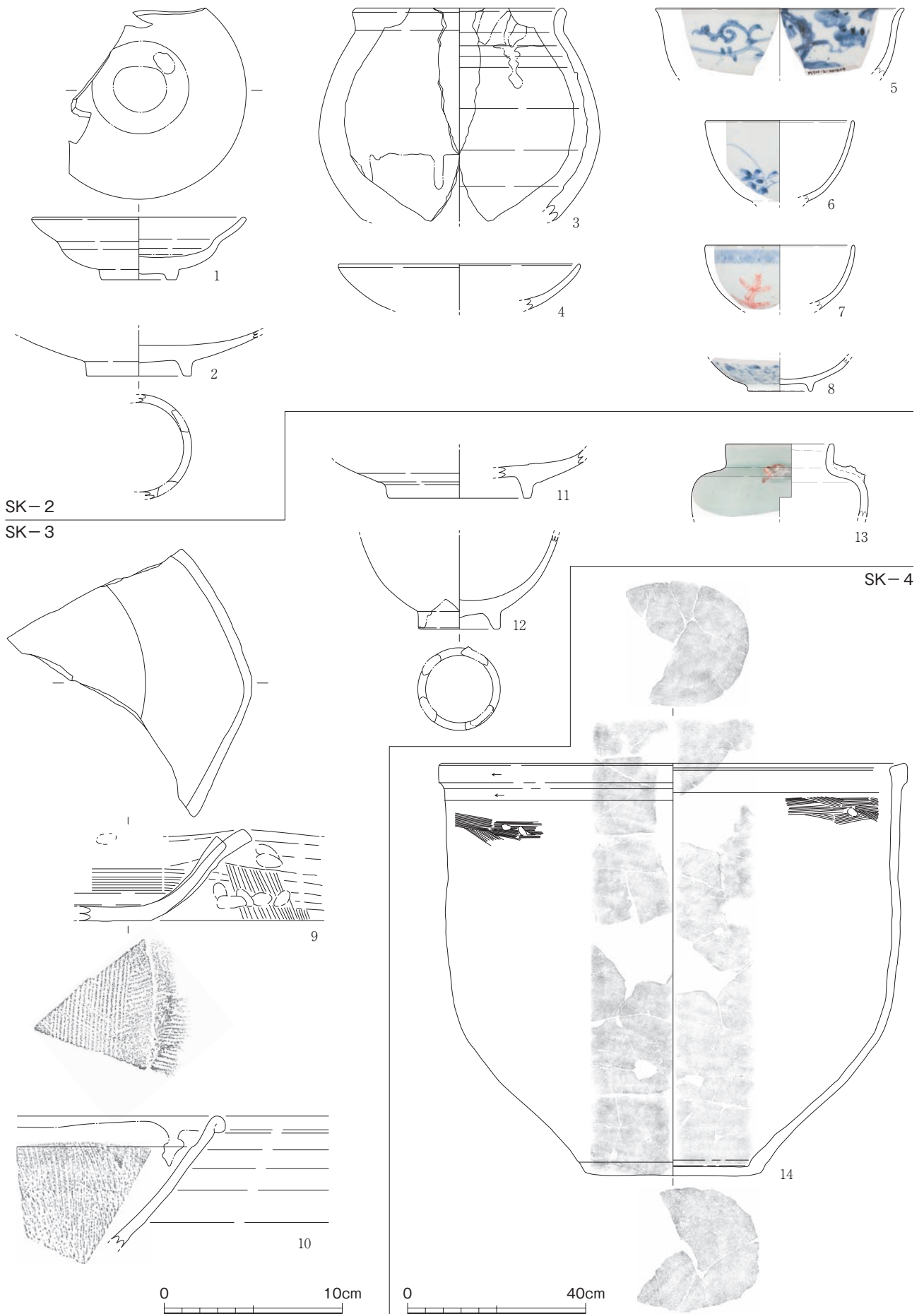
14は瓦質土器の甕で、外面及び内面はハケ及びナデ等の調整を施す。



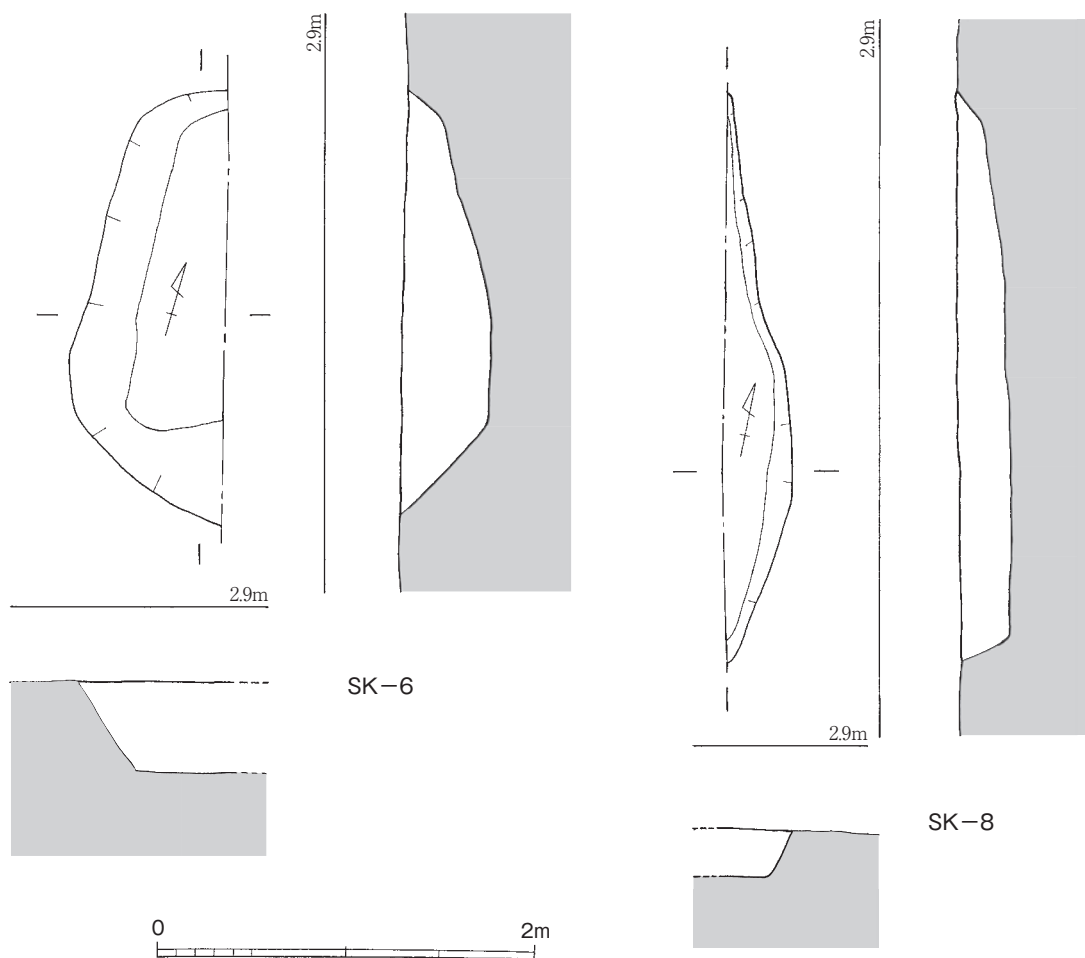
第5図 第1遺構面遺構配置図 (1/200)



第6図 SK-2・3・4・5実測図 (1/40)



第7図 SK-2・3・4出土遺物実測図（14は1/12、他は1/3）



第8図 SK-6・8実測図 (1/40)

SK-5 (第6図)

調査区の南側SK-4の北側で検出した楕円形の土坑で、長軸1.27m・短軸1.1m、深さは最深部で0.24mを測る。埋土は暗黒色粘土で、しまりは強い。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (図版8、第9図)

15は瓦質土器の鉢で、外面下部から底部にかけて被熱の痕跡が残る。

SK-6 (第8図)

調査区の東で検出した不定形の土坑で、長軸2.19m・短軸0.75m以上、深さは最深部で0.45mを測る。埋土は暗黒茶色土で、しまりは普通。底面は中央に向かって落ち込み、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (第9図)

16から17は陶器である。16は小杯で、貫入が見られる。17は碗で貫入があり、口縁部及び胴下部に鉄釉を塗り、外面に緑染付で竹笹文を描く。18は磁器の染付碗で、外面口縁部及び高台に圈線、外面に文様を描く。

SK-8 (第8図)

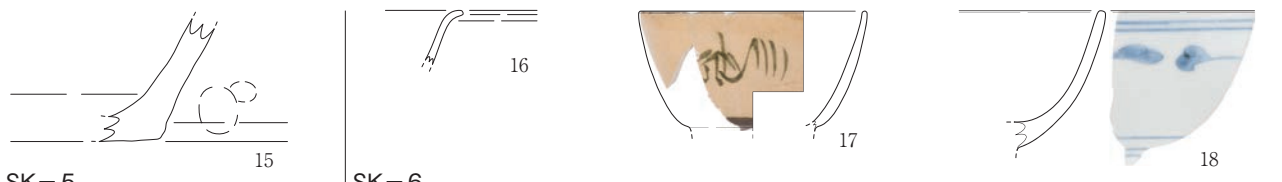
調査区の西で検出した不定形の土坑で、長軸3m・短軸0.37m以上、深さは最深部で0.26mを測る。埋土は灰色土で、しまりは普通。底面は北に向かって若干高くなり、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

SK-16 (第10図)

調査区中央で検出した不定形の土坑で、長軸3.1m・短軸1.64m以上、深さは最深部で0.79mを測る。埋土は黒色土で、しまりはゆるい。埋土中に炭や橙色の粒状の小ブロックを含む。底面は全体的に平坦で北側に、長方形の土坑を伴う。立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版8～11、第9・11・12図)

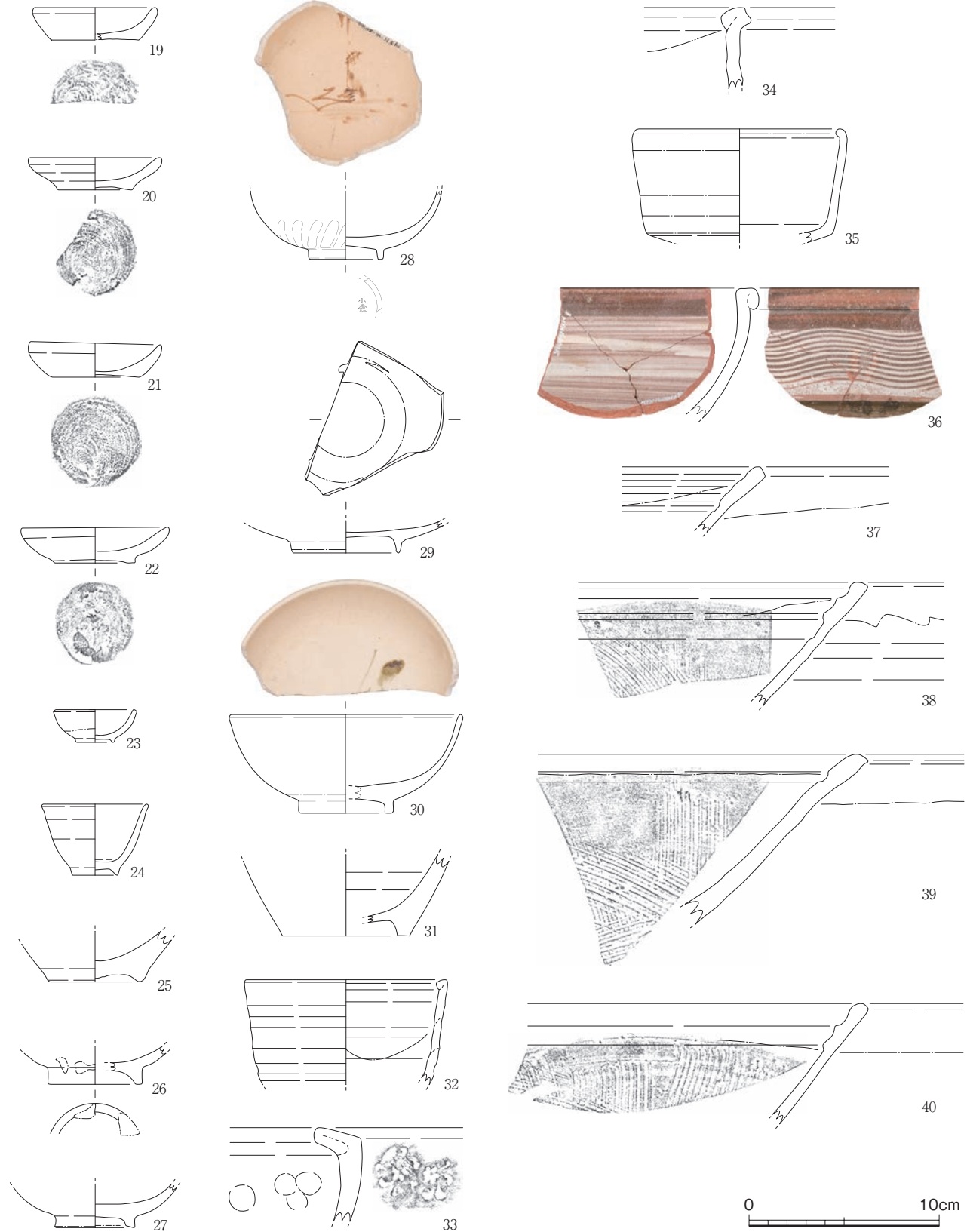
19から22は土師器の小皿で、外面底部に糸切り痕がある。23から24は白磁の小杯で、貫入が見られる。25は陶器の碗で、内面に灰釉を掛け、見込みに砂が付着する。26は白磁の碗で、畳付に2ヶ所砂目が付着する。なお、後日接合できたため図面と写真で器形が異なる。27から42は陶器で、27から28は碗である。27は貫入が見られる。28は外面下部に花卉装飾を施し高台内に「小倉」の文字彫りがあり、見込みに鉄絵の山水文を描く。29は皿で、見込みに蛇ノ目状に白化粧土を塗る。30は碗で見込みに鉄絵を描く。31は瓶で鉄釉を掛ける。32は火入で、鉄釉を掛ける。33は火鉢で外面の口縁近くに印花あり。34は甕である。35は火入で、外面胴部に鎊釉を帯状に施す。36は鉢で外面及び内面に白化粧土による刷毛目装飾を施す。37から42は播鉢である。38と39は播目が11本施される。40は播目が13本施される。41は播目が11本施される。42は底部に糸切り痕、見込みと底部に胎土目痕がある。43から47は白磁である。43は碗で、剥落しているが赤絵により草花文等が描かれる。44は小杯で、高台内に砂が付着する。45は菊花小皿で、内面及び高台内に砂が付着する。46と47は碗であり、47は内面及び外面に貫入がある。48から60は染付である。48から50は皿で、48は内面及び外面に唐草文が描かれる。49は内面に墨弾きによる捻文が描かれる。50は見込みに松竹梅文、外面に唐草文を描く。51は蕎麦猪口で、外面に文様がある。52は小杯で、外面に楓文が描かれる。53は碗で、外面に草花文が描かれる。54と55は皿で、見込みに五弁花文が施される。55は内面に折枝梅文、見込みに五弁花文、高台内面に「大明年製」が描かれる。56から74は碗で、56は外面にスタンプ文がある。57は内面及び外面に色絵で施文される。58は菊、草花文が描かれる。59は外面に花、唐草文が描かれる。60は外面に竹、梅文が描かれる。61は陶器の碗で、見込みに山水文が描かれる。62から74は染付碗で、62は外面に草花文が描かれる。63は外面に花唐草文が描かれる。64は外面に草花文が描かれる。65から67は見込みと外面に網目文、見込み丸に菊花文が描かれる。68は外面口縁部に雨降文が描かれる。69は高台内に一条の圏線が描かれ、僅かに「大明年製」が残る。70は外面にコンニャク印判が施される。71は外面に文様が描かれる。72は見込みに、五弁花文が描かれる。73は外面に氷裂文を描く。74は外面に文様があり、高台外面に釉だれする。75は香炉で、外面に草文が描かれる。76は青磁色絵碗で、内面に色絵で松竹梅が描かれる。77は色絵碗で、外面に色絵で草花文等が描かれる。



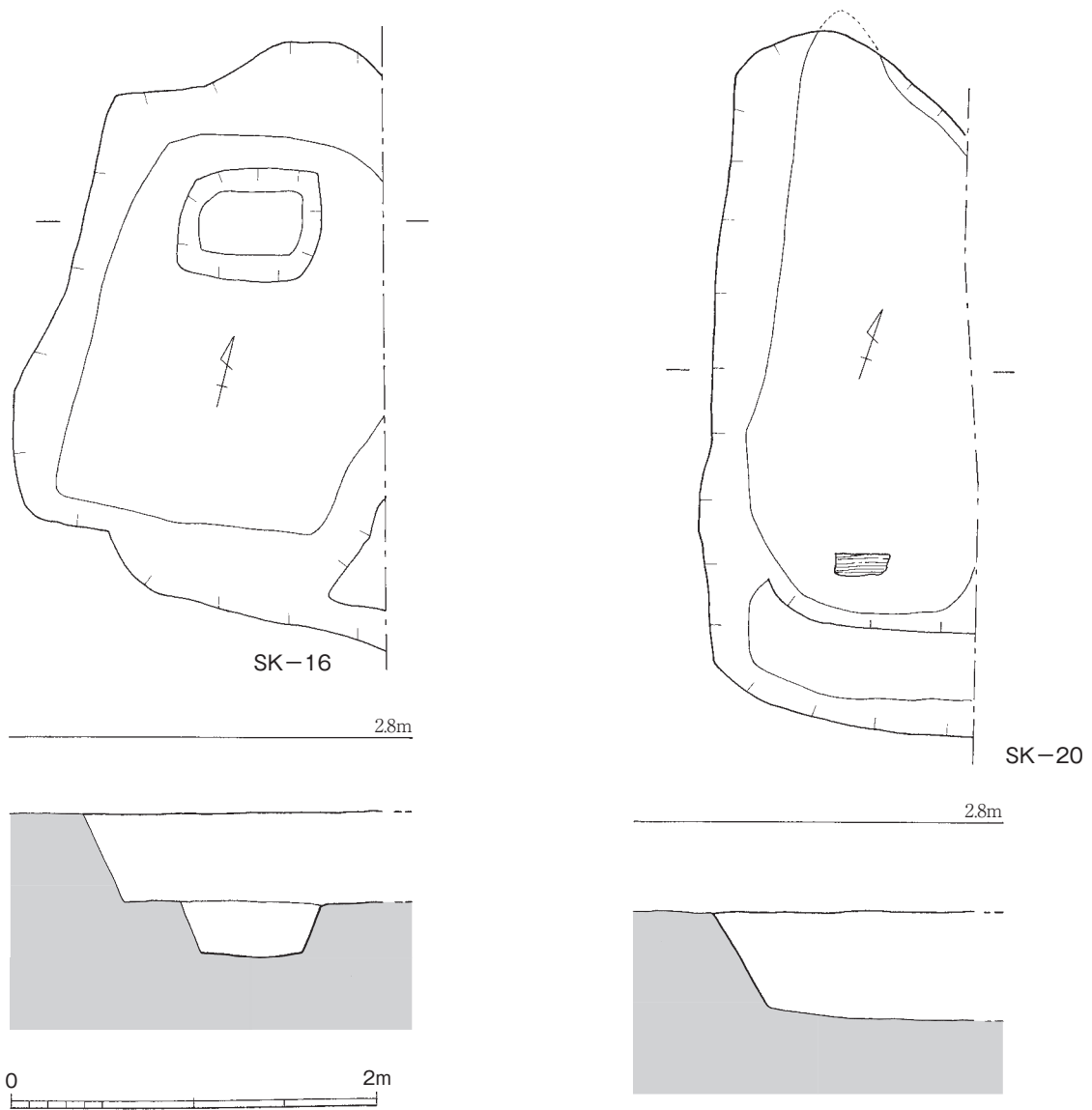
SK-5

SK-6

SK-16



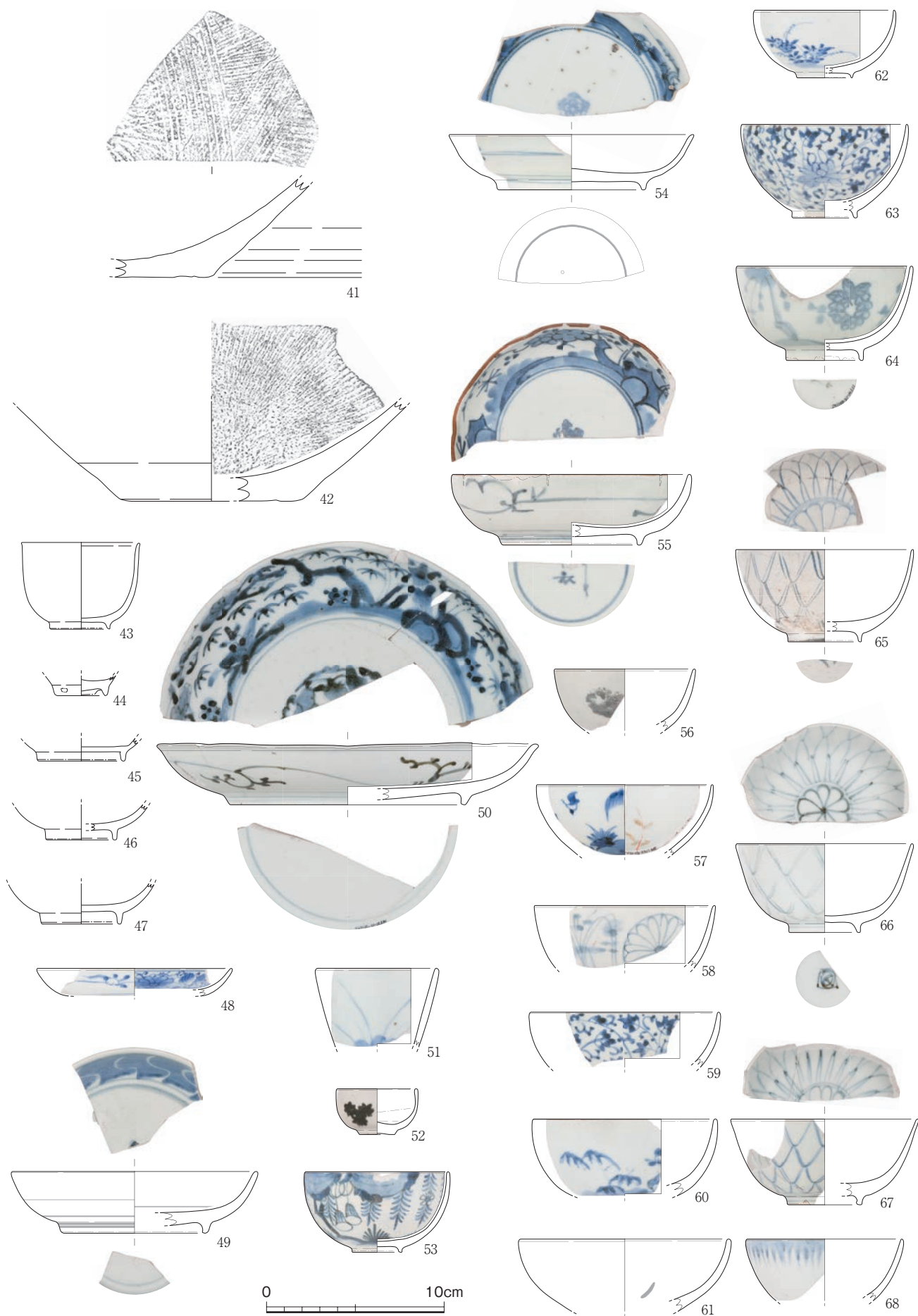
第9図 SK-5・6・16出土遺物実測図 (1/3)



第10図 SK-16・20実測図 (1/40)

SK-20 (第10図)

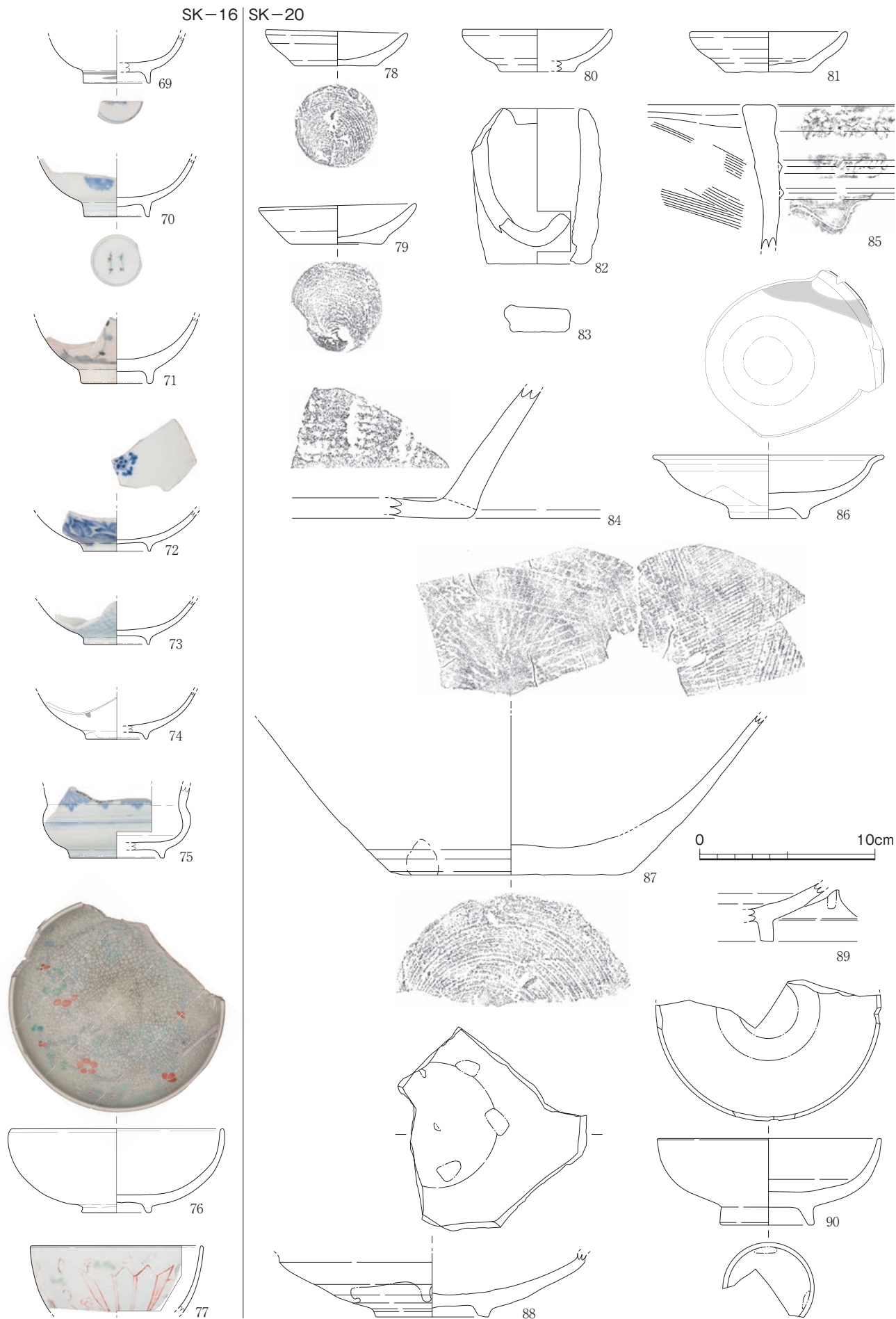
調査区中央で検出した不定形の土坑で、長軸3.83m・短軸1.4m以上、深さは最深部で0.59mを測る。埋土は黒色土で、しまりはゆるい。埋土中に、炭や木片等の有機物を含む。底面は全体的に平坦で、立ち上がりは若干急な傾斜を呈する。



第11図 SK-16出土遺物実測図② (1/3)

SK-20出土遺物（図版11、12 第12、13図）

78から81は土師器の小皿で、78から80は外面底部に糸切り痕があるが80は摩耗する。81の外面底部は、ヘラ切りがされる。82と83は土器質で82は器種不明であるが、83の栓の様な物と対である。84は陶器の甕で、内面に格子目のタタキ痕がある。85は瓦質土器の火鉢で、口縁外面に二条の突帯を貼り付け、印刻を施す。86から94は陶器である。86は皿で、内面に緑青色の灰釉をかける。口縁部の断面は被熱痕がある。見込みは蛇ノ目釉剥ぎがされる。87は播鉢で、胴部下部に指オサエ跡が3ヶ所残る。88は皿で、見込み及び外面豊付から高台の外裾部にかけて胎土目痕が見られる。89は鉢の底部片である。90と91は碗である。90は見込みに蛇ノ目釉剥ぎ、豊付釉剥ぎがされる。91は内面に白泥で叩刷毛目を施す、外面は白泥で蜚手を施す。92は鉢で、貫入が見られる。93は台付皿で、見込みから高台外面にかけて白化粧土を円状に施す。94は鉢で内面は白化粧土の上に施釉し、波状の刷毛目模様を描く。外面が口縁から黒褐色の灰釉をかける。高台に胎土目痕が2ヶ所残り、見込みには環状に砂目跡が残る。95から98は白磁である。95は小杯で、貫入が見られる。96は紅皿で菊花状に内面型打し、高台を貼り付ける。97は碗で、口縁に口鑄が施される。98は皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎがされる。99は陶器の小杯で、外面に不明な文様と二条の圈線を描く。見込みに砂が付着する。100から103は染付である。100は小杯で、外面に菊文が描かれる。101は碗で、外面胴部に桐コンニャク印判を施文する。102は皿で、内面に松竹梅文、外面に唐草文を描く。口縁は口鑄が施される。103は輪花碗で見込みに五弁花文が施され、外面は口縁に濃淡の差がある2種類の桜花文を交互に描く。104は変成岩製の基石である。



第12図 SK-16・20出土遺物実測図 (1/3)

第1 遺構面その他の遺構出土遺物（図版12～17、第13～19図）

105から109はSD-1から出土した遺物である。105から108は陶器である。105は灯明皿で、内外面に口ウが付着する。外面底部は糸切り痕が残る。106は皿で、内面に8本単位の拵目による調整を施す。107は鉢で、内面及び外面は鉄釉をハケ掛け後、外面から内面口縁部にかけて白化粧土をハケ掛けを施す。108は土鍋で、口縁を折り曲げて逆L字形に成形し、口縁部付近に把手を貼り付ける。109は白磁の赤絵小杯で、外面に赤絵の痕跡がある。

110から112、114はSD-10から出土した遺物で、110から112は陶器である。110は拵鉢で、鉄釉を全面に施し、内面は拵目を施す。111と112は碗で、111は内面及び外面に鉄釉をハケ塗り後、白化粧土をハケ塗りする。112は貫入が見られる。114は染付碗で、内面口縁部は袈裟襷文帯、外面は微塵唐草に蝶文を描く。

113、115、116はSD-11出土の遺物である。113は青花碗で、内面は一条の圏線、外面に文様を描かれる。115は染付皿で、内面に葉の文様、外面に圏線が描かれる。116は陶器の碗で、口縁に雨降文のような黄緑色の釉葉がかかる。

117から152はSK-12出土の遺物である。117から119は土師器で、117は焼塩壺である。内面及び外面はナデ調整を施し、外底は摩耗して調整は不明である。118と119は皿である。118は小皿で底部は糸切り痕、ヨコナデ調整が残り口縁部に煤が付着する。119の底部はヘラ切り痕、ヨコナデ調整が残る。120と121は陶器の灯明皿で底部に糸切り痕が残る。122は白磁の小杯で、貫入が見られる。123から137は陶器である。123は小杯で、高台から腰まで露胎である。124は色絵碗で、外面に赤釉で文様が残る。125は鉢で、見込み底部及び高台の外面から底にかけて砂が付着する。126は土鍋で、外面の口縁付近にヘラ押し痕がある。127は碗で、貫入が見られる。128から130は土瓶の蓋である。128と129は宝珠状の摘みが付く。130は鉄釉が掛かる。131は土瓶で、外面の口縁から胴下部まで鉄釉が掛かる、施釉部分に白化粧土で文字が描かれる。132は片口鉢で、片口部分は手捏ねである。133と134は鉢で、133は外面に白化粧土を塗布し、帯状に掻き取り、鉄絵と褐釉を掛け流す。その後、白化粧土の上に外面上部から内面にかけて透明釉を掛ける。134は外面に、褐色の灰釉を掛ける。135と136は拵鉢で、内面に拵目を施し、外面に鉄釉を掛ける。136は、高台外面及び内面から底部にかけて砂が付着する。137は碗で外面に1ヶ所、取っ手が付く。

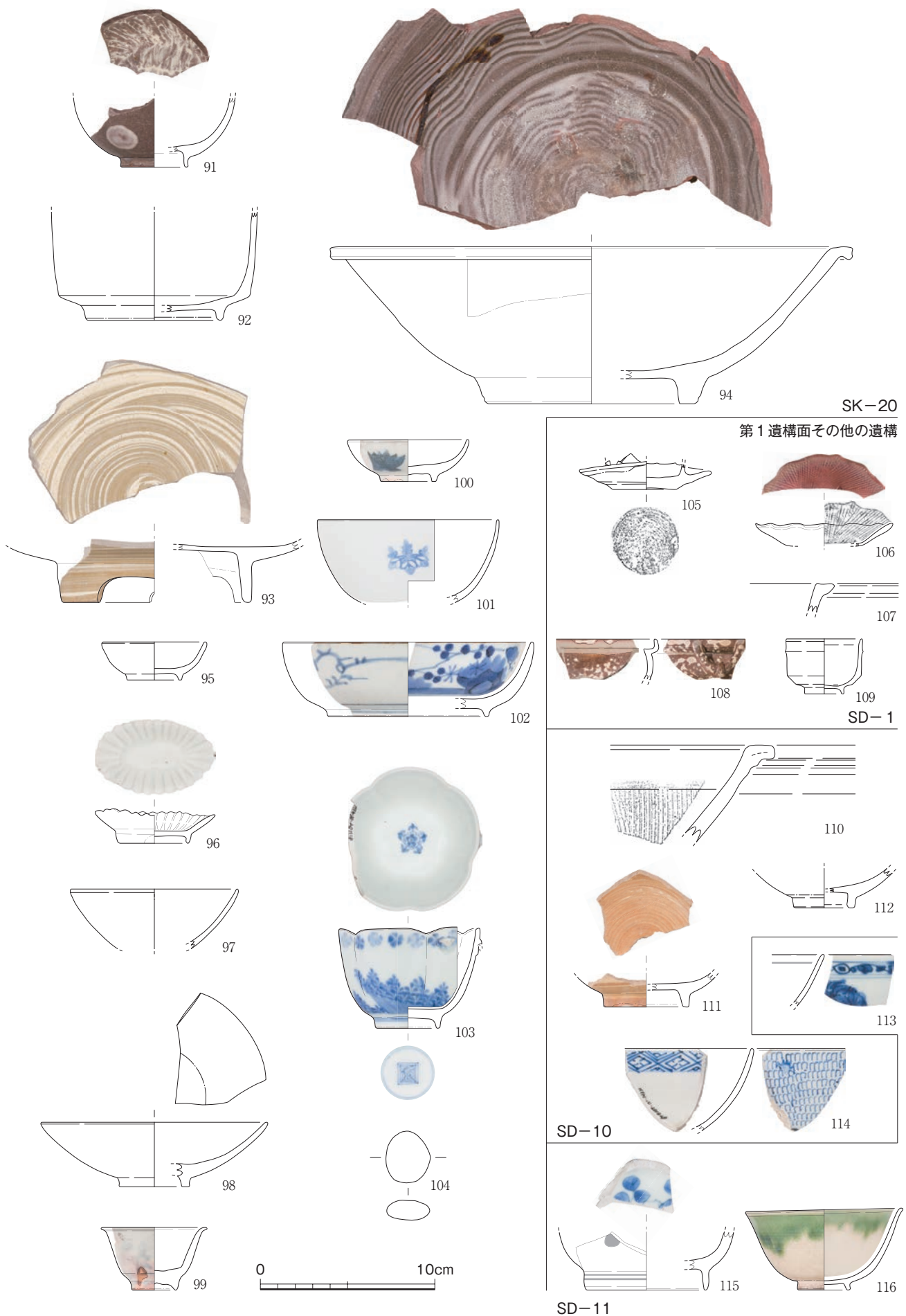
138から141は白磁である。138は小杯である。139は碗である。140は皿で、胴部の高台際近く及び高台に一条の圏線を描く。141は碗である。

142は青花の蓋である。

143から152は染付である。143と144は碗で143は見込み及び胴部に氷裂文が描かれる。144は外面に文様、高台に二条の圏線、見込みに一輪の花が描かれる。145は皿で、外面に草文が描かれる。146、147は碗である。146は外面胴部に雪持笹文を描く。147は内面口縁部に雷文、外面に鶴、雲文、裾部に襷文を描く。148は合子の蓋で、外面に氷裂文を描く。149は碗で、外面胴部に松の文様を描く。150、151は皿である。150の外部底面は、蛇ノ目凹形高台。151は型打ち成型で作られ、花卉型を呈する。見込みに山水文を描く。152は蓋で、外面の区画間の中に四方襷文を描く。

153と154はSK-13出土の皿で、153は磁器である。154は染付で、見込みに松、草文を描く。

155から157はSK-14出土の遺物である。155は陶器の皿で見込みに鉄釉を掛け、砂が付着する。156は染付碗で、外面口縁部に雨降文を描く。157は色絵の皿で、見込みは緑色で笹が描かれる。外面は赤絵により文様が描かれる。



第13図 SK-20・第1遺構面その他の遺構 (SD-1・10・11) 出土遺物実測図 (1/3)

158から160はSK-15出土の遺物である。158は土師器の皿で、外面底部は糸切り痕が残る。159は磁器の碗で、外面に鉄絵が描かれる。160は染付の皿で、見込みに菊花・草・蝶、外面胴部に唐草文を描く。

161から164はSK-17出土の遺物である。161は陶器の碗で、外面に文様が描かれる。162と163は磁器である。162は染付碗で、外面に文様が描かれる。163は仏飯器で、外面にコンニャク印判の様な文様に一部が見られる。164は土師質土器の灰器で、口縁部に格子状のタタキが残る。

165から168はSK-18出土の遺物である。165は陶器の碗で、貫入が見られる。166から168は染付である。166は皿で、内面に二重格子文を描く。167は花瓶で外面に草文を描く。168は段重で、外面に微塵唐草文を描き、重ね部に砂が付着する。

169はSK-21出土の瓦質土器の甕で、内及び外面の口縁にハケの上から横ナデ、外面胴部にハケ目、内面胴部にハケ目、外面胴部の一部は摩滅する。

170から181はSK-22出土の遺物である。170は土師器の小皿である。171から174は陶器で、171は土鍋である。口縁は、折り曲げて逆L字形成形し、口縁下に飛びカンナ文を施す。172は甕で、底部に火膨れがあり、外面は白化粧土がたれる。173は徳利で、外面上部は白化粧土の文様が描かれ、下部は鉄釉で笹文を描く。174は壺で、上野高取系と考えられる。175から181は磁器である。175は染付の蓮華で、内面に半菊文が描かれる。176と177は染付皿である。176は内面に折松文が描かれる。177は外面及び高台に圏線、内面に文様が描かれる。178と179は染付碗で、178は外面に草花文を描く。179は外面に梅花文、裾部に三条の圏線、氷裂文が描かれる。180は赤絵で外面に牡丹唐草文が描かれる。181は内面に色絵で、文様が描かれる。

182はSP-23出土の遺物である。白磁の菊花小皿で、押型成形される。高台内にハリ跡が1ヶ所、見込みにハマ跡が2ヶ所確認できる。

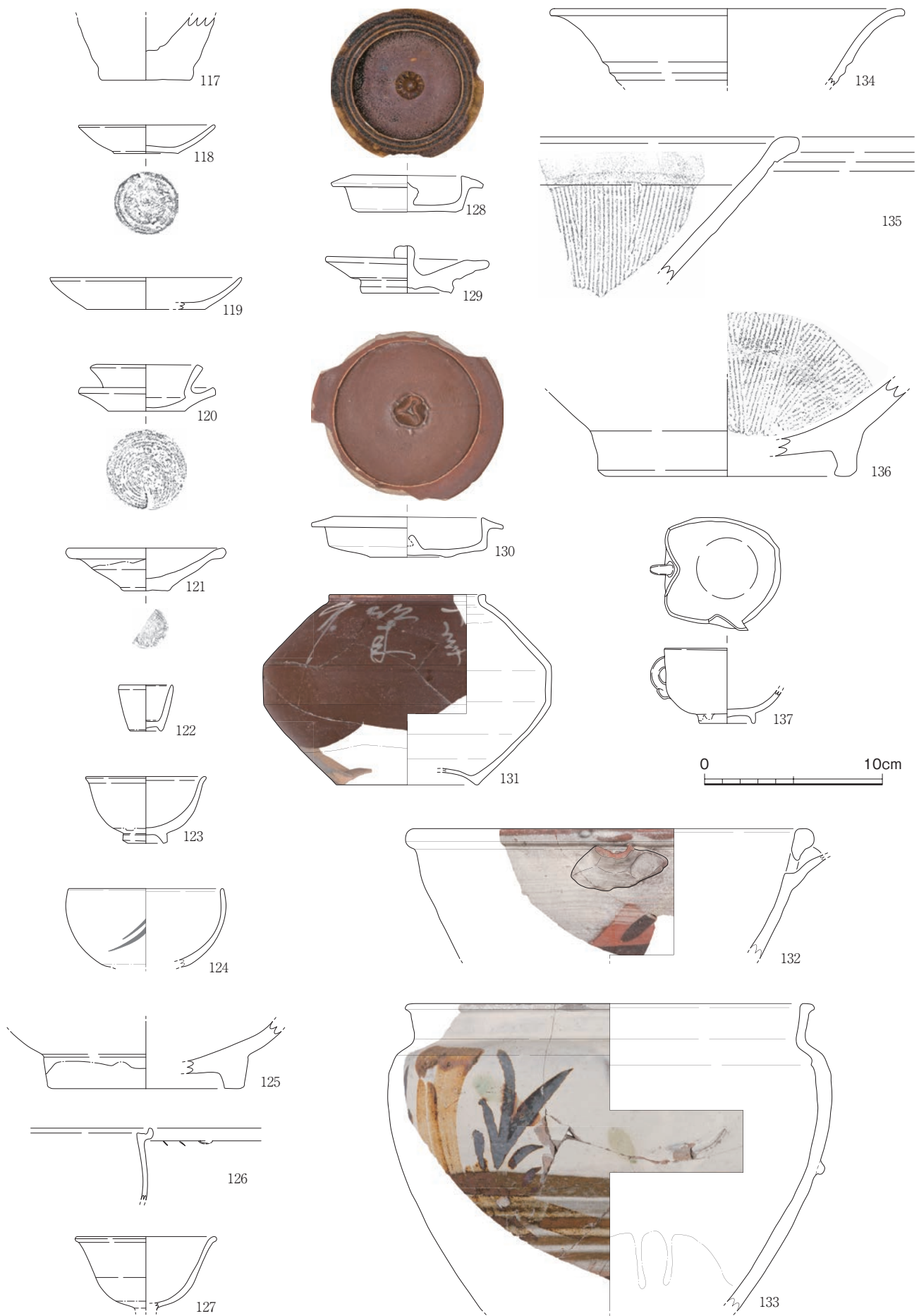
183と184はSK-24出土の陶器である。183は灯明皿で、外面底部は糸切り痕が残る。184は皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎする。

185はSK-25出土の染付碗で、外面に雪輪草花文が描かれる。

186から188はSK-26出土の遺物である。186と187は陶器で、186は土鍋である。187は鉢である。188は染付鉢で、高台の外面に二条の圏線と鋸歯文が描かれる。

189から199はSK-28出土の遺物である。189から191は陶器である。189は小碗で外面は釉だれし、内面に砂目跡が残る。190は鉢で、口縁部上部に六条の溝を施す。191は播鉢で、内面に櫛描文を施す。192はSK-20出土の遺物と接合した土師質の風炉である。外面はハケのちに斜め方向のミガキ、縦ナデの調整がされる。内面はハケのちオサエの調整がされる。193と194は陶器の碗である。193の内面は化粧土で刷毛掛けされる。194は貫入が見られる。195は白磁の碗である。196は陶器の鉢で、内面は白化粧土で波状に櫛搔きする。197は染付の皿で、見込みに花文が描かれる。198と199は染付の碗で、198は外面に花文が描かれる。199は外面に花唐草文が描かれる。

200から231はSK-29出土の遺物である。200と201は土師質土器である。200は播鉢で、9本単位の播目が施される。201は鉢である。202は瓦質土器の火鉢で、外面口縁部に印花を施す。203から221は陶器である。203は播鉢で、8本単位の播目が施される。204と205は皿である。204は見込みに胎土目痕が3ヶ所あり、胴部は釉だれがある。206は碗で見込みに山水文が描かれる。207から209は皿で、207の見込みは、蛇ノ目釉剥ぎがされ、高台と見込みに若干の砂が付着する。208は貫入が見られる。209は内面に、鉄絵が描かれる。210は壺で胎土目跡が、見込みに3ヶ所、畳付に4ヶ



第14図 第1遺構面その他の遺構 (SK-12) 出土遺物実測図 (1/3)

所残る。211は鉢で見込みに砂が付着する。212は皿である。213と214は火入で、213は筒形である。215は仏飯器である。216は碗で、内面及び外面に刷毛目模様を施す。217から219は皿で、217は内面及び外面に刷毛目模様を施す。218は見込みに刷毛目模様を施す。219は見込みに白土を掛けて刷毛目模様を施す、その上に砂目跡が4ヶ所残る。220と221は鉢である。220は内面は白化粧土でハケ掛け後、灰釉掛けを行い、外面は褐色の釉でハケ掛けを行う。高台内面は鉄漿によるハケ掛けを行う。221の口縁部は玉縁で肥厚である。外面下位は鉄漿を掛けると共に、白化粧土に櫛状掻き取りがされる。内面は白化粧土でハケ掛けを行う。

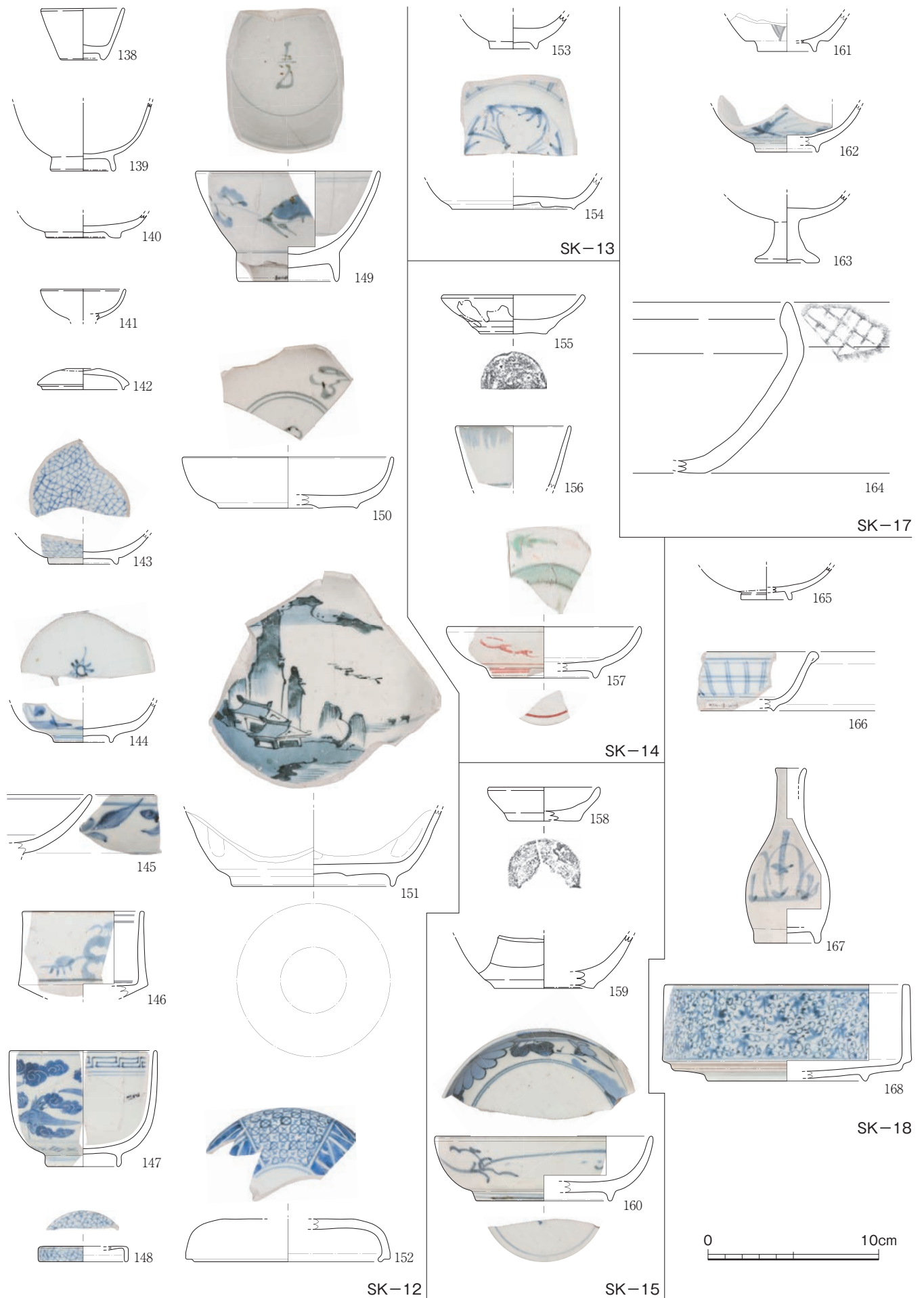
222から231は磁器である。222は白磁の皿で型押し成形がされ、見込みに花卉文様を陽刻する。223から226は染付の碗である。223は外面に、花唐草文が描かれる。224は胴部に文様が描かれ、高台に釉だれがある。225は見込みに薄い染付で、文様が描かれる。226は外面に、藤花文が描かれる。227は染付の鉢で、見込みに菊唐草文が描かれる。228は白磁の瓶で、内面に釉だれがある。229は磁器の瓶の頸部から口縁部で、頸部に文様が描かれる。230は染付の碗で、外面に山、船等が描かれ、高台付近に雷文が描かれる。231は染付の皿で、内面に折松葉文が描かれる。

232から236はSK-31出土の遺物である。232は陶器の播鉢で、口縁端部がくの字に内側に突出する。233は土師質土器の土鍋で、外面はハケメ調整が施される。234は陶器の播鉢で、12本単位の播目が施される。235は陶器の碗である。236は陶器の片口である。

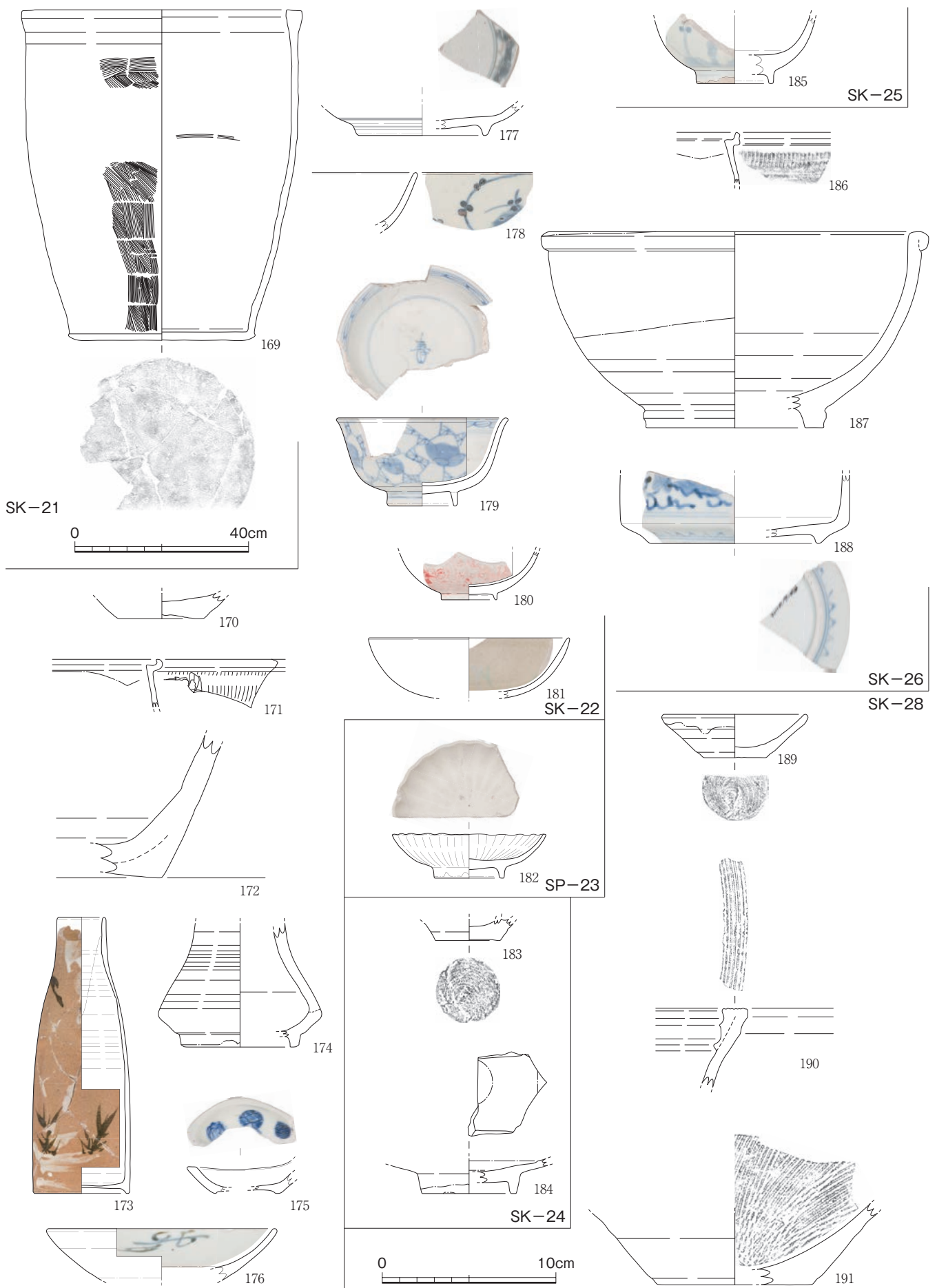
237はSK-32出土の染付碗で、外面に文様の一部を確認できる。

238と239はSD-35出土の陶磁器である。238は陶器の仏花瓶で、外面口縁部から内面にかけて茶褐色の鉄釉上掛けがされ、体部に鉄絵の笹文、褐色釉等で文様が描かれる。239は染付の皿で、見込みに葉文が描かれる。

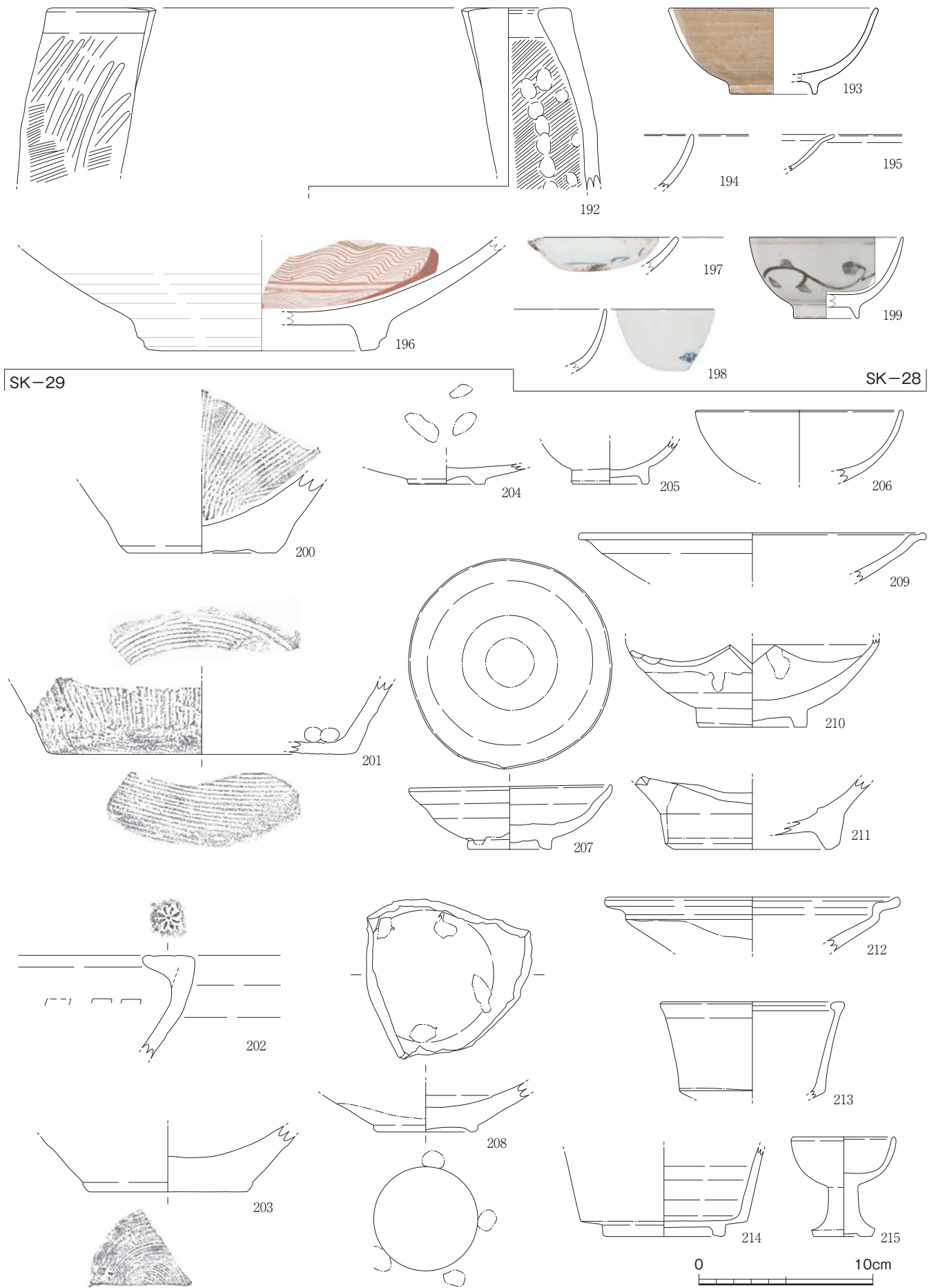
240から245はSK-36出土の遺物である。240は瓦質土器の火鉢で、外面口縁部付近に印花が施文される。241は陶器の碗で、内面から外面中ほどまで施釉する。242は白磁の皿で、器形は輪花を呈する。243は陶器の壺である。244は陶器の皿で、内面に白化粧土を掛け櫛状掻き取りにする。245は染付碗で、高台に「大明年製」と考えられる文字が描かれる。



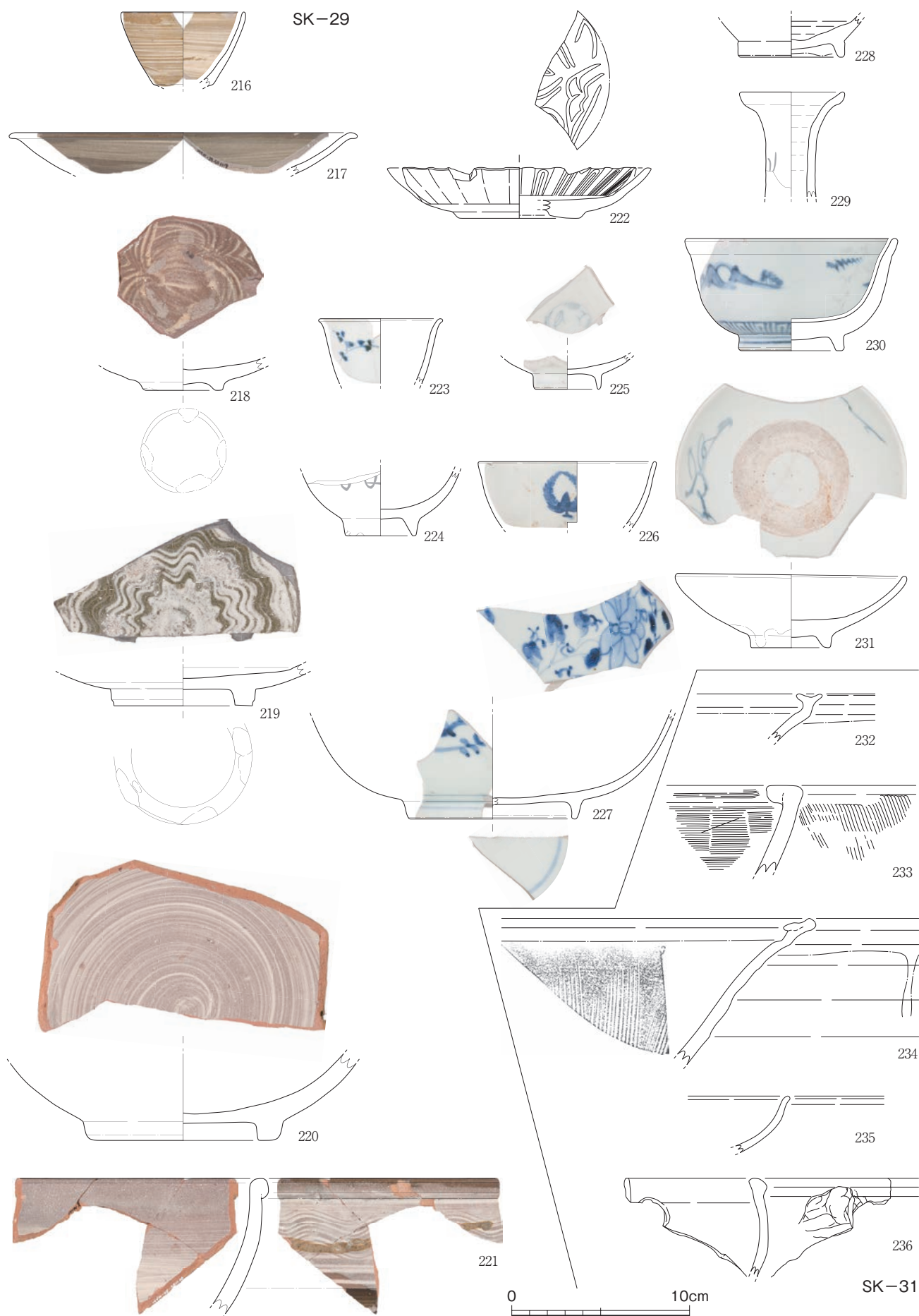
第15図 第1遺構面その他の遺構 (SK-12・13・14・15・17・18) 出土遺物実測図 (1/3)



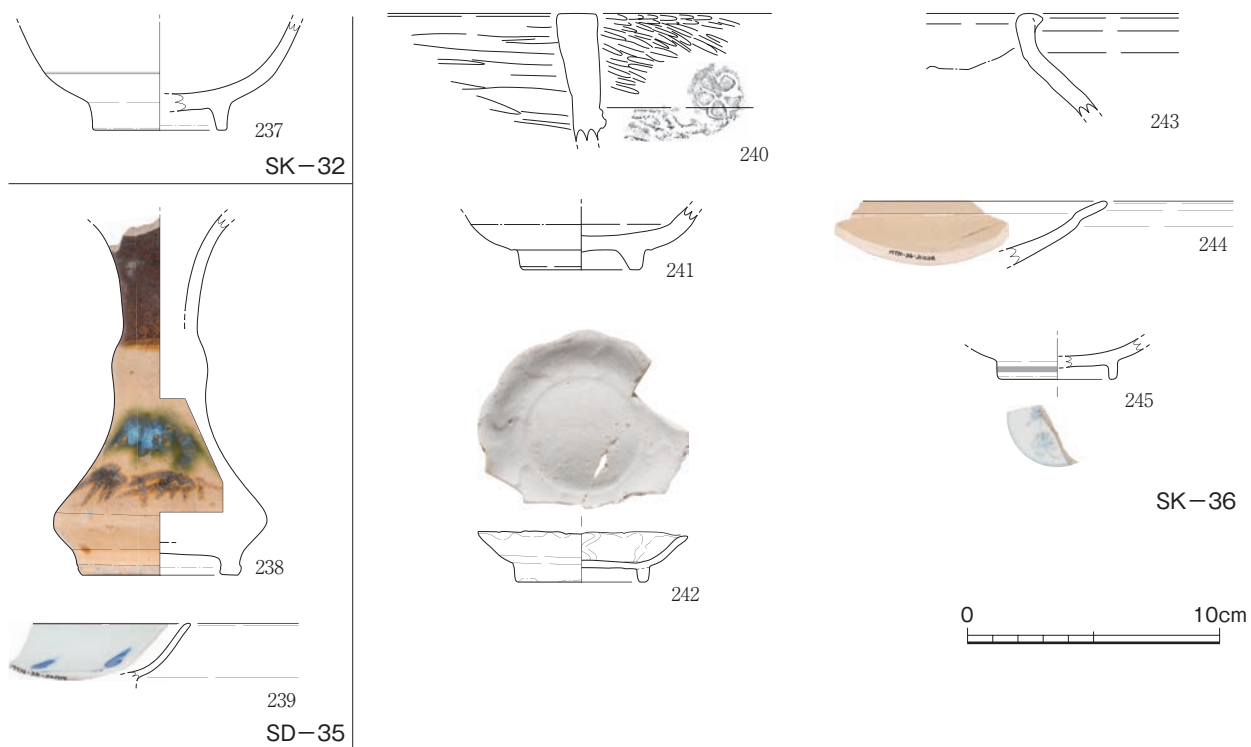
第16図 第1遺構面その他の遺構 (SK-21・22・SP-23・SK-24・25・26・28) 出土遺物実測図 (169は1/12、他は1/3)



第17図 第1遺構面その他の遺構 (SK-28・29) 出土遺物実測図 (1/3)



第18図 第1遺構面その他の遺構 (SK-29・31) 出土遺物実測図 (1/3)



第19図 第1遺構面その他の遺構（SK-32・SD-35・SK-36）出土遺物実測図（1/3）

2 第2遺構面

SA-37 (第21図)

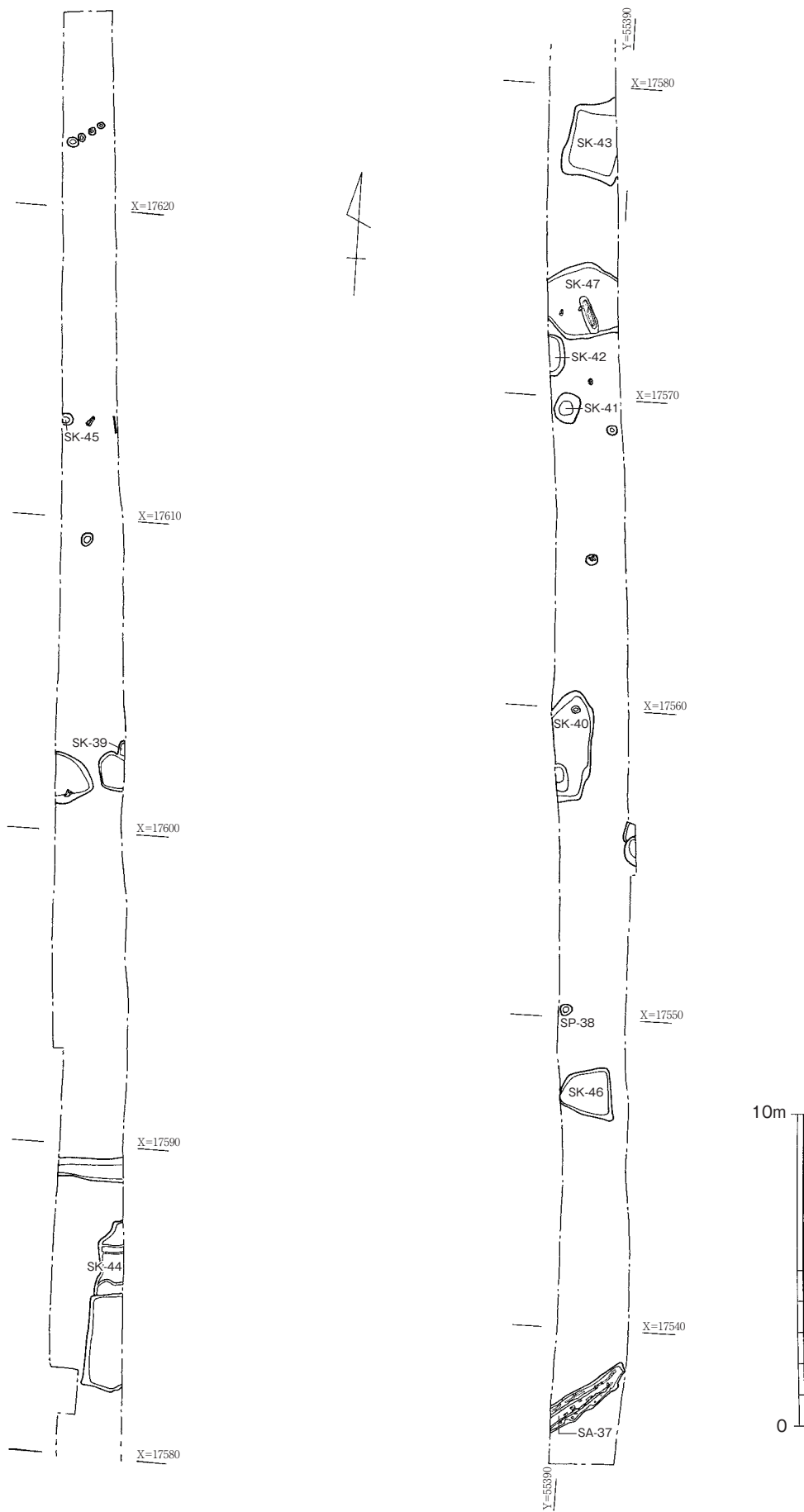
調査区南端で検出した土居の基礎と考えられる遺構である。遺構は、板状の木材と杭状の木材を用い、溝状となる。遺構は、長軸2.88m・短軸0.83m、深さは最深部で1.0mを測る。埋土の上層は灰白土で礫を含む、砂質である。中層は暗茶色土で、僅かに炭化物を含む。下層は、暗灰色の砂質である。西側は調査区外に伸びており全容は不明である。

出土遺物 (図版17、第22、23図)

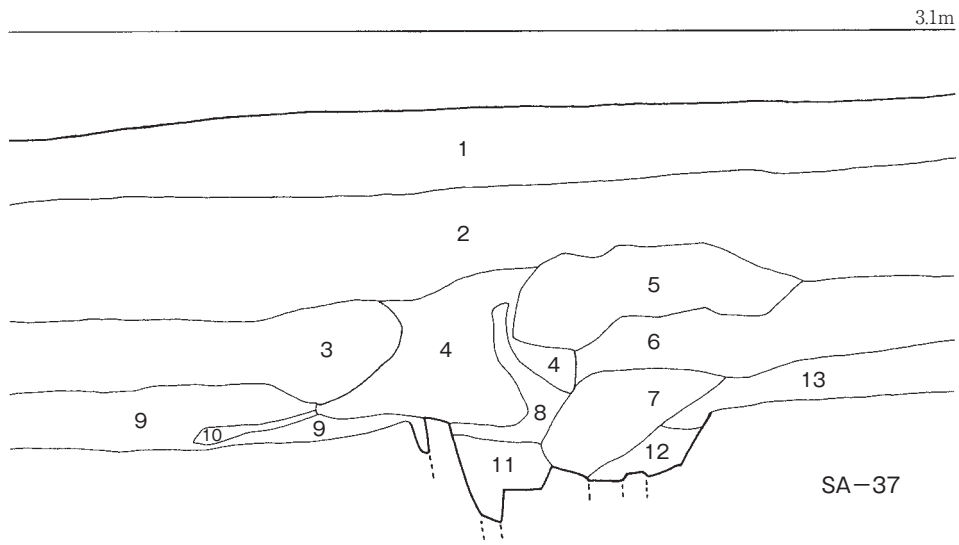
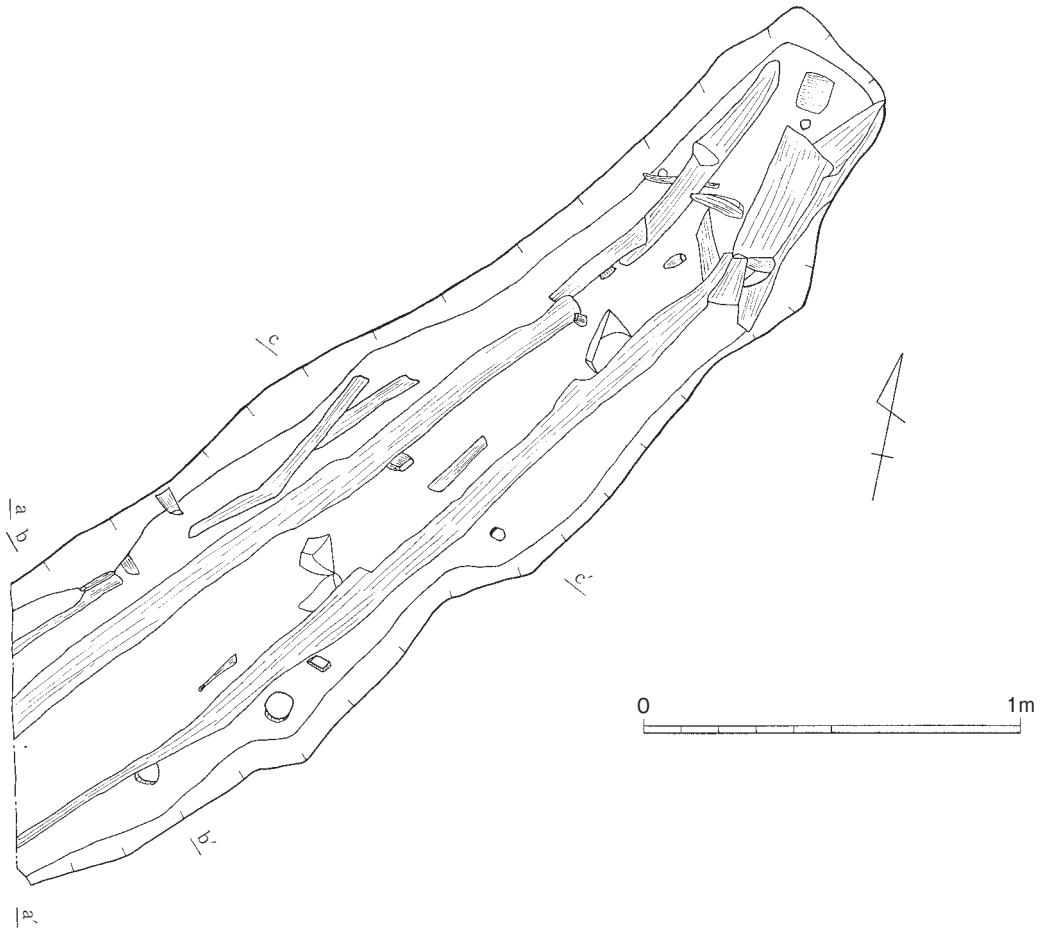
246は陶器の灯明皿で、底部は糸切り成形される。247は陶器の皿で、三鳥手のモチーフを見込みに刻印し鉄釉を全面掛けした後、印刻部に白化粧土を掛けて印刻部以外を拭きとって象嵌し透明釉を全面に掛ける。見込みに、窯当て具痕が3つ残る。248は陶器の鉢で、見込みに環状の砂目跡、高台内に砂目跡が残る。249と250は陶器の皿である。249は見込みに環状の砂目跡が残る。250は内面に、白化粧土を櫛状掻き取りし、その上に鉄釉を掛ける。高台は、貼り付け高台である。251は陶器の土鍋で、外面は飛び匏文が施される。252は陶器の鉢で、口縁部を白化粧土で塗った後、ハケでナデた様な跡が残る。253は陶器の菊皿で、畳付けに砂が付着する。254は陶器の鉢で、鉄釉をハケで塗った後に、白化粧を掛ける。255は白磁の壺である。256は陶器の鉢で見込み及び、高台内面、外面に砂目跡が残る。257は陶器の壺である。258は陶器の鉢で、内面腹部に鉄釉を塗り、上から灰釉を掛ける。口縁付近から外面にかけて、白化粧土を施す。外面は白化粧の上から文様の一部がみえる。259は白磁の壺と考える。外面はイッチン描きによる文様が描かれる。260は陶器の鉢で、外面底部は、糸切りにより成形される。261は陶器の壺である。262は陶器の茶道具で、外面に穿孔のある獅子頭が貼付される。263は磁器の小杯である。264は白磁の合子である。265は白磁の碗である。266は磁器の壺で、外面に耳が貼り付く。267は磁器の小杯で、内面の口縁付近に金色の雷文、見込みに青色で「青陽之春」の落款、草花文が描かれる。268は染付の碗で、外面胴部に松文、裾部から高台外側に四本の圈線が描かれる。269は染付の碗で、外面に葉文が描かれる。270は染付の杯で、外面に山水文が描かれる。271は染付の碗で、外面に氷裂文・菊花文が描かれる。272は染付の碗で、外面に丸文が描かれる。273は染付の皿で、見込みに文様が描かれる。274は陶器の皿で、見込みに緑釉が掛けられる。275から277は染付の皿である。275は見込み及び外面に蛸唐草文が描かれる。276は外面に唐草文が描かれる。277は外面及び見込みに、文様が描かれる。278は染付の徳利で、外面に遠山の文様が描かれる。279は染付の皿で、外面に唐草文が描かれる。280は染付の仏飯器で、外面に蛸唐草文が描かれる。281は染付の花瓶で、外面に山水文等が描かれる。282は染付の皿で、口縁に連弧文、花文が描かれ、外面に唐草文が描かれる。283は黒い基石である。

SP-38 (第24図)

調査区西側で検出した円形の小穴で、長軸0.4m・短軸0.34m、深さは最深部で0.27mを測る。埋土は茶黒色粘土で、しまりは弱い。底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。

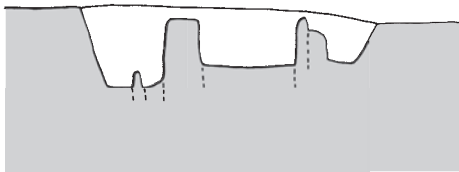


第20図 第2遺構面遺構配置図 (1/200)

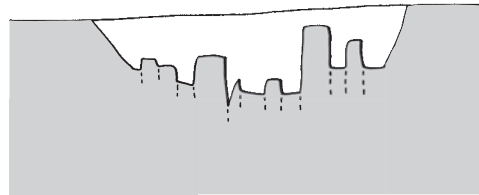


- SA-37 土層断面図
1. 茶色土層 (表土) 粘質強い
 2. 明茶色土層 粘質強い
 3. 明黄茶色土層 粘質強い
 4. 暗茶色土層 粘質強い
炭をわずかに含む
 5. 灰白色砂層 粘質強い
礫を少量含む
 6. 暗茶灰色土層 粘質普通
炭を少量含む
 7. 暗灰色砂層 粘質緩い
 8. 明黄灰色粘土層 粘質緩い
 9. 黄白色粘土層 粘質緩い
 10. 灰色砂層 粘質普通
 11. 青灰色粘土層 粘質緩い
石、砂利、陶器を多量に含む
 12. 青灰色粘土層 粘質緩い
橙の粒状の金属成分を含む
 13. 黄白色粘土層 粘質緩い

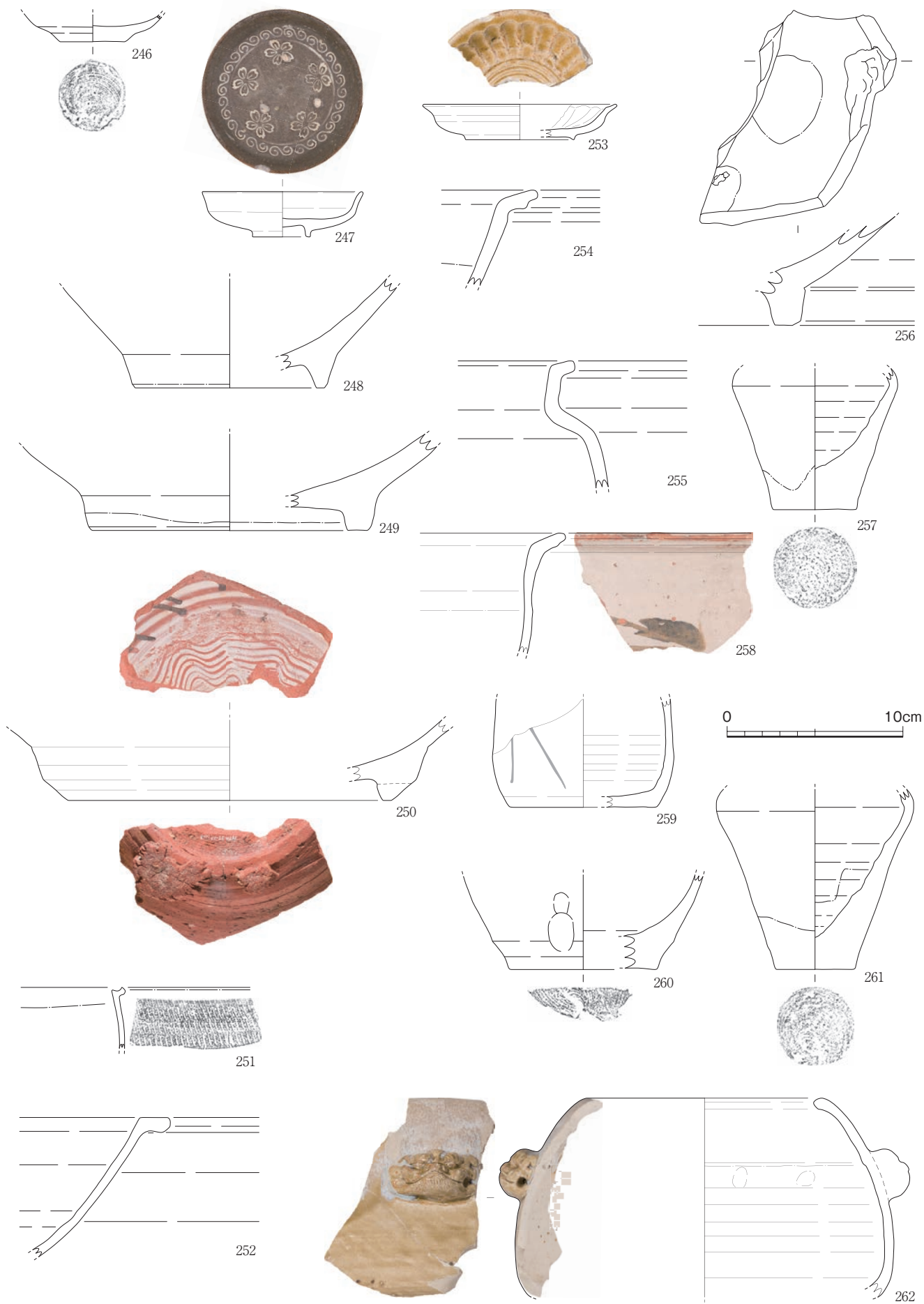
b ————— 2.3m b'



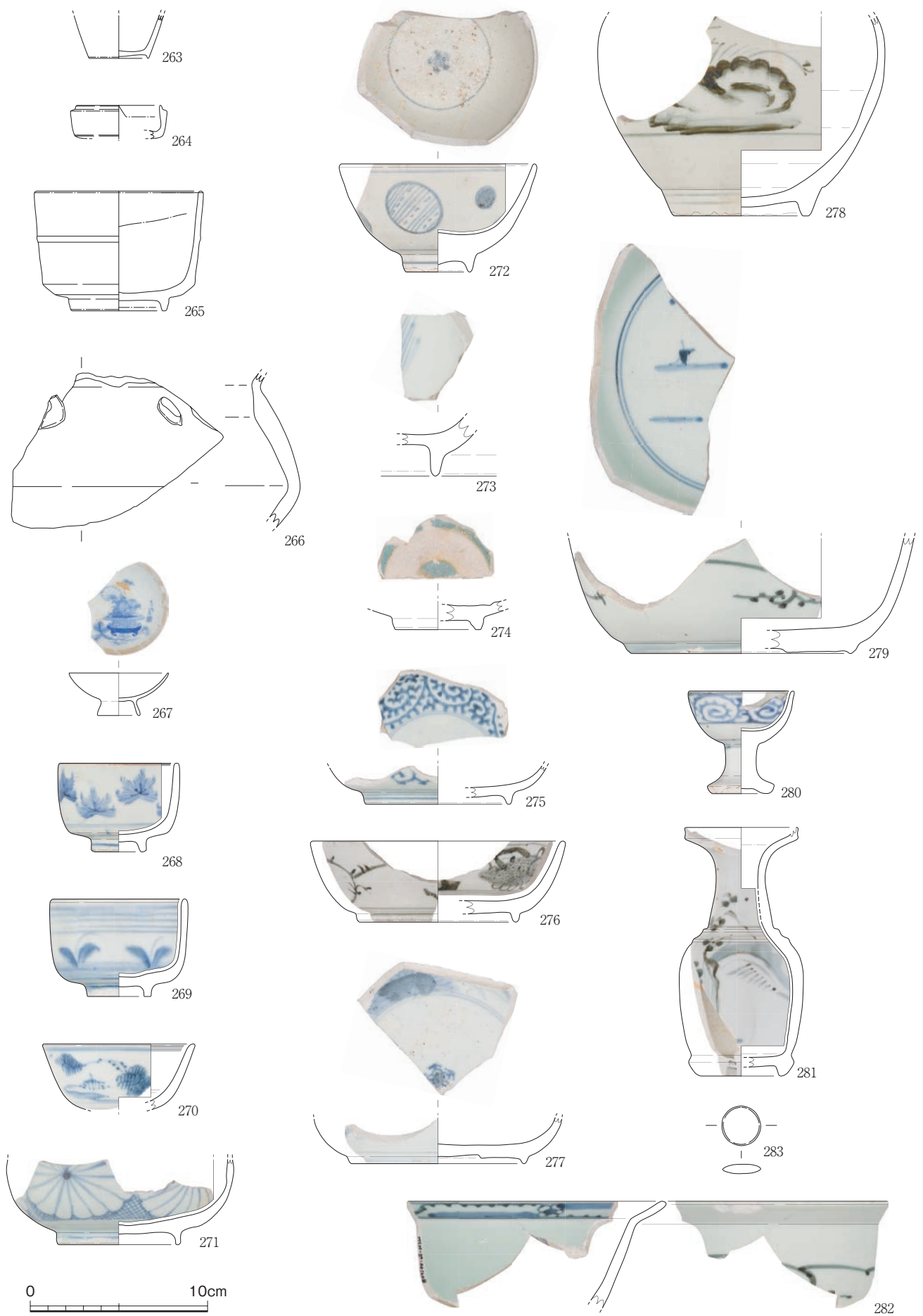
c ————— 2.3m c'



第21図 SA-37実測図 (平面図1/20、断面図1/40)



第22図 第2遺構面SA-37出土遺物実測図① (1/3)



第23図 第2遺構面SA-37出土遺物実測図② (1/3)

SK-39 (第24図)

調査区の東側で検出した不定形の土坑で、長軸0.5m以上・短軸0.3m以上、深さは最深部で0.15mを測る。遺構は第1遺構面で検出した、SK-6と切り合っており残りは僅かである。埋土は炭化物を含む、黄灰色粘土で、しまりは普通。底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版17、第26図)

284は陶器の鉢で、内面及び外面に鉄釉を施す。285は陶器の碗で、畳付け、胴部に砂が付着する。286は陶器の挿鉢で、14本単位の挿目が施され、外面底部は糸切りにより成形される。

SK-40 (第24図)

調査区西側で検出した不定形の土坑で、長軸2.9m・短軸1.16m、深さは最深部で0.27mを測る。埋土は暗茶色粘土で、しまりは弱い。底面は中央に向かって落ち込む、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。

SK-41 (第25図)

調査区の中央で検出した不定形の土坑で、長軸0.92m・短軸0.8m、深さは最深部で0.36mを測る。埋土は黒灰色粘土でレンガ、炭化物を含み、しまりはやや弱い。底面は全体的に水平で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版18、第26図)

287は陶器の碗で、見込みに窯当具痕が残る。288は陶器の鉢で、内面は白土による刷毛目装飾を施す。

SK-42 (第25図)

調査区中央で検出した不定形の土坑で、長軸1.3m・短軸0.48m以上、深さは最深部で0.3mを測る。埋土は暗茶色粘土で、底面は緩やかなレンズ状で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。西側は調査区外へ広がっているため、全容は不明である。

出土遺物 (図版18、第26図)

289は陶器の合子の蓋である。290は陶器の皿で、口縁部は鉄釉を掛け、皮鯨手風である。291は陶器の碗で、外面に文様の一部が描かれる。

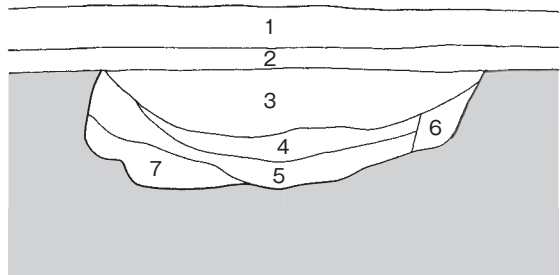
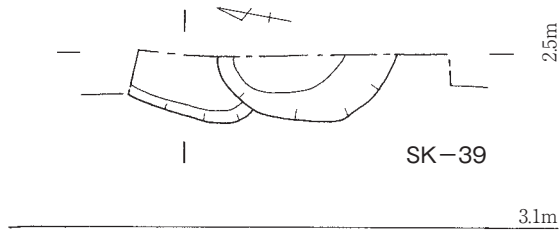
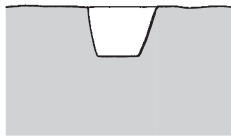
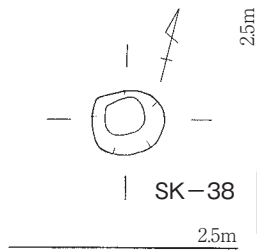
SK-43 (第25図)

調査区中央で検出した不定形の土坑で、長軸2.74m・短軸1.53m以上、深さは最深部で1.0mを測る。埋土は黄灰色粘土で、しまりは弱い。底面は全体的に水平で、立ち上がりは急な傾斜を呈する。

出土遺物 (図版18、19、20、第26、27、28、29図)

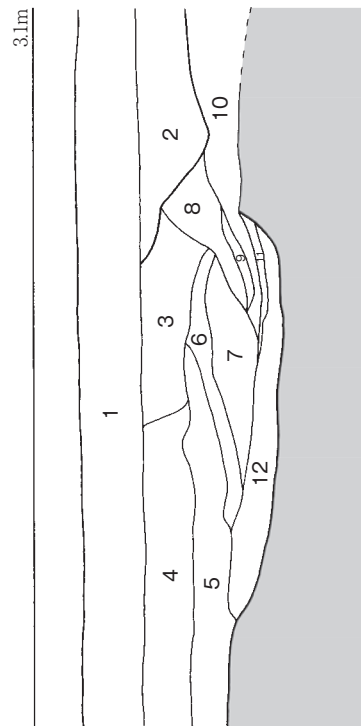
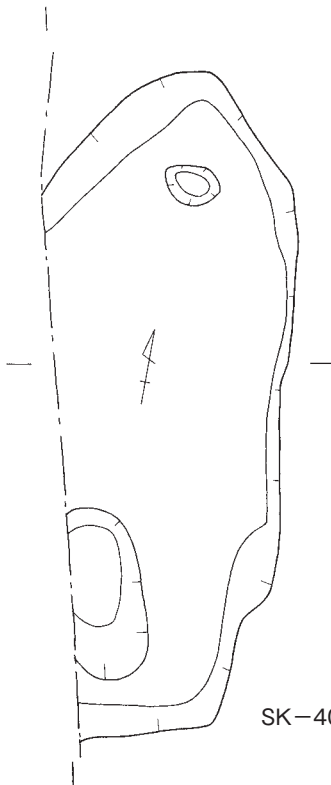
292から300は土師器の皿で、292から297、299の底部は糸切り成形され、ヨコナデ調整がされる。295の内面は黒煤が付着する。296の口縁部には、燃焼跡が残る。298は口縁部付近に墨書があり、外面底部は糸切り成形される。300の外面はヨコナデ調整がされ、外面底部はヘラ切りにより成形される。

301は土師質土器の焼塩壺で、外面に煤が付着する。302から329は陶器である。302は皿で、内面



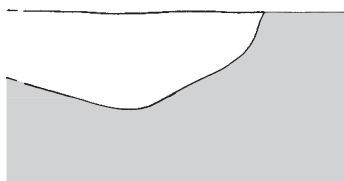
SK-39 土層断面図

1. 明黄白色土層(表土) 粘質強い かく乱
2. 茶褐色土層 粘質強い
3. 暗茶色土層 粘質強い 炭を少量含む
4. 暗灰色土層+黒色有機物層 粘質普通 少量の黄白色粘土を含む
5. 黒灰色土層 粘質普通 薄紅色の有機物、黄白色粘土を含む
6. 灰色土層 粘質強い 橙の粒状の金属成分を含む
7. 灰色土層 粘質強い 橙の粒状の金属成分を含む
8. 青灰色粘土層 粘質弱い



SK-40 土層断面図

1. 茶色土層(表土) 粘質普通
2. 暗茶色土層 粘質強い S8遺構埋土
3. 明灰色土層 粘質強い 炭を少量含む
4. 明灰色土層 粘質強い
5. 黄灰色土層 粘質強い
6. 黒灰色土層+黄白色粘土層 粘質普通 二つがまばらにある層
7. 黒灰色有機物層 粘質緩い
8. 黄白色土層 粘質強い 一部に黒色土を含む
9. 黒色有機物層 粘質緩い
10. 黄灰色粘土層 粘質緩い
11. 黒灰色有機物層 粘質緩い
12. 茶灰色粘土層 粘質緩い
13. 青灰色粘土層 粘質緩い



第24図 SK-38・39・40実測図 (1/40)

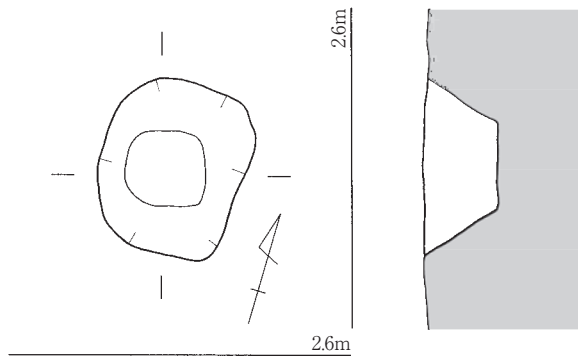
から外面口縁部にかけて鉄釉の釉だれが広がる。303は小杯である。304は碗で、口縁部に銅緑釉が施釉され、高台から腰部まで露胎である。305は碗で、内面及び外面に貫入が見られる。306から308は皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎがされる。309は壺で、外面底部に貝の目跡が残る。310と311は鉢である。310は外面底部に糸切り痕が残る。311は見込みに大量の砂が残る。312は瓶で、内面及び高台壘付は無釉で、高台内と体部下半に鉄漿を施す。313は鉢で、見込みに砂が付着する。314は皿で、見込みが釉剥ぎされる。315から320は播鉢である。315は11本単位の播目が施される。316は9本単位の播目が施される。317、318は口縁部に鉄釉を施す、櫛描文の単位は不明である。319は内面に播目を描く、単位は不明である。320は外面底部に胎土目跡が残る。321は皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎのち鉄漿を塗布する。蛇ノ目釉剥ぎの外側は、1.4cm幅で白化粧土を施した後、櫛搔きが施される。

322は壺で、内面及び外面の胴下位に鉄釉刷毛掛けが施される。323は肥前系京焼風の碗で、見込みに鉄釉で山水文を描く。324は花生である。325から327は皿である。325と327の見込みは、蛇ノ目釉剥ぎが施される。326は内面に打刷毛目を施す。328は汽車土瓶で、外面に鉄釉を施し、その上に白化粧土で文字、緑釉で草文を描く。329は鉢で、内面は白化粧土で刷毛目模様が描かれる。

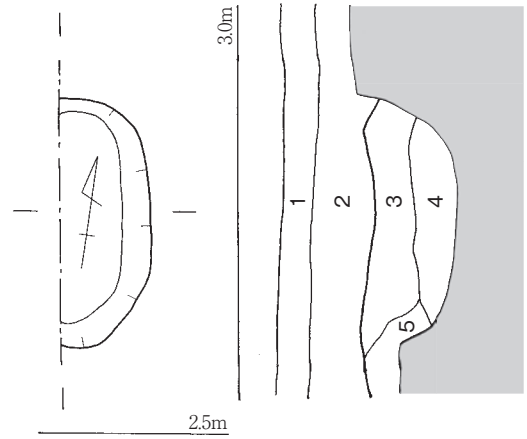
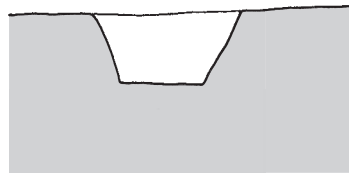
330は白磁の小杯で、外面に柿右衛門系にごし手風楓が描かれる。331は白磁の碗である。332は磁器の皿で、器形は花卉形を呈する。333は青磁の碗で、高台が高い。334は陶器の小杯で、器形は端反する。藁灰釉が掛けられ、外面に草文が描かれる。335から345は染付碗である。335の外面には葦文が描かれ、壘付けに砂が付着する。336は外面に草花文が描かれる。337は外面に草花文と宝文が描かれる。338は草花文が描かれる。339は外面に楓文が描かれる。340は外面に蛇籠草花文が描かれる。341は外面に暗青色の染付で、草文が描かれる。342は外面に草文が描かれる。343は外面に花卉文、柿文が描かれる。344は外面に竹文が描かれる。345は見込みに菊文、外面に草花文が描かれる。

346は染付の皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎがされる。347は染付の手塩皿で、見込みに草花文、外面に唐草文が描かれる。348は染付の碗で、内面に松文を描く。349は染付の皿で、内面は半菊唐草文、外面は唐草文、高台内は「大明年製」が描かれる。350は陶胎染付の瓶で、壘付に砂が付着する。

351と352は染付の皿である。351は花卉形を呈し、内面は菊唐草文、外面は唐草文、見込みにコンニャク印判の五弁花、高台内に「全」の文字が描かれる。352の器形は輪花を呈し、外面に唐草文、内面に花唐草文、外面の裏銘に呉須染付による渦福が描かれる。



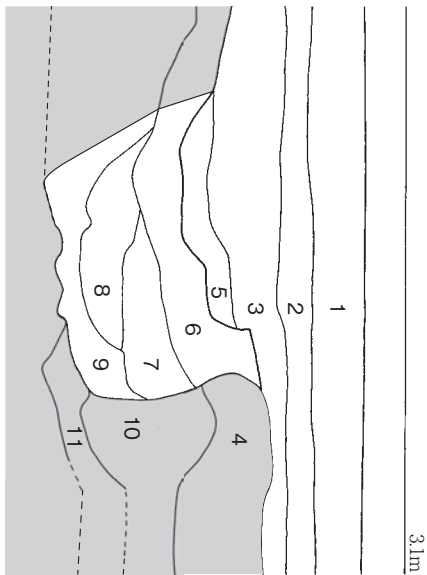
SK-41



SK-42

SK-42 土層断面図注記

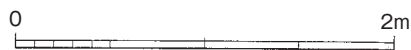
1. 明茶白色土層 (表土)
粘質強い
2. 暗茶色土層
粘質強い 石、礫を含む
3. 黄黑色土層
粘質普通 黄土色が強い
4. 青灰色土層
粘質強い 黄色土を少し含む
5. 黒色土層
粘質少し緩い 木を含む



SK-43

SK-43 土層断面図注記

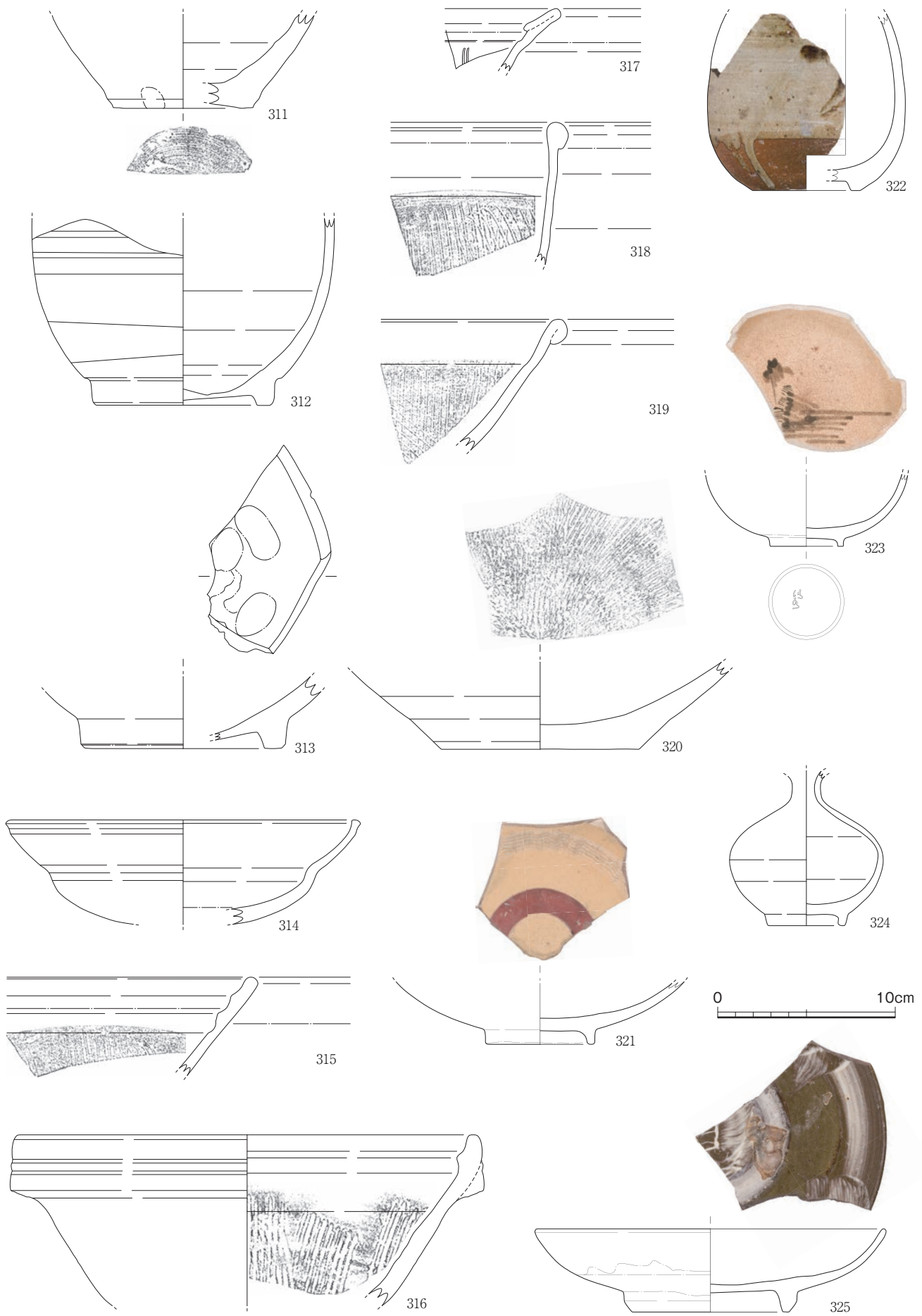
1. かく乱 粘質強い
2. 明茶色土層 粘質強い
3. 暗茶色土層 粘質強い 瓦、炭を含む
4. 黄灰色粘土層 粘質普通
5. 黒色土層 粘質強い 瓦、陶磁器、炭を含む
6. 黄灰色土層 粘質強い 炭を少量含む
7. 茶灰色土層 粘質少し緩い 木、炭を含む 土色は茶が強め
8. 黒灰色土層 粘質緩い 木くず、炭を多量に含む
9. こげ茶色土層 粘質普通 木くず、貝殻を多量に含む
10. 青灰色粘土層 粘質緩い
11. 暗青灰色粘土層 粘質緩い 木くず、貝殻を少量含む



第25図 SK-41・42・43実測図 (1/40)



第26図 第2遺構面SK-39・41・42・43出土遺物実測図 (1/3)



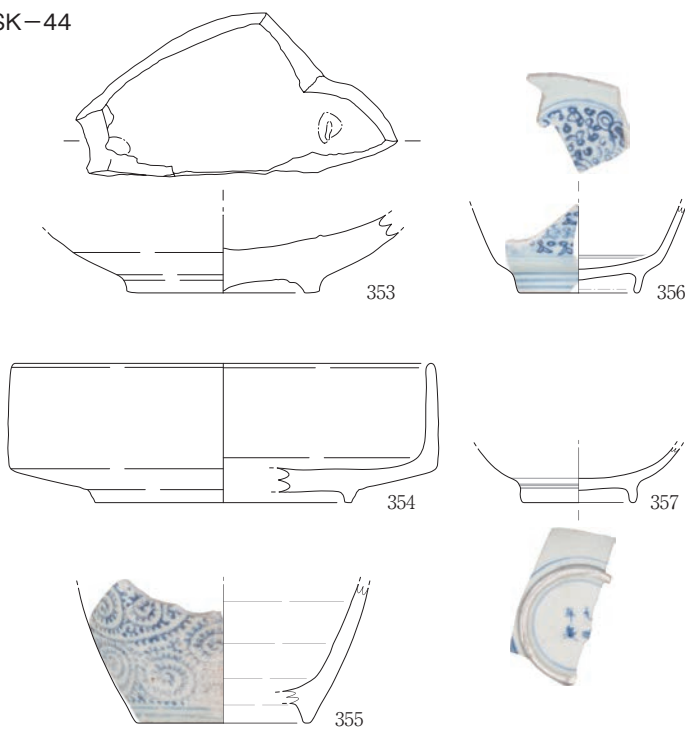
第27图 第2遺構面SK-43出土遺物実測図② (1/3)



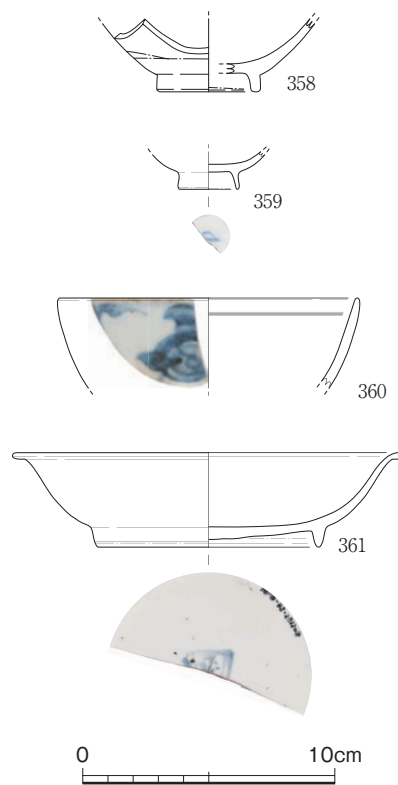
第28图 第2遺構面SK-43出土遺物実測図③ (1/3)



SK-43 SK-44



SK-45



第29図 第2遺構面SK-43・44・45出土遺物実測図 (1/3)

SK-44 (第30図)

調査区の中央で検出した不定形の土坑である。遺構は、第1遺構面で検出したSK-20に切られ、残りは僅かである。長軸0.9m以上・短軸0.67m以上、深さは最深部で0.1mを測る。埋土は青灰色粘土で、しまりは弱い。底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (図版20、第29図)

353は陶器の皿で、見込みに胎土目が2ヶ所残る。窯当て具痕が残る。354は陶器の銅鑼鉢で、茶道具である。高台内に窯当て具痕が残る。355は染付の瓶で、外器面に蛸唐草文が描かれる。356は染付の碗で、高台の外面に三条の圈線、見込みと外面に文様を施す。357は染付の碗で、外器面の裾部から高台にかけて三条の圈線と文様の一部が描かれる。高台内に、一条の圈線と、「大明年製」が描かれる。

SK-45 (第20図)

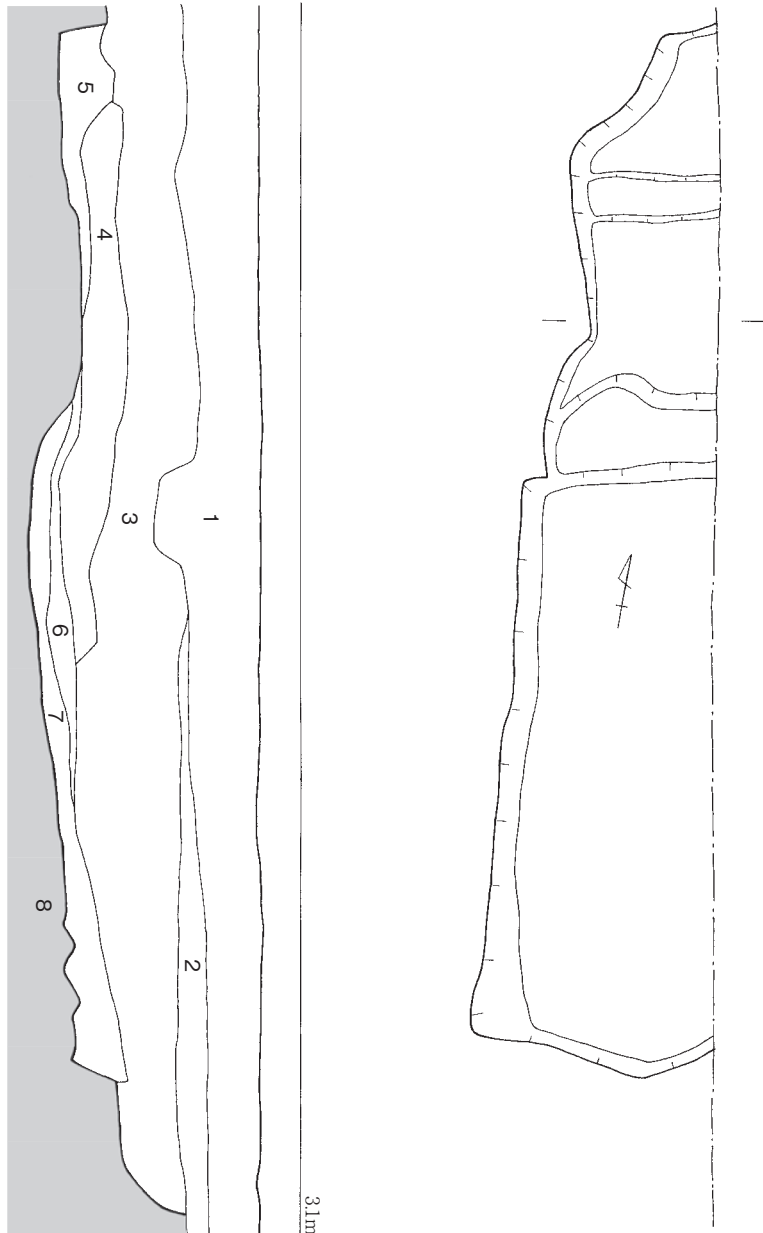
北西側で検出した円形の小穴で、長軸0.34m以上・短軸0.33m、深さは最深部で0.04mを測る。埋土は灰色粘土で、底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈する。

出土遺物 (第29図)

358は陶器の碗で、胴部外面、高台、高台内面に鉄釉のハケガケが施される。359は染付の小杯で、高台内に深川製磁の商標が描かれる。360は染付の碗で、外面に文様が描かれる。361は染付の皿で、高台内に文様が描かれる。

SK-46 (第31図)

調査区北側で検出した不定形の土坑で、長軸1.66m以上・短軸1.98m、深さは最深部で0.3mを測る。埋土は灰色粘土で、少量の褐色土がブロック状に含む。底面は全体的に水平で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。



SK-44

SK-44 土層断面図注記

1. かく乱 粘質強い
2. 暗茶色土層 粘質強い
3. 黒茶色土層 粘質強い
4. 青灰色土層 粘質強い
5. 黄灰色土層 粘質強い
6. 茶色土層 粘質普通 木を多量に含む
7. 黒灰色土層 粘質緩い 黒色の有機物を多量に含む
8. 青灰色粘土層 粘質緩い

2.5m



0 2m

第30図 SK-44実測図 (1/40)

3 第3遺構面

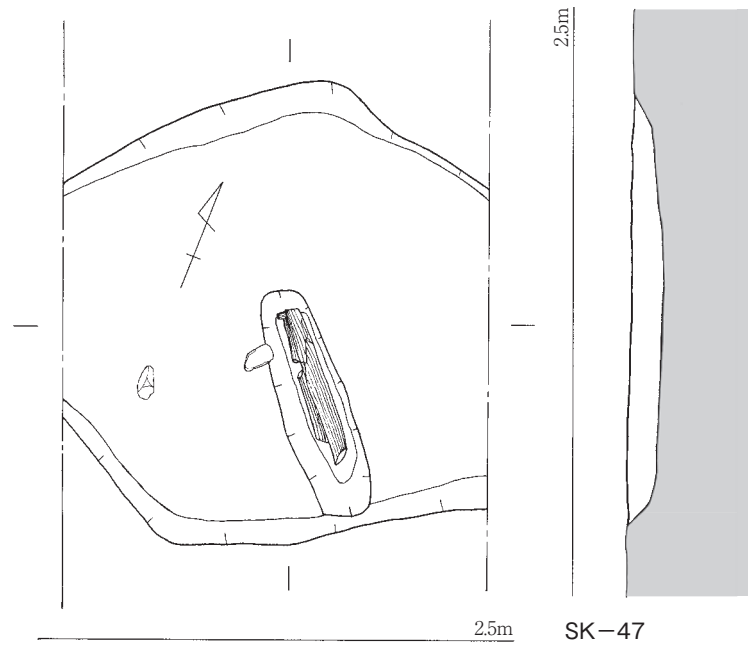
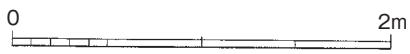
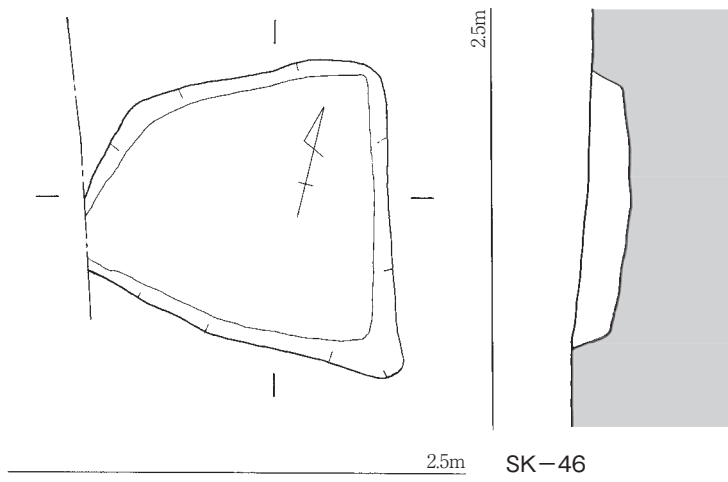
SK-47 (第31図)

調査区中央で検出した不定形の土坑で、長軸1.9以上・短軸2.24m以上、深さは最深部で0.16mを測る。埋土は黒色粘土で、しまりは弱い。底面で加工された木材を検出し、全体的に水平で、立ち上がりは比較的急な傾斜を呈する。

その他の遺構面出土遺物 (図版20、第32、33図)

362は瓦質土器の火鉢で、胴部は多角形を呈し、脚部と火鉢部は別個に作られ接合されている。外面は丁寧な調整だが、内面はナデ、刷毛目や指圧痕が明瞭に残る。外面の施文については、型押しによる方形区画内に珠文の陽刻、外面区画の窓枠はミガキを施す。363から367は陶器の碗である。363の口縁部は、内面及び外面に緑釉が掛けられる。364は外面下部から高台内にかけて露胎で、見込みにハマ痕が残る。365は貫入が見られる。366は外面に葉文が描かれる。367は見込みに山水文が描かれる。

368は陶器の皿で、見込みに胎土目痕が3ヶ所残る。369は陶器の碗で、高台内面に砂が付着する。370は陶器の皿で外面胴下部に粒状の突帯、白化粧土を施す。371は青磁の皿で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。372は陶器の皿である。373は陶器の蓋で、外面は露胎で直に播目文、その上に白化粧土で絵付けがされる。374は陶器の甕である。375は陶器の鉢で、内面口縁部から外面にかけて黄褐色の灰釉が施釉される。376と377は陶器の播鉢で、播目の単位は不明である。377は外面胴下部に胎土目跡が2ヶ所、見込みに重ね焼きの痕跡がある。378は青磁の皿で、貫入が見られる。379は磁器の碗で、高台内に砂が付着する。380は白磁の皿で、見込み及び畳付けが釉剥ぎされ、砂が付着する。381は染付碗で、見込みにコンニャク印判の五弁花文が施文され、外面に区画文が描かれる。382は染付碗で、草花文が描かれる。383は染付の杯で、外面裾部に二条の圏線、口縁部付近に文様が描かれる。384は白磁の杯で、高台内に文字が描かれる。385は染付の碗で、外面に桐文が描かれる。386は染付の蕎麦猪口で、外面に二重格子文が描かれる。387は染付の盃で、銅板刷により見込みに鳥・藤など描く。388から390は染付碗である。388は外面に唐草文が描かれる。389は外面に葉文が描かれ、畳付けに砂が付着する。390は外面に区画間文、見込みに鳥が描かれる。391は染付の蓋で、外面はよろけ縞文、つまみ外面に二条の圏線が描かれる。内面の天井に花文及び一条の圏線が描かれ、口縁部に雷帯文が描かれる。392から394は染付の碗である。392は蓋つきの可能性がある。外面に草花文が描かれる。393は口縁内面に区画文、外面に文様が描かれる。394は見込み及び外面に草花文が描かれる。395から397は染付の皿である。395は内面に花唐草文、見込みに五弁花文、外面に唐草文が描かれる。396は見込み及び外面に、山水文を描く。高台に、割れ部分を補修した痕跡がある。397の器形は輪花を呈し、外面及び内面は唐草文、見込みに環状松竹梅文を描き、高台内面に「大明年製」が描かれる。



第31図 SK-46・47実測図 (1/40)

4 出土土製品（図版 20、第 34 図）

398から402は土人形である。398はSD-10から出土しており、押型成形により作られた、人形の顔の部分である。399はSK-20から出土した土馬の首から頭の部分で、手捏ねにより作られる。400はSK-2から出土の手捏ねにより作られた、人形である。401はSD-35から出土した土馬と考えられる人形の胴部であるが鞍の造形等はなく、手捏ねにより作られる。402はSK-20から出土の手捏ねにより作られた、人形である。

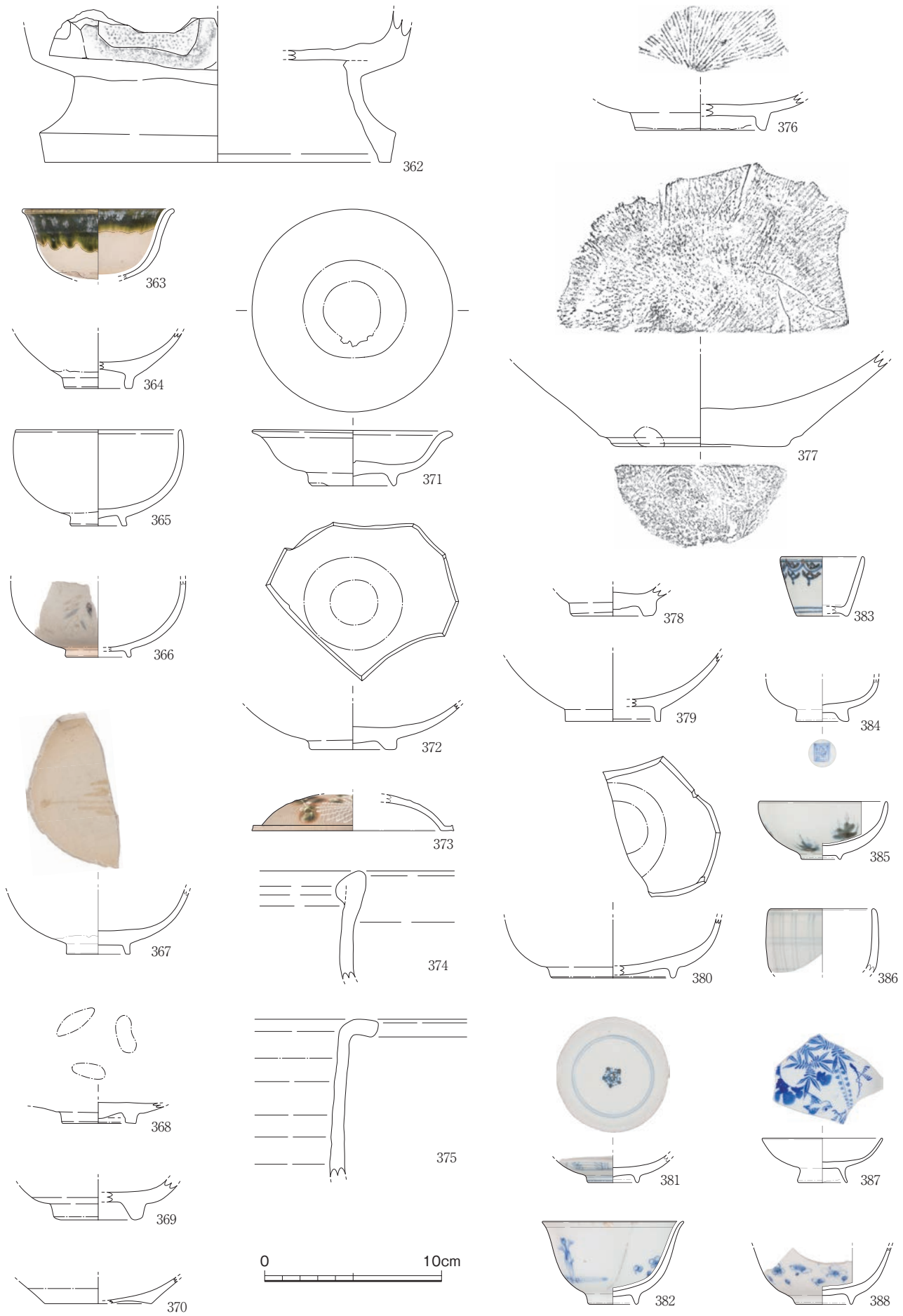
403から405は手捏ねにより作られた、管状土錘である。403はSD-35から出土、404と405は第3遺構面から出土の遺物である。406はSK-28から出土した土鈴で、手捏ねにより作られる。

5 出土瓦（図版 21、第 35～37 図）

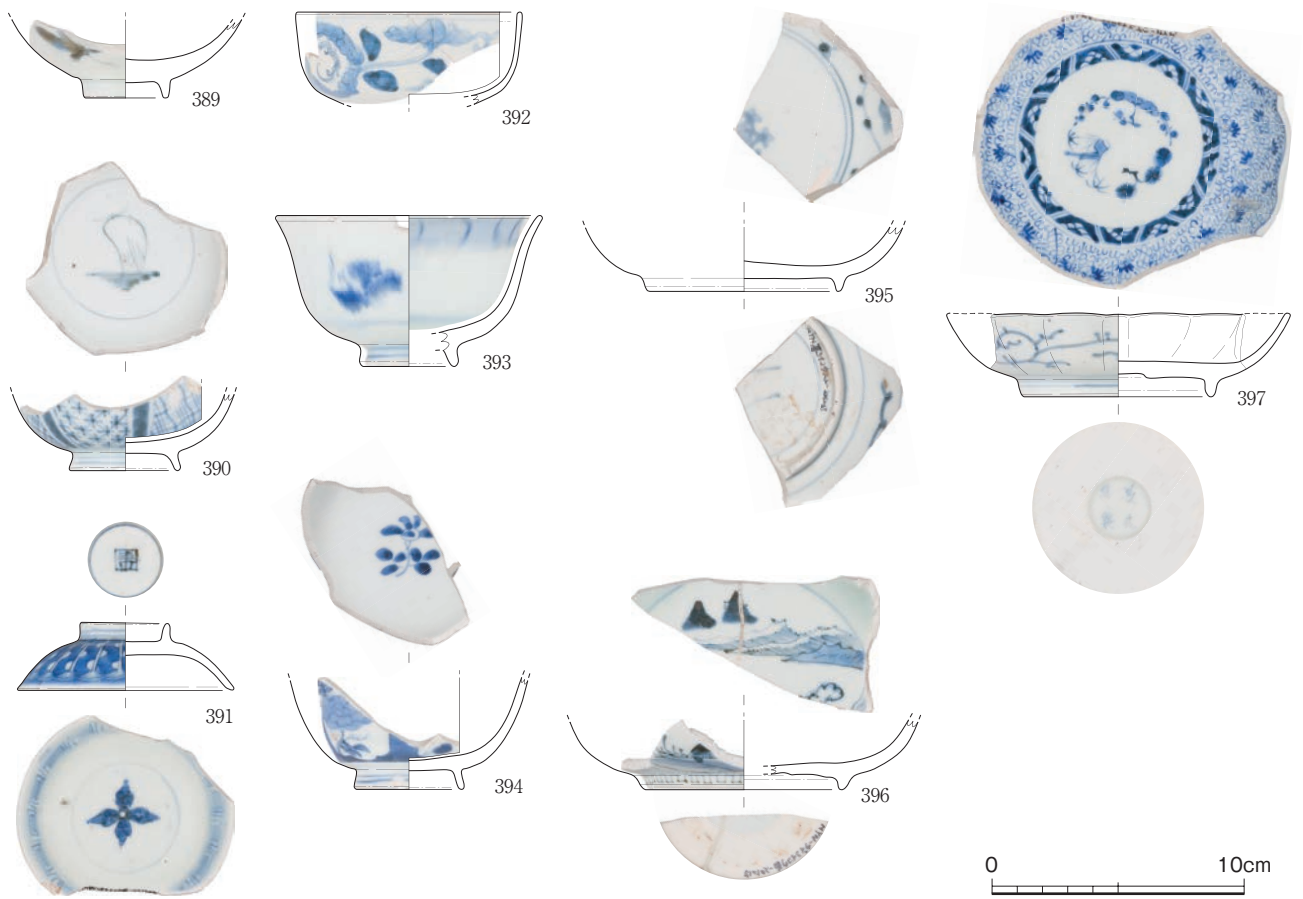
407から410は丸瓦である。407はSK-26から出土し、凹面布目痕が残り、凸面はヘラケズリ後ヨコナデが施される。408はSK-29から出土し、凹面はケズリ、凸面はナデによる調整がされ、釘穴が残る。409は第3遺構面出土で、凹面はケズリと面取りが施され、また蓆痕が残る。凸面はナデ仕上げによる調整が施される。410はSK-18出土で、凹面に布跡が残る。411はSK-20から出土の瓦で、表面に溝を施し、裏面の端に溝を施す。412はSK-22出土の平瓦で、全体的に摩滅が著しいが、ナデによる仕上げがされる。413と414は切り込み棧瓦で、SD-10からの出土である。413の凹面はナデ仕上げがされ、小口部に菊形のスタンプを押される。凸面はミガキによる調整が施される。414はナデ仕上げによる調整が施され、小口部には菊形のスタンプを押される。415は第3遺構面出土の軒丸瓦で、ナデ仕上げにより調整され、軒部分は巴文である。

6 出土木製品（図版 21、22、第 38、39 図）

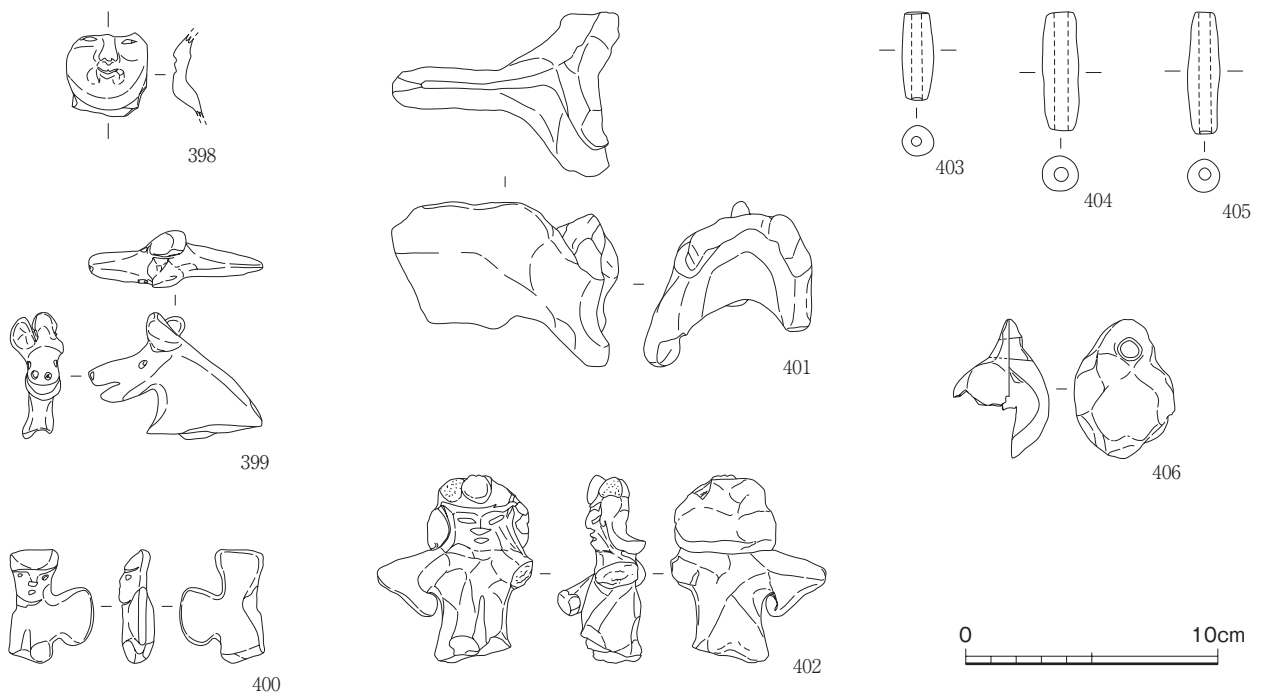
416から419はSK-40から出土の木製品で、416から418は桶板材である。419は曲物の底板である。420は第3遺構面出土の、底板である。421はSK-40出土の桶板材である。422は第3遺構面の溝から出土した、木製品で用途は不明である。423は第3遺構面出土の板状の木製品である。424はSK-40出土で、加工された木製品である。425はSK-40出土の、羽子板形をした製品である。426はSK-40から出土した下駄で下部は破損しており、横緒穴、後歯はない。足部分の厚さは0.6～4.2cmである。427と428は漆器で、427はSK-43出土の椀の蓋である。外面は黒漆、内面は赤漆が塗られ、外面に3ヶ所金彩で丸に五弁の花、梅花と双葉の家紋文が描かれる。428はSK-36出土の椀で、器形は一文字腰形を呈し、内外面は黒漆が塗られ、高台内に白色で不明な文様が描かれる。



第32図 第3遺構面出土遺物実測図① (1/3)



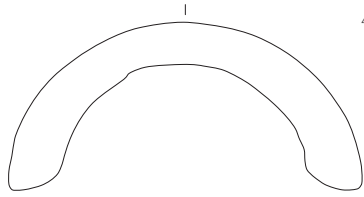
第33図 第3遺構面出土遺物実測図② (1/3)



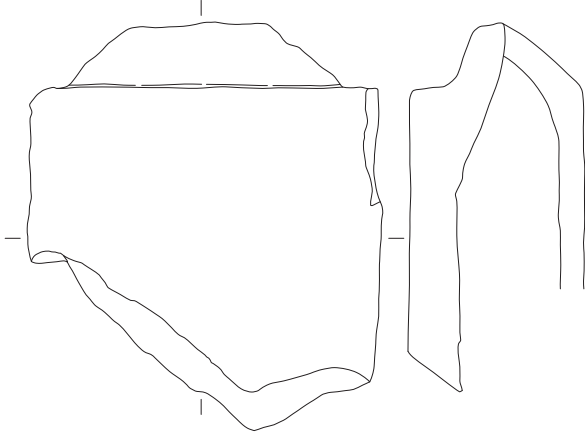
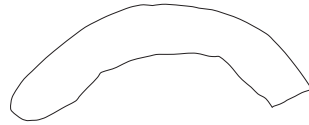
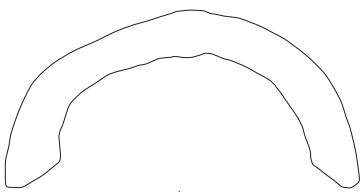
第34図 出土土製品実測図 (1/3)



407



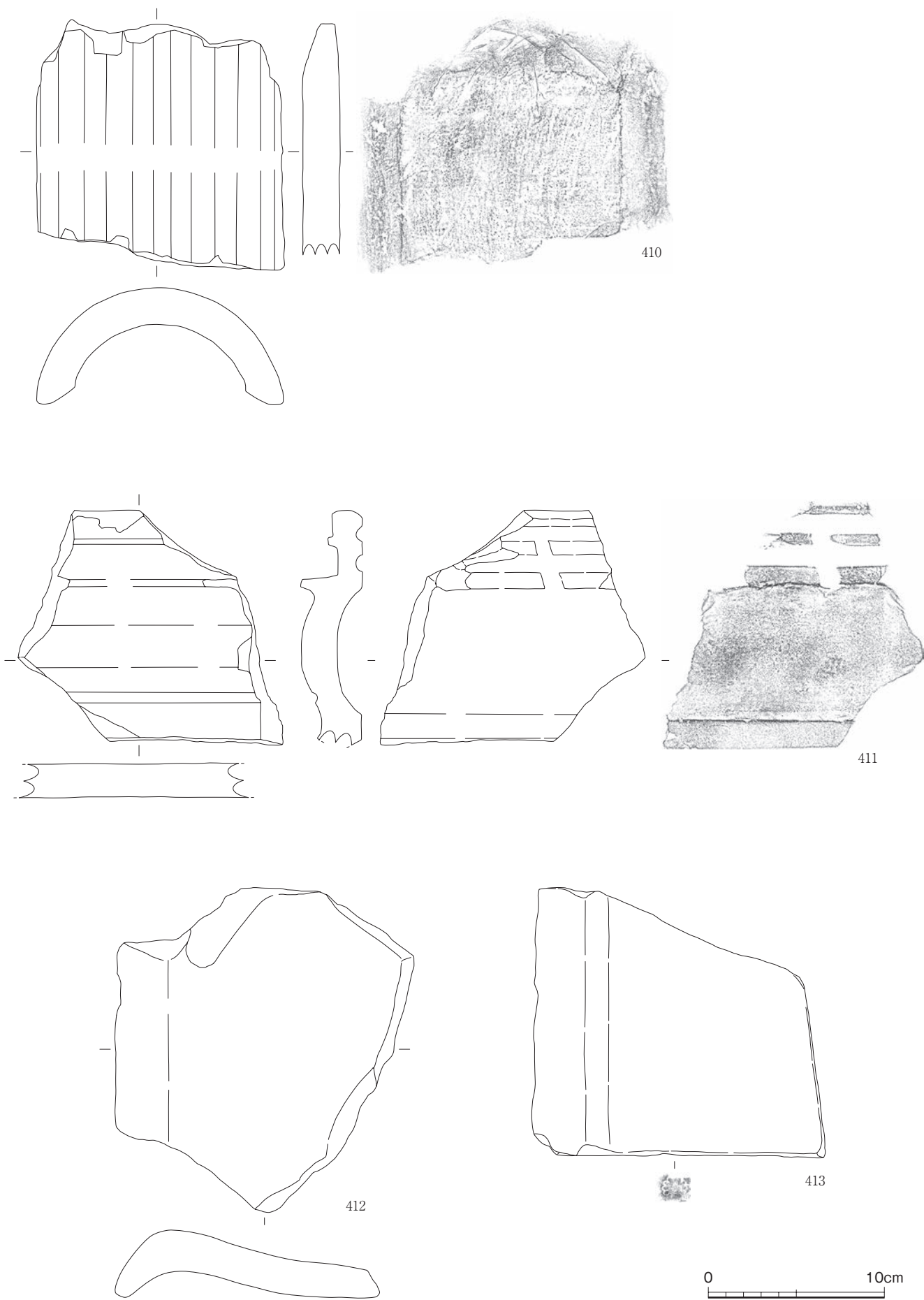
408



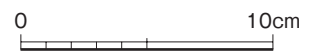
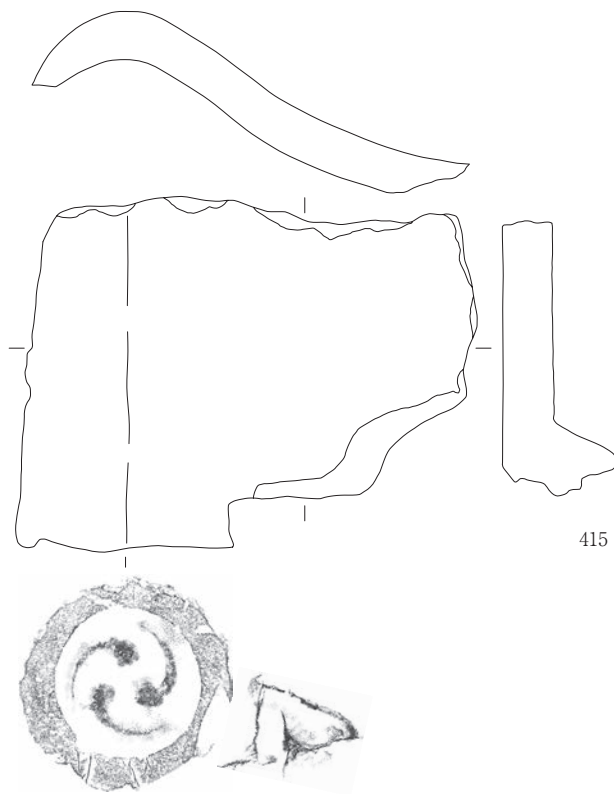
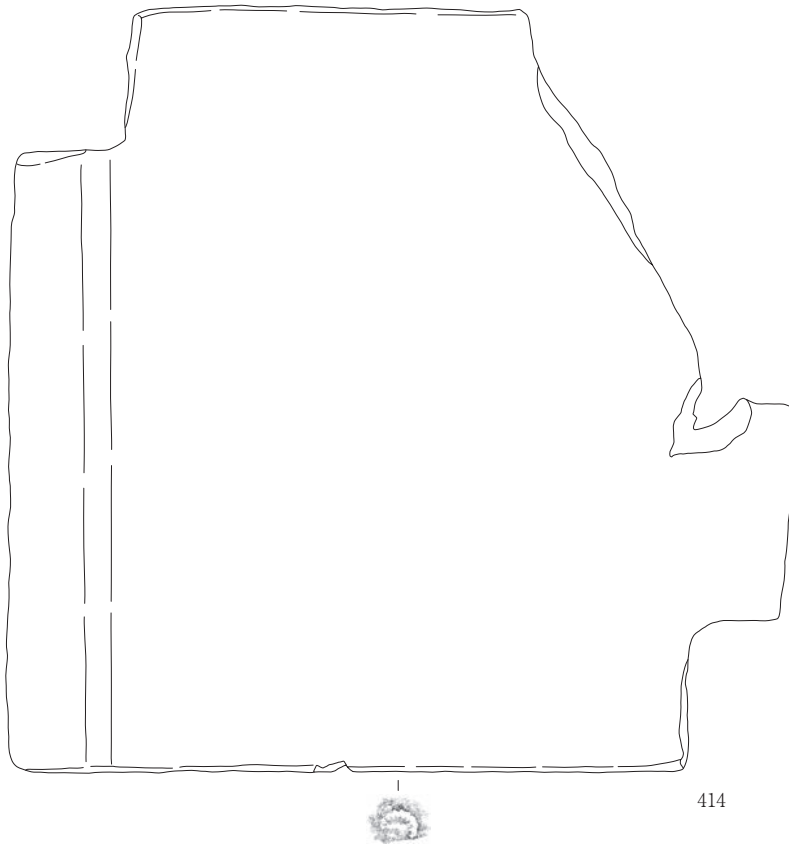
409



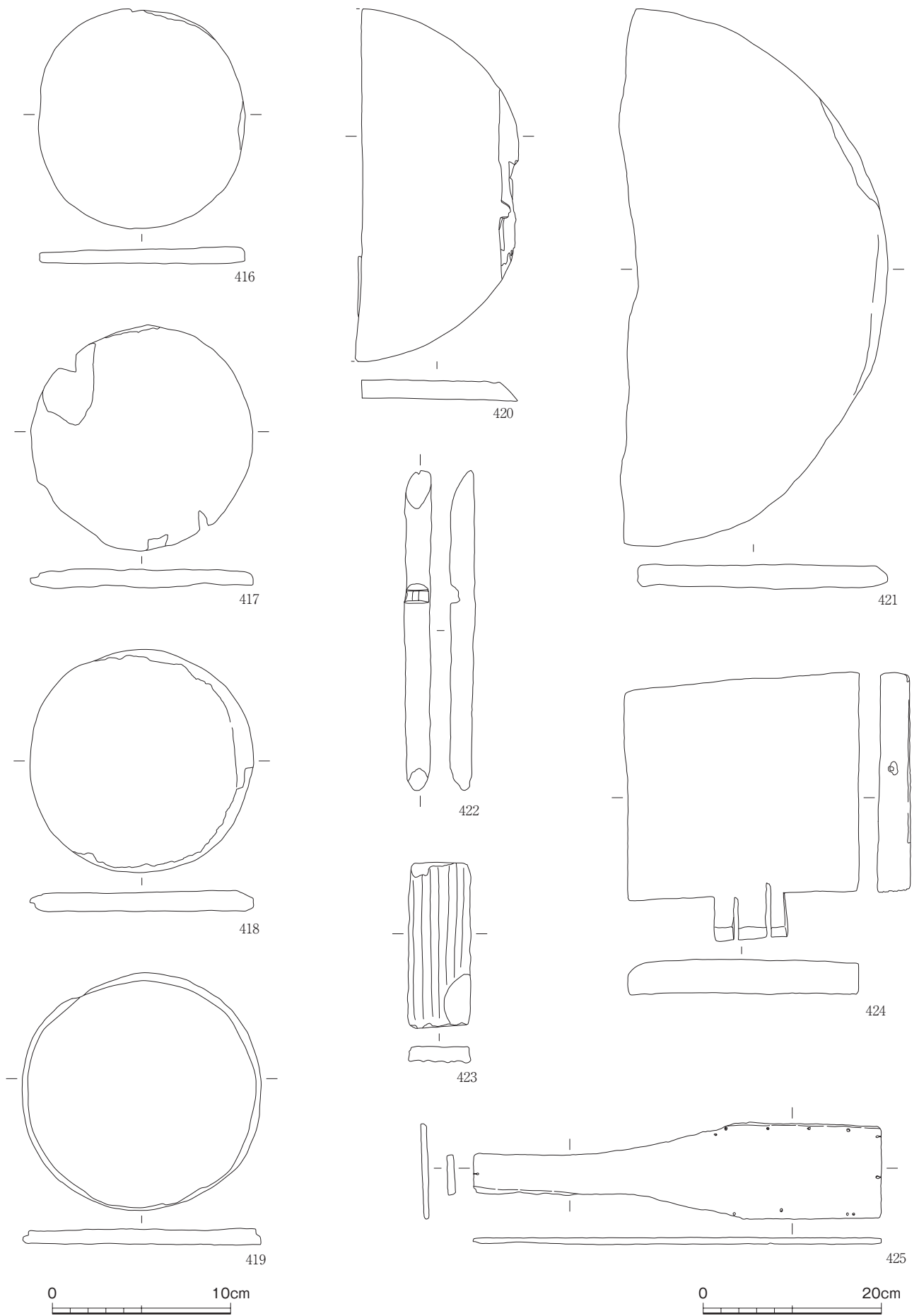
第35图 出土瓦実測图① (1/3)



第36图 出土瓦実測図② (1/3)



第37图 出土瓦実測图③ (1/3)



第38図 出土木製品実測図① (425は1/6、他は1/3)

7 出土鉄製品（図版 22、第 40 図）

429から432は釘である。429はSK-6出土の頭折釘である。430はSK-28出土の角釘である。431はSK-29出土の釘である。432はSK-6出土の角釘である。

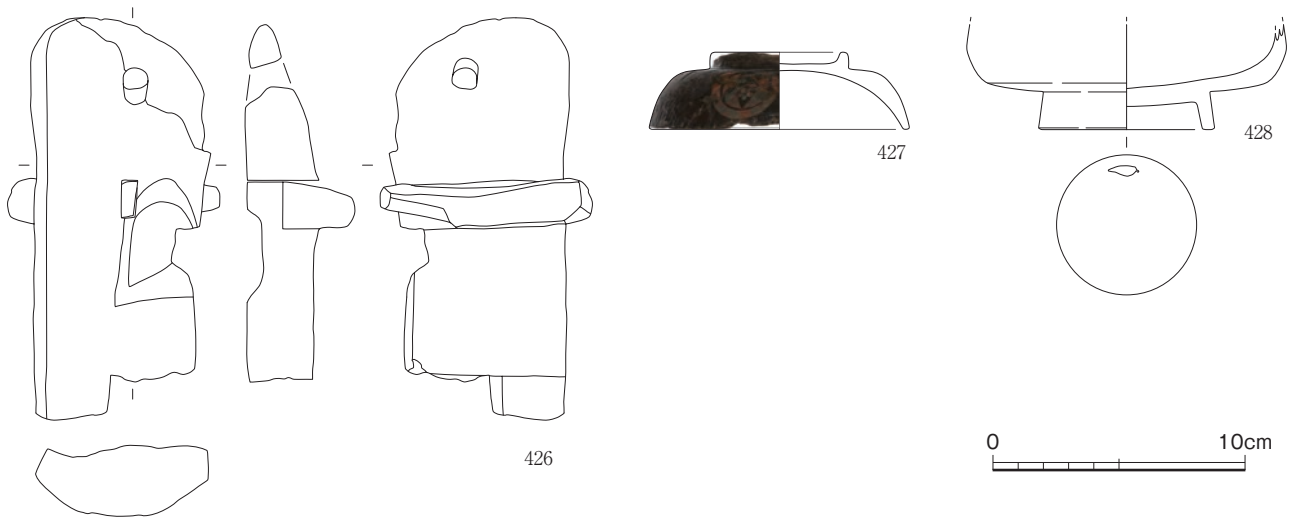
433はSK-44出土の金属製品である。434はSK-29出土の小柄である。

435と436は真鍮製の煙管の吸口である。435は第3遺構面から出土、436はSK-28から出土の遺物である。

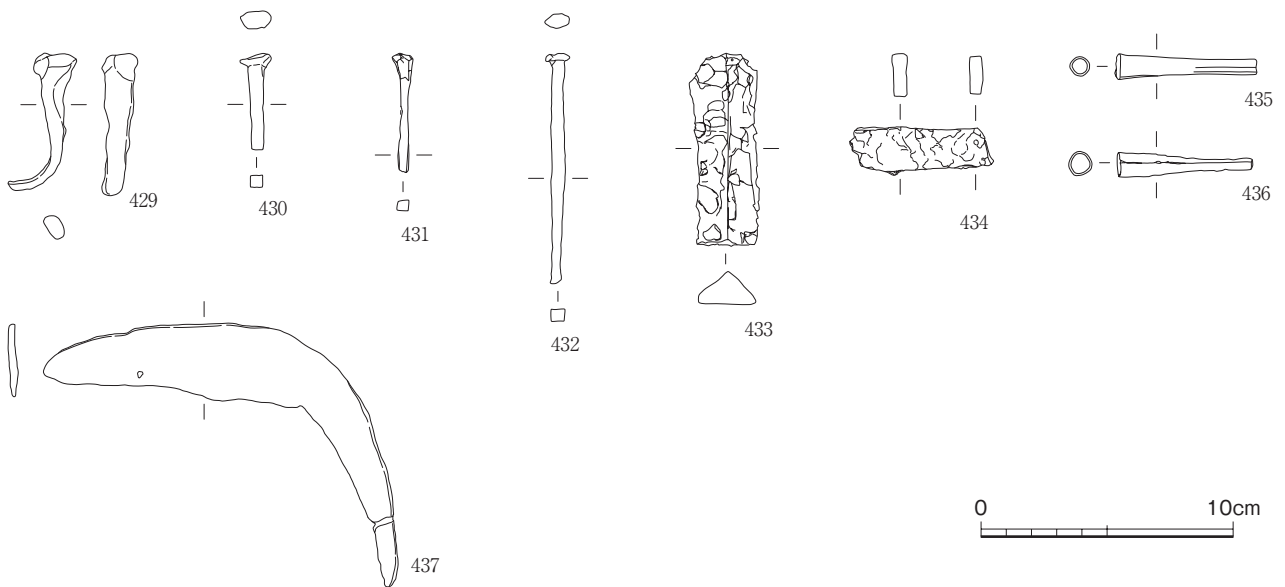
437はSK-43から出土した鉄製の鎌である。

8 出土銭（図版 22、第 41 図）

438と439はSK-43出土の銅銭で、寛永通宝である。



第39図 出土木製品実測図② (1/3)



第40図 出土鉄製品実測図 (1/3)



第41図 出土銭 (1/1)

IV 総括

本件の宮永町遺跡は、近世柳川城郭の御家中と呼ばれる武家集住地の宮永小路にあたり、今回の調査地点の宮永町は外堀に南面した城郭南端部に位置する武家地である。本調査では3面の遺構面を確認することができたため、各面ごとに報告を行った。

第1遺構面は、本調査の遺構面の中で最も多くの遺構を検出し、遺物も多く出土した。検出した遺構は、土坑や柱穴が主であり、柱穴のいくつかは柵列を構成する可能性が考えられるが、全容は不明である。また、本調査区の幅が約2.8mという限られた範囲であったため、多くの土坑の全容は不明である。遺物は近世陶磁器を中心に、瓦、土製品、鉄製品が出土した。

陶磁器の器種としては、碗、皿、鉢、壺、小杯、瓶、徳利、甕、播鉢、火入、火鉢、灰器、香炉、栓、紅皿、合子、灯明皿、土鍋、片口鉢、仏飯器、花瓶等が出土している。

陶磁器の産地については特定できる範囲で見ると、肥前系が多く出土している。出土遺物の肥前系陶磁器を細分化すると、唐津焼、武雄焼、嬉野焼が出土している。その他の出土地域としては、高取焼、現川焼、常滑焼、在地系の蒲池焼の可能性が考えられる遺物が出土すると共に、中国産や朝鮮産の海外からの輸入陶磁器も僅かに確認できる。

第2遺構面は、第1面よりも遺構の検出数は少なく、遺物の出土数も少ない。検出した遺構は、第1遺構面と同様の土坑や柱穴が主である。第2遺構面の特筆する遺構として、調査区の南端部において、木材を側溝の様に用いた遺構を検出した。この遺構については、当地が柳川城郭の南端部に位置し、外堀に面して築かれた土居に隣接する場所で検出したことから、土居の基礎遺構の可能性が考えられる。また、「旧柳河藩干拓遺跡Ⅱ」の調査においても本遺構に類似する基礎遺構が検出している。現在、柳川城の土居の多くは失われ、本調査地の東に残る通称「米多比隅」と呼ばれる土居を除いては、江戸時代の土居の高さを留めるものはない。

出土遺物は近世陶磁器を中心に、瓦、土製品、鉄製品が出土した。

陶磁器の器種としては、碗、皿、鉢、壺、小杯、瓶、徳利、蕎麦猪口、火鉢、香合の蓋、灯明皿、土鍋、仏飯器、花瓶、播鉢、花生、茶道具等が出土している。

陶磁器の産地については特定できる範囲で見ると、肥前系が多く出土している。出土遺物の肥前系陶磁器を細分化すると、唐津焼、武雄焼、嬉野焼、有田焼が出土している。その他の出土地域としては、上野高取焼系、現川焼、志野焼、八代焼又は小代焼と考えられる熊本系、瀬戸美濃系等を確認することができる。また在地系の蒲池焼の可能性もある遺物も出土している。輸入陶磁器の内容としては、中国南部産も僅かに確認できる。

第3遺構面については、非常に遺構密度が薄く個別報告を行った遺構も1基のみである。また、出土遺物についても、第3遺構面の検出面から出土した物を掲載しているが、出土遺物の年代については19世紀代の物から、16世紀代の唐津焼まで年代が広い結果となった。第3遺構面で19世紀の遺物が出土している一方、16世紀の唐津焼、17世紀の龍泉窯や中国産磁器等も出土している。この遺物が伝世品の可能性もあるため、第3遺構面が16世紀に遡ると断定することは避ける。

今回の調査で、柳川城郭の土居基礎遺構の可能性のある遺構を、城郭南端で検出した点は柳川城の失われた土居を考える上で重要な成果となった。また、出土遺物については柳川藩窯の蒲池焼の可能性のある遺物を出土した点は、蒲池焼の流通を考える上で一つの事例となったと考える。その他に、輸入磁器や、他地域産の陶磁器の出土遺物から、柳川城下町の御家中における他地域との物

流の一端を垣間見ることができた。

本調査で検出した遺構や、出土遺物の成果は近世柳川城の御家中の様相を解明するための重要な成果となった。

—参考文献—

『九州陶磁器の編年—九州陶磁学会10周年記念—』 2000 九州陶磁学会

『角川日本陶磁大辞典』 2011 角川学芸出版

『新・柳川明証図会』 2002 柳川市史編集委員会・別編部会

『柳川の歴史5 柳河藩の政治と社会』 2021 柳川市史編集委員会

『柳川歴史資料集成第3集 柳河藩立花家分限帳』 1998 柳川市史編集委員会

『本町袋町遺跡・南長柄町遺跡』柳川市文化財調査報告書第4集 柳川市教育委員会

『京町遺跡』柳川市文化財調査報告書 第7集 2009 柳川市教育委員会

『上町遺跡 I』柳川市文化財調査報告書 第10集 2016 柳川市教育委員会

『旧柳河藩干拓遺跡Ⅱ』一般国道208号有明海沿岸道路関係埋蔵文化財調査報告 第7集 2009 九州歴史資料館

『上町遺跡2次調査』福岡県文化財調査報告書第264集 2018 九州歴史資料館

出土遺物觀察表

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-2出土 第7図 1	皿	口径(12.0) 器高3.5 底径(4.2)	陶器 黒色粒子 黄白色		貫入	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ 高台内面及び高台に胎 土目痕		18C	
SK-2出土 第7図 2	皿	残存高2.5～ 底径(5.9)	陶器 黒色粒子		貫入	壺付け釉剥ぎ、 胎土目痕	肥前系 京焼風		底部残0.5
SK-2出土 第7図 3	壺	口径(11.5) 残存高11.9～	陶器 精良 石英・黒色粒子 褐灰色		内面及び外面釉だれ 外面底部付近にスス付着				
SK-2出土 第7図 4	皿	口径(13.6) 残存高2.6～	白磁 精良 灰白色	薬灰釉				17C前半	
SK-2出土 第7図 5	染付皿	口径(13.8) 残存高3.8～	精良 白色	透明	内面及び外面唐草文		肥前系	17C後半 ～ 18C前半	
SK-2出土 第7図 6	染付碗	口径(8.2) 残存高4.6～	精良 灰白色	透明	外面 草文		肥前	19C	口縁部片
SK-2出土 第7図 7	染付碗	口径(8.2) 残存高3.6～	精良 白色	透明	外面口縁部に帯状の文様、下部は赤絵で松		肥前系		
SK-2出土 第7図 8	染付碗	底径3.4 残存高1.8～	精良 白色	透明	外面 唐草文	壺付け釉剥ぎ	肥前	19C	底部破片
SK-3出土 第7図 9	鉢	底径(16.6) 残存高5.1	瓦質土器 精良 黒灰色		内面ナデ、ハケメ、オサエ 外面上部にナデ、中部ハケメのちナデとオサエ 底部ハケメ				0.2
SK-3出土 第7図 10	搦鉢	口径(27.8) 残存高17.4	陶器 精良 淡褐色	鉄釉	内面 搦目 外面 回転ナデ				口縁部片
SK-3出土 第7図 11	皿	残存高2.7～ 底径(8.0)	陶器 精良 白色	緑釉 薬灰釉	内面白化粧土後に緑釉薬 外面緑釉後に白化粧土を掛ける	内面に胎土目痕 壺付け釉剥ぎ	肥前系	17C前半	0.2
SK-3出土 第7図 12	碗	残存高5.3～ 底径(4.6)	陶器 精良 淡灰色	透明	貫入 高台露胎	壺付に4つの胎土目痕	嬉野系		底部完形
SK-3出土 第7図 13	壺	口径(6.0) 残存高4.1～	精良 白色	青磁	外面肩に梅花貼り付け	口縁部釉剥ぎ	鍋島?	18C	口縁部
SK-4出土 第7図 14	甕	口径(103.6) 器高93.4 底径39.6	瓦質土器 最大1.6cmの小石を 含む		外面口縁部ハケの後ナデ、中部はハケの下に格子 状のタキ及びハケの上にオサエ、底部タテ ハケ 内面口縁部ハケ調整後、横ナデ、中部から横ハケ、 斜めハケ。ハケの上から一部オサエ底部はハケ メ後ナデ				ほぼ完形
SK-5出土 第9図 15	鉢	残存高4.9～	瓦質 1～5mmの砂粒含む 明褐色		外面下部から底部にかけて被熱あり				底部片
SK-6出土 第9図 16	小杯	口径(6.0) 残存高2.1～	陶器 微細な黒、白粒子		貫入				口縁部片
SK-6出土 第9図 17	碗	口径(9.0) 残存高(4.8)	陶器 精良 黄白色	透明	貫入、口縁部に鉄釉を塗付 外面に緑染付で竹笹文 陶胎染付、胴下部に鉄釉を塗付				口縁・胴部 破片
SK-6出土 第9図 18	染付碗	口径(11.4) 残存高5.5～	磁器 黒い粒子含む		外面口縁付近に二条の圏線、 高台付近に三条の圏線、 腹部に文様の一部		肥前		口縁部片
SK-16出土 第9図 19	小皿	口径(6.4) 器高1.7 底径(4.6)	土師器 微細な黒雲母、白雲母 あり 2mmの小石あり		糸切り ヨコナデ				残0.3
SK-16出土 第9図 20	小皿	口径(6.8) 器高1.7 底径(3.8)	土師器 微細な黒雲母、白雲母 あり		糸切り ヨコナデ				残0.5
SK-16出土 第9図 21	小皿	口径6.9 器高1.9 底径4.6	土師器 微細な黒雲母、白雲母 あり		糸切り ヨコナデ				ほぼ完形
SK-16出土 第9図 22	小皿	口径7.7 器高1.9 底径4.2	土師器 微細な黒雲母、白雲母 あり		糸切り ヨコナデ				ほぼ完形 (一部欠損 あり)

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-16出土 第9図 23	小杯	口径 (4.0) 器高2.7 底径 (2.0)	白磁 黒い粒含む		貫入				底部残0.5
SK-16出土 第9図 24	小杯	口径 (5.6) 器高3.8 底径 (2.0)	白磁 灰白色		貫入		肥前	17C	残0.5
SK-16出土 第9図 25	碗	残存高2.6～ 底径 (5.0)	陶器 0.5～2mmの砂粒含む 明褐色	灰釉	内面 オリーブ色の灰釉	見込みに砂付着	肥前系	17C前半	底部完形
SK-16出土 第9図 26	碗	残存高2.0 底径 (5.0)	白磁 精良 黒い粒子含む 黄白色	透明	黒い粒子が全体的に混ざる、畳付に釉 透明釉を施し、貫入、釉だれ	畳付に2ヶ所砂目付着 畳付は釉剥ぎせず砂目 の部分のみ剥けている	朝鮮	16C～ 17C	底部完存
SK-16出土 第9図 27	碗	残存高2.3 底径 (4.1)	陶器 精良 白と橙色の粒子を含む 明赤灰色		貫入				底部残0.7
SK-16出土 第9図 28	碗	残存高3.6 底径 (3.8)	陶器 精良 黄白色	透明	胴下部に花卉装飾 高台内に「小倉」の文字彫り 粘土紐跡 見込みに鉄絵で山水文	高台、胴下部 露胎	京焼風		残0.3
SK-16出土 第9図 29	皿	残存高1.7～ 底径 (5.6)	陶器 褐灰色		見込みに蛇ノ目状に白化粧土				底部残0.7
SK-16出土 第9図 30	碗	口径 (12.0) 器高5.2 底径 (4.8)	陶器 軟質 黄灰白色		見込みに鉄絵 京焼風献上唐津 貫入		唐津		残0.5
SK-16出土 第9図 31	瓶	残存高3.9～ 底径 (6.8)	陶器 2mmの粒含む	鉄釉 鉄漿					底部残0.3
SK-16出土 第9図 32	火入	口径 (10.6) 残存高5.5	陶器 1mmの粒含む	鉄釉					口縁残0.3
SK-16出土 第9図 33	火鉢	口径 (28.6) 残存高4.9～	陶器 1mmの石英、 微細な白雲母含む		外面の口縁近くに印花				口縁部残0.2
SK-16出土 第9図 34	甕	口径 (19.4) 残存高4.3～	陶器 1mmの石英含む						口縁部小片
SK-16出土 第9図 35	火入	口径 (10.8) 残存高6.0	陶器 1mm程度の石英	錆釉 鉄漿 緑釉	外面胴部に錆釉を帯状に施す		高取		口縁部残0.2
SK-16出土 第9図 36	鉢	口径 (22.8) 残存高6.8～	陶器 1mmの石英		外面 白化粧土の刷毛目装飾 内面 白化粧土の刷毛目装飾		武雄		口縁部片
SK-16出土 第9図 37	播鉢	口径 (34.6) 残存高3.4～	陶器 1mm程度の砂粒含む	鉄漿			肥前系		口縁部片
SK-16出土 第9図 38	播鉢	残存高6.5～	陶器 0.5～1mmの砂粒 2mmの小石含む 暗赤灰色	鉄釉	播目11本 釉だれ				口縁部片
SK-16出土 第9図 39	播鉢	残存高10.0～	陶器 0.1～1mmの砂粒含む 赤褐色	鉄釉	播目11本 口縁の内面から外面にかけて鉄釉				口縁部片
SK-16出土 第9図 40	播鉢	残存高63.0～	陶器 0.1～1mmの砂粒含む 赤褐色	鉄釉	播目13本				口縁部片
SK-16出土 第11図 41	播鉢	残存高5.5～ 底径 (16.0)	陶器 0.1～1mmの砂粒含む 石英 暗赤灰色		播目11本				底部片
SK-16出土 第11図 42	播鉢	残存高5.6～ 底径 (10.2)	陶器 1mm程度の粒含む		糸切り	見込みと底部外部に胎 土目痕			底部残0.3
SK-16出土 第11図 43	碗	口径6.7 器高4.9 底径3.3	白磁 精良 白色	透明	胴部に折枝梅色絵の痕跡 剥落しているが赤色、 見込みに草花文色絵の痕跡				残0.5
SK-16出土 第11図 44	小杯	残存高1.1 底径2.7	白磁 精良 黒い粒子を含む 灰白色	透明	内面 一部薄い緑色の釉が溜まる 高台内釉だれ	畳付、高台内に砂付着	中国	16C～ 17C	底部完存

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-16出土 第11図 45	菊花小皿	残存高1.2 底径 (4.8)	白磁 精良 黒と橙色の粒子を含む 灰白色	透明	貫入 菊花形	内面と高台内砂が付着	中国	16C ~ 17C	底部残0.5
SK-16出土 第11図 46	碗	残存高2.0 底径 (3.9)	白磁 精良 白色	透明					残0.2
SK-16出土 第11図 47	碗	残存高2.2 底径 (4.4)	白磁 精良 白色	透明	貫入				残0.2
SK-16出土 第11図 48	染付皿	口径 (11.0) 残存高1.6 ~	磁器 白色	透明	内面 花唐草文、外面 唐草文		肥前		口縁部残0.2
SK-16出土 第11図 49	染付皿	口径 (13.7) 器高3.5 底径 (8.0)	磁器 青灰色	透明	手書き呉須染で付高台内に一条圏線、 外面 四条の圏線 内面 墨弾き捺文 見込みはコンニャク印判による五弁花文		肥前		口縁部残0.2
SK-16出土 第11図 50	染付皿	口径 (21.6) 器高3.4 底径 (13.4)	磁器 精良 青白色	透明	見込みに環状の松竹梅文 外面 唐草文		肥前	17C後半 ~ 18C前半	口縁部残0.5
SK-16出土 第11図 51	染付蕎麦猪口	口径 (6.8) 残存高4.5 ~	磁器 精良 白色	透明	外面 文様		肥前		口縁部片
SK-16出土 第11図 52	染付小杯	口径 (4.6) 器高2.6 底径 (2.0)	磁器 黒い粒含む 灰白色	透明	外面 楓文			19C	底部完存
SK-16出土 第11図 53	染付碗	口径 (8.0) 器高4.0 底径2.8	磁器 精良 白色	透明	貫入 外面 土坡、草花文		肥前		残0.5
SK-16出土 第11図 54	染付皿	口径 (13.8) 器高3.1 底径 (8.2)	磁器 精良 白色	透明	見込みに五弁花文 (コンニャク印判) と圏線 樹木、ハマ跡 外面 高台に二条圏線 圏線状の文様途中で2つに分れる 高台内に一条圏線 ハリ剥がし跡		肥前		残0.3
SK-16出土 第11図 55	染付皿	口径 (13.4) 器高4.0 底径 (7.8)	磁器 精良 灰白色	透明	花卉口縁、口鏝 内面 折枝梅文 見込み 五弁花文 高台に「大明年製」を呉須染付 外面 唐草文 外面口縁に釉だれ 貫入	畳付砂付着	有田	18C	残0.5
SK-16出土 第11図 56	染付碗	口径 (7.8) 残存高3.5 ~	磁器 精良 白灰色	透明	外面 スタンプ文				口縁部片
SK-16出土 第11図 57	染付色絵碗	口径 (9.8) 残存高4.9 ~	磁器 精良 灰白色	透明	内面 赤・金の色絵 外面 鳥・草の文様		肥前		口縁部片
SK-16出土 第11図 58	染付碗	口径 (10.2) 残存高3.5	磁器 黒い粒子含む	透明	貫入 菊、草花文		肥前		口縁部残0.3
SK-16出土 第11図 59	染付碗	口径 (10.6) 残存高3.1 ~	磁器 黒い粒子含む	透明	外面 花、唐草文		肥前		口縁部残0.2
SK-16出土 第11図 60	染付碗	口径 (10.4) 残存高4.4 ~	磁器 灰白色	透明	口鏝 外面 竹、梅文		肥前		口縁部残0.3
SK-16出土 第11図 61	碗	口径 (11.8) 残存高4.1 ~	陶器 黄灰白色		見込みに山水文か 京焼風陶器 貫入		京焼風		口縁部片
SK-16出土 第11図 62	染付碗	口径 (7.9) 器高3.8 底径 (3.2)	磁器 精良 白色	透明	外面 草花文 貫入		肥前		残0.3
SK-16出土 第11図 63	染付碗	口径 (9.3) 器高5.3 底径 (3.6)	磁器 精良 灰白色	透明	外面 花唐草文		肥前	19C	残0.3
SK-16出土 第11図 64	染付碗	口径 (9.8) 器高5.3 底径 (4.2)	磁器 精良 黄と黒い粒子を含む 灰白色	透明	高台内に一条圏線と僅かに文様 外面草花文 (梅) 外面と高台部に二条圏線が見られる 貫入	畳付に砂付着			残0.5
SK-16出土 第11図 65	染付碗	口径 (10.0) 器高5.2 底径 (4.2)	磁器 精良 灰白色	透明	見込みに網目文と丸に菊花文、高台に二条 胴下部に一条圏線、外面 二重網目文 高台内に文字			19C	残0.3

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-16出土 第11図 66	染付碗	口径(10.0) 器高5.0 底径4.0	磁器 精良 白色	透明	見込みに網目文と丸に菊花文 外面 高台に二条、胴下部に一条圏線、二重網目文 高台内に一重角椀、渦福横ナテ成形	畳付に砂付着 高台に一部露胎		19C	残0.5
SK-16出土 第11図 67	染付碗	口径(10.6) 器高4.8 底径(4.2)	磁器 精良 灰白色	透明	見込みに網目文と丸に花目文 外面 高台に二条、胴下部に一条圏線、二重網目文	高台内に砂付着、一部露胎		19C	残0.3
SK-16出土 第11図 68	染付碗	口径(8.8) 残存高3.5～	磁器 黒い粒子含む	透明	外面口縁部 雨降文		肥前		口縁部残0.3
SK-16出土 第12図 69	染付碗	残存高2.7 底径(3.8)	磁器 精良 黒い粒子を含む 灰白色	透明	高台内に一条圏線 と僅かに大明年製		肥前		底部残0.3
SK-16出土 第12図 70	染付碗	残存高(3.3～) 底径(3.7)	磁器 精良 白色	透明	外面丸文、コンニャク印判 高台脇に一条圏線 高台に二条圏線 高台内に「大明年製」文字、一条圏線		肥前		残0.3
SK-16出土 第12図 71	染付碗	残存高3.8 底径(3.8)	磁器 精良 灰白色	透明	胴部に土坡の一部、一条圏線、貫入 見込みに貫入 高台際に一条圏線 高台に途中で切れた線 高台内に一条圏線	畳付砂目	肥前		残0.3
SK-16出土 第12図 72	染付碗	残存高2.3 底径(3.8)	磁器 黒い粒子含む	透明	見込みに五弁花文 外面文様		肥前		底部残0.3
SK-16出土 第12図 73	染付碗	器高2.5～ 底径3.6	磁器 精良 灰白色		外面 氷裂文		肥前	19C	底部完形
SK-16出土 第12図 74	染付碗	残存高2.6～ 底径(3.4)	磁器 精良 白色	透明	外面 文様 外面高台に軸だれ				残0.2
SK-16出土 第12図 75	染付鉢 香炉	残存高4.1～ 底径(5.4)	磁器 精良 白灰色	透明	外面 草文		肥前系	18C	残0.3
SK-16出土 第12図 76	青磁色絵碗	口径12.0 器高4.8 底径3.8	磁器 精良 灰白色		内面 松竹梅の色絵 貫入			19C	残0.7
SK-16出土 第12図 77	色絵碗	口径(9.8) 残存高3.8～	磁器 白色	透明	色絵、文様 花唐草文				口縁部残0.5
SK-20出土 第12図 78	小皿	口径8.0 器高2.1 底径4.6	土師器 微細な黒雲母、白雲母 あり		糸切り ヨコナデ 黒斑				ほぼ完形
SK-20出土 第12図 79	小皿	口径8.9 器高2.3 底径5.2	土師器 微細な黒雲母、白雲母 あり		糸切り ヨコナデ				ほぼ完形
SK-20出土 第12図 80	小皿	口径(8.4) 器高2.4 底径(4.2)	土師器 灰白色 白雲母を含む		ヨコナデ 摩滅しているが糸切り				残0.2
SK-20出土 第12図 81	小皿	口径(8.8) 器高2.3 底径(4.8)	土師器 灰白色 白雲母を含む		ヨコナデ ヘラ切り				残0.2
SK-20出土 第12図 82	壺?	残存高8.8～ 底径5.6	土器 3mmの石英含む		外面 摩耗が著しい 内面 底部に布目痕				残0.5
SK-20出土 第12図 83	栓	長3.3 幅3.8 高1.5	土器 金雲母、石英含む						完存
SK-20出土 第12図 84	甕	残存高7.4～ 底径(21.4)	陶器 3mmの石粒を含む		内面 格子目のタタキ痕				底部残0.2
SK-20出土 第12図 85	火鉢	口径(34.0) 残存高8.2～	瓦質土器 1mmの白粒含む		口縁外面二条の突帯 印刻を施す				口縁部片
SK-20出土 第12図 86	皿	口径(13.2) 器高3.6 底径4.4	陶器 精良 明褐色		内面緑青色の灰釉 口縁断面に被熱痕	見込み 蛇ノ目釉剥ぎ	嬉野系		残0.7
SK-20出土 第12図 87	掃鉢	残存高9.0～ 底径13.8	陶器 1～5mmの砂粒多く 含む 明赤褐色		胴部下部に指オサエ跡が3ヶ所残る				残0.2

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-20出土 第12図 88	皿	残存高3.6～ 底径(6.4)	陶器 1mm程度の白粒含む 灰色			見込みに胎土目痕 外面盤付から高台の外 裾部にかけて胎土目痕	唐津	16C後半 ～ 17C前半	底部残0.5
SK-20出土 第12図 89	鉢	残存高3.3～ 底径(6.4)	陶器 微細な白粒含む				肥前系	18C～ 19C	底部片
SK-20出土 第12図 90	碗	口径(12.8) 器高4.9 底径5.2	陶器 精良 黄白色 蟬野辺りの土か	鉄釉 鉄漿	鉄釉 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ、1mmほど露胎を残し鉄漿 高台内に胎土目を2つ	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ 壺付釉剥ぎ	肥前系	18C	残0.5
SK-20出土 第13図 91	碗	残存高3.9～ 底径(3.8)	陶器 緻密	透明	透明釉 内面 白泥で叩刷毛目 外面 白泥で蛭手		現川焼		底部残0.3
SK-20出土 第13図 92	鉢	残存高6.2～ 底径(7.8)	陶器 精良 黄灰色		貫入				残0.3
SK-20出土 第13図 93	台付皿	残存高3.5～ 底径(11.0)	陶器 灰色		貫入 見込みに高台外面にかけて 円状の白化粧土		高取	18C～ 19C	底部残0.3
SK-20出土 第13図 94	鉢	口径(30.0) 器高9.0 底径(9.8)	陶器 白砂粒含む 明褐色		削り出し高台 内面 白化粧土の上に施釉 波状の刷毛目模様 外面 口縁から黒褐色の灰釉	高台に胎土目跡が2つ 見込みに環状に砂目跡	武雄	17C～ 18C	残0.3
SK-20出土 第13図 95	小杯	口径(5.8) 器高2.2 底径3.2	白磁 精良 灰白色	透明	貫入				残0.7
SK-20出土 第13図 96	紅皿	口径長6.8 短4.0 器高1.8 底径長4.0 短2.4	白磁 精良 白色	透明	菊花状に内面型打し、高台を貼り付け				完形
SK-20出土 第13図 97	碗	口径(9.6) 残存高3.4～	白磁 精良 明白色		口鏽				残0.2
SK-20出土 第13図 98	皿	口径(13.0) 器高3.7 底径(4.0)	白磁 精良 白色	透明		見込みは蛇ノ目釉剥ぎ			残0.2
SK-43出土 第13図 99	小杯	口径(6.0) 器高3.6 底径2.6	陶器 精良 白灰色		外面 文様と二条圏線	見込みに砂付着			残0.7
SK-20出土 第13図 100	染付小杯	口径7.0 器高2.4 底径3.2	磁器 精良 灰白色	透明	外面 菊文 外面高台に釉だれ				残0.7
SK-20出土 第13図 101	染付碗	口径(10.2) 残存高4.7	磁器 精良 白色	透明	外面胴部に桐コンニャク印判				残0.3
SK-20出土 第13図 102	染付皿	口径(14.2) 器高4.3 底径(9.0)	磁器 精良 白灰色	透明	内面 松竹梅文 口鏽 高台内に一条圏線 外面 唐草文 貫入		肥前	18C前半	残0.2
SK-20出土 第13図 103	染付輪花碗	口径8.0 器高3.8 底径3.5	磁器 精良 白色	透明	染付碗(五弁花、輪花) 見込みに五弁花文 高台内に一条圏線と渦福 外面 口縁に濃淡の差、2種類の桜花文 胴部に一条圏線に重ねて草文 高台に二条圏線		肥前	18C～ 19C	一部欠け
SK-20出土 第13図 104	碁石	長3.0 幅2.5 厚1.1	石製品		変成岩				
SD-1出土 第13図 105	灯明皿	径7.5 残存高2.0 底径3.7	陶器 精良 赤褐色		内外面にロウ付着 ナテ調整 糸切り 外面に焦げ				
SD-1出土 第13図 106	皿	口径(8.0) 残存高1.3～	陶器 微細な白粒含む	鉄釉 鉄漿	内面撞目(8本) 口鏽				残0.3
SD-1出土 第13図 107	鉢	口径(31.4) 残存高1.5～	陶器 淡紫灰白色	鉄釉	内外鉄釉をハケ掛け後、 外面から内面口縁部にか け 白化粧土をハケ掛け				口縁部片
SD-1出土 第13図 108	土鍋	口径(13.0) 残存高2.3～	陶器 微細な粒子含む	鉄漿	口縁を折り曲げて逆L字形に成形 口縁部付近に把手を貼り付け		常滑?		口縁部片

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SD-1出土 第13図 109	赤絵小杯	口径(4.3) 器高3.2 底径(2.2)	白磁 白色		外面に赤絵の痕跡(枝折れ梅)				底部完存
SD-10出土 第13図 110	播鉢	口径(30.6) 残存高5.5~	陶器 1mmの石粒含む	鉄釉	全面に鉄釉 内面播目				口縁部片
SD-10出土 第13図 111	碗	残存高1.9~ 底径(4.8)	陶器 1mmの石英含む	鉄釉	両面白泥 巻刷毛目 貫入		現川		底部残0.5
SD-10出土 第13図 112	碗	残存高2.2~ 底径(3.6)	陶器 微細な黒、白粒含む		貫入				底部残0.5
SD-11出土 第13図 113	青花碗	残存高2.9~	磁器 精良 白色	透明	内面 一条の圈線 外面 文様				口縁部片
SD-10出土 第13図 114	染付碗	口径(14.0) 残存高4.7~	磁器 白色	透明	内面口縁部は袈裟襷文帯 外面微塵唐草に蝶文		肥前		口縁部片
SD-11出土 第13図 115	染付皿	残存高3.3~ 底径(6.8)	磁器 精良 灰白色	透明	内面葉の文様 外面の高台に二条圈線 下部に一条圈線と文様		肥前	19C	底部片
SD-11出土 第13図 116	碗	口径8.8 器高4.6 底径2.9	陶器 精良 淡黄灰色		雨降文のような黄緑色の釉薬 貫入		嬉野系		残0.8
SK-12出土 第14図 117	焼塩壺	残存高3.5~ 底径(5.0)	土師質土器 にぶい橙色 白雲母含む 微細な砂粒含む		内外面ナデ 外底は摩擦し調成は不明				残0.4
SK-12出土 第14図 118	小皿	口径7.6 器高1.6 底径3.6	土師器		糸切り、ヨコナデ 口縁部2ヶ所に黒煤				完形
SK-12出土 第14図 119	皿	口径(10.8) 器高1.8 底径(6.6)	土師器 黄灰色		ヘラ切り、ヨコナデ 内、外側、底部に黒斑小円				残0.3
SK-12出土 第14図 120	灯明皿	口径6.3 器高2.6 底径4.3	陶器 2mmの石英	鉄釉	糸切り				一部欠損
SK-12出土 第14図 121	灯明皿	口径(8.7) 器高2.4 底径(2.4)	陶器 微細な砂粒含む 明褐色	鉄釉	糸切り 内面から外面口縁部に向け鉄釉 外面に釉だれあり 内外面ナデ		高取		残0.3
SK-12出土 第14図 122	小杯	口径(3.0) 器高2.6 底径(18.0)	白磁 黒、白粒含む		貫入				残0.5
SK-12出土 第14図 123	小碗	口径(6.7) 器高3.8 底径2.1	陶器 精良 黄灰色 微細な石英を含む	透明	横ナデ 腰部釉だれ 内外面 貫入あり	高台から腰まで露胎、 削り出し			残0.5
SK-12出土 第14図 124	色絵碗	口径(8.6) 残存高4.4~	陶器 精良 黄灰色	透明釉	外面赤色で文様が残る 貫入			18C~ 19C	残0.3
SK-12出土 第14図 125	鉢	残存高3.7 底径(10.8)	陶器 1mmの石英	鉄釉		見込み底部、高台の外 面から底にかけて砂付 着	武雄		底部残0.5
SK-12出土 第14図 126	土鍋	口径(17.6) 残存高4.0~	陶器 黄灰色		貫入 外面の口縁付近にヘラ押え痕				口縁部片
SK-12出土 第14図 127	碗	口径(7.8) 残存高4.1~	陶器 精良 灰白色		貫入				残0.3
SK-12出土 第14図 128	土瓶蓋	径8.6 底径5.5	陶器 金雲母、石英含む	暗黄茶灰色 のあめ釉	宝珠状の摘み				一部欠損
SK-12出土 第14図 129	土瓶蓋	裾径9.2 器高2.7 底径5.0	陶器 2mmの石英	灰釉	緑がかったワラ灰釉 胴部回転ヘラケズリ 宝珠状の摘み				一部欠損
SK-12出土 第14図 130	蓋	裾径4.35 径10.8 器高2.25	陶器 精良 黄灰色	鉄釉	土瓶の蓋 中央に摘み				ほぼ完形
SK-12出土 第14図 131	土瓶	口径(8.8) 器高10.7 底径(7.8) 幅(16.2)	陶器 精良 明褐色	鉄釉	外面口縁から胴下部まで鉄釉、ケズリ 施釉部分に白化粧土で文字 内面施釉部は鉄釉 注:口部残存なしのため、注口を除く器形のみ	外面露胎部に煤付着 内面露胎部ナデ			残0.3

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-12出土 第14図 132	片口鉢	口径(22.4) 残存高7.3~	陶器 精良 赤褐色		片口は手捏ね 内外に白化粧土 外面は鉄絵で文様後、浅黄色の化粧土を擦掻き し、その上から白化粧土		高取		口縁部片
SK-12出土 第14図 133	鉢 半胴甕	口径(22.4) 残存高17.2~	陶器 精良 淡灰赤色	褐釉 透明	外面、白化粧土を塗布し、帯状に掻き取る 鉄絵と褐釉を掛け流し、後に白化粧土の上に外 面上部から内面にかけて透明釉 装飾の為か外面に突帯の残りが見られる		武雄	19C	残0.2
SK-12出土 第14図 134	鉢	口径(19.6) 残存高4.3~	陶器 精良 灰白色	灰釉	褐色の灰釉		高取?		口縁部片
SK-12出土 第14図 135	播鉢	口径(36.8) 残存高8.0	陶器 1mmの石英	鉄釉	内面播目				口縁部片
SK-12出土 第14図 136	播鉢	残存高5.4~ 底径(13.8)	陶器 1mmの石英含む	鉄釉	内面15本の播目	高台外内から底部にか けて砂付着			底部残0.3
SK-12出土 第14図 137	碗	器高4.2 底径3.1	陶器 精良 灰色		貫入あり 高台、胴下部軸だけ 高台内に一部軸	高台、胴下部露胎		19C	残0.5
SK-12出土 第15図 138	小杯	口径4.8 器高3.0 底径2.5	白磁 精良 白色	透明	全体は無地				ほぼ完形
SK-12出土 第15図 139	碗	残存高3.9 底径3.6	白磁 精良 白色	透明					残0.3
SK-12出土 第15図 140	皿	残存高1.3 底径(4.3)	白磁 精良 白色	透明	胴部の高台際近くと高台に一条圏線 何れも剥落しているが赤色か		肥前		残0.2
SK-12出土 第15図 141	ミニチュア碗	口径4.8 残存高1.8~	白磁 精良 白色	透明					残0.5
SK-12出土 第15図 142	青花蓋	裾径4.8 径5.4 器高1.1	磁器 精良 白色	透明				16C後半	残0.5
SK-12出土 第15図 143	染付碗	残存高1.8 底径(4.0)	磁器 精良 灰白色	透明	見込み 胴部に水裂文 貫入		肥前	19C	底部残0.5
SK-12出土 第15図 144	染付碗	残存高2.3 底径(3.2)	磁器 精良 灰白色	透明	胴部に文様 高台に二条圏線 見込みに一輪の花		肥前		底部残0.5
SK-12出土 第15図 145	染付皿	残存高3.5~ 口径推定12.0	磁器 精良 淡灰色	透明	内面 二条圏線 外面 草文様		肥前		口縁部片
SK-12出土 第15図 146	染付碗	口径(7.2) 残存高5.0~	磁器 白、黒粒子含む	透明	貫入 内面口縁部付近に二条圏線 見込み裾部に一条圏線 外面の口縁部色あせ 外面、胴部に雪持世文		肥前		残0.3
SK-12出土 第15図 147	染付碗	口径(8.7) 器高6.8 底径(4.2)	磁器 灰白色	透明	内面口縁部雷文 外面 鶴、雲文、裾部に襷文 高台内に一条圏線 高台外部に二条圏線		肥前		残0.2
SK-12出土 第15図 148	染付合子蓋	口径(52.0) 残存高0.9	磁器 白色		外面 水裂文	内面の裾部は釉剥ぎ	肥前	19C	残0.3
SK-12出土 第15図 149	染付碗	口径(10.7) 器高6.5 底径(5.6)	磁器 精良 灰白色	透明	胴部に松の文様 高台際に一条圏線 見込みに「寿」の文字と一条圏線 口縁部 内面に二条圏線 口縁部 外面に一条圏線		肥前	18C~ 19C	残0.3
SK-12出土 第15図 150	染付皿	口径(12.3) 器高3.0 底径(8.0)	磁器 微細な白黒粒含む	透明	貫入 外部底面蛇ノ目凹形高台 見込みに文様		肥前		底部残0.3
SK-12出土 第15図 151	染付皿	残存高4.4~ 底径9.3	磁器 精良 灰白色	透明	型打ち成型 花卉型 見込み山水文	高台内蛇ノ目釉剥ぎ	肥前		底部完存
SK-12出土 第15図 152	染付蓋	裾径(11.0) 径(12.0) 残存高3.0~	磁器 精良 灰白色	透明	外面 区画間の中に四方襷文	受け部 釉剥ぎ	肥前		残0.3
SK-13出土 第15図 153	小皿	残存高2.0 底径2.7	磁器 精良 灰白色	灰釉					底部残0.8

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-13出土 第15図 154	染付皿	残存高1.8 底径 (7.2)	磁器 精良 白色	透明	貫入 見込み 松葉文、草文 足付きハマ跡		肥前系	18C～ 19C	底部残0.3
SK-14出土 第15図 155	小皿	口径 (8.0) 器高2.3 底径 (3.8)	陶器 精良 黒褐色	鉄釉	見込み 鉄釉 白濁点 胴部に釉だれ	見込み 少粒の砂付着			残0.5
SK-14出土 第15図 156	染付碗	口径6.6 残存高3.7	磁器 精良 白色	透明	外面口縁部 雨降文 全体に透明釉		肥前	18C～ 19C	口縁部破片
SK-14出土 第15図 157	色絵皿	口径 (11.2) 器高3.0 底径 (6.0)	磁器 精良 白色	透明	貫入 見込みの蛇ノ目は緑色で不明の鉄絵 緑色の笹絵の色絵と不明の鉄絵 胴部に鉄絵の一条圏線と不明の文様 高台に鉄絵の二条圏線 高台内に鉄絵の一条圏線		肥前	18C～ 19C	残0.2
SK-15出土 第15図 158	小皿	口径 (6.4) 器高2.0 底径 (4.2)	土師器 微細な黒雲母、白雲母 あり		糸切り ヨコナデ				残0.5
SK-15出土 第15図 159	碗	残存高3.1 底径 (5.8)	磁器 精良 灰白色	透明	貫入 胴部にオリブ黒色の鉄絵				底部残0.3
SK-15出土 第15図 160	染付皿	口径 (12.6) 残存高4.8 底径 (8.0)	磁器 精良 灰白色	透明	貫入 見込み 菊花・草・蝶・二条圏線 胴部に唐草文 一条圏線 高台 一条圏線 高台内に一条圏線	高台内は砂付着	肥前	18C	残0.3
SK-17出土 第15図 161	碗	残存高2.2～ 底径 (3.6)	陶器 精良 灰白色	透明	外面文様 貫入		肥前	19C	底部片
SK-17出土 第15図 162	染付碗	残存高2.8～ 底径 (3.6)	磁器 精良 灰白色	透明	外面文様		肥前	19C	残0.2
SK-17出土 第15図 163	仏飯器	残存高4.0～ 底径 (3.8)	磁器 精良 灰白色	透明	外面にコンニャク印判のような文様の一部			19C	残0.7
SK-17出土 第15図 164	灰器	残存高10.0～	土師質土器 石英 砂粒多く含む 淡灰色		口縁部に、格子状のタタキ痕		在地系 蒲池?		口縁部片
SK-18出土 第15図 165	碗	残存高1.9～ 底径 (3.0)	陶器 黒い粒子、 2mmの白粒含む		貫入				底部残0.3
SK-18出土 第15図 166	染付皿	口径 (11.2) 器高3.5 底径 (6.0)	磁器 1mmの石粒含む	透明	貫入 内面 二重格子文		肥前系	19C	残0.1
SK-18出土 第15図 167	染付花瓶	口径18.0 器高10.2 底径3.8	磁器 黒い粒子含む	透明	貫入 外面 草文		肥前系	18C	完形
SK-18出土 第15図 168	染付段重	口径 (14.4) 器高5.7 底径 (9.2)	磁器 黒い粒子含む	透明	外面 微塵唐草文	重ね部 砂付着	肥前	19C	残0.3
SK-21出土 第16図 169	甕	口径 (64.2) 器高76.0 底径 (43.2)	瓦質土器 0.6mmほどの長石 0.3mm程の石英 微細な白雲母、長石、 石英を含む		内外面 口縁・ハケの上から横ナデ 外面胴部・ハケ目-内面胴部ハケ目 外面胴部の一部摩滅 内面口縁部以下全体摩滅と汚れ (黄白色)				残0.3
SK-22出土 第16図 170	小皿	残存高1.5～ 底径4.8	土師器 金雲母 灰黄色		底部の調整は不明				残0.8
SK-22出土 第16図 171	土鍋	口径 (15.4) 残存高2.7～	陶器 微細な粒含む		口縁を折り曲げて逆L字形成形 口縁下に飛びカンナ				口縁部片
SK-22出土 第16図 172	甕	残存高8.2～ 底径 (22.0)	陶器 3mmの石英含む 暗紫茶褐色	鉄釉	底部に火彫れあり、外面白化粧のたれ				底部片
SK-22出土 第16図 173	徳利	口径 (2.8) 器高15.9 底径 (5.6)	陶器 微細な白、茶、黒粒子 含む		貫入 外面上部白化粧土の文様 下部に鉄釉で笹文		京焼風		口縁一部欠損
SK-22出土 第16図 174	壺	残存高7.1 底径 (6.4)	陶器 微細な白粒子含む	灰釉			上野高取系		底部残0.3
SK-22出土 第16図 175	染付蓮華	長軸6.0 短軸3.9 残存高1.9	磁器 白色	透明	内面 半菊文 高台削り出し	高台釉剥ぎ	肥前		

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-22出土 第16図 176	染付皿	口径 (13.2) 残存高3.0	磁器 黒い粒子含む	透明	内面 折松文	蛇ノ目釉剥ぎの一部	肥前		口縁残0.3
SK-22出土 第16図 177	染付皿	残存高2.3～ 底径 (7.4)	磁器 精良 灰色	透明	外面 一条圏線 高台二条圏線 内面に文様	畳付砂付着	肥前		口縁部片
SK-22出土 第16図 178	染付碗	口径 (12.0) 残存高3.3～	磁器 黒い微粒子含む		外面 草花文		肥前		口縁部片
SK-22出土 第16図 179	染付碗	口径 (9.9) 器高5.1 底径 (3.9)	磁器 1mmの白粒、黒粒 含む	透明	貫入 内面の口縁部連弧文 三条圏線 見込みに二条圏線内に「寿」の文 外面 梅花文、裾部三条圏線、水裂文		肥前	19C	残0.5
SK-22出土 第16図 180	赤絵碗	残存高2.8～ 底径 (3.2)	磁器 灰白色		外面腹部牡丹唐草文の赤絵		肥前	18C～ 19C	底部完存
SK-22出土 第16図 181	色絵碗	口径 (11.4) 残存高3.5～	磁器 精良 灰白色	透明	内面色絵 文様は不明				残0.2
SP-23出土 第16図 182	菊花小皿	口径 (8.9) 器高2.5 底径 (5.0)	白磁 精良 黄白色	透明	高台内にハリ跡1ヶ所 見込みにハマ跡2ヶ所 口縁部以外釉発色不良 貫入あり(口縁部のみ) 押型成形		肥前	19C	残0.5
SK-24出土 第16図 183	灯明皿	残存高1.2 底径3.7	陶器 精良 赤褐色		糸切り				底部完存
SK-24出土 第16図 184	皿	残存高2.0 底径 (5.4)	陶器 精良 暗赤褐色	鉄釉 鉄漿	見込み 中心鉄釉 胴部 鉄漿 鉄釉 高台 鉄釉の釉だれ 高台内 鉄釉	見込み 蛇ノ目釉剥ぎ			底部残0.3
SK-25出土 第16図 185	染付碗	残存高3.9～ 底径 (4.2)	磁器 黒い粒子含む	透明	外面 雪輪草花文		肥前		底部残0.3
SK-26出土 第16図 186	土鍋	口径 (15.0) 残存高2.9	陶器 微細な粒含む	鉄釉 鉄漿					口縁部片
SK-26出土 第16図 187	鉢	口径 (22.2) 器高11.3 底径 (10.2)	陶器 3mmの石英含む	鉄釉			高取		残0.5
SK-26出土 第16図 188	染付鉢	残存高3.9～ 底径 (10.0)	磁器 黒い粒子含む	透明	外面 高台付近に二条圏線と鋸歯文		肥前		底部残0.2
SK-28出土 第16図 189	小碗	口径 (8.4) 器高2.5 底径3.6	陶器 0.1mmの砂粒含む 明褐色		外面釉だれ	内面砂目跡が残る	高取		残0.7
SK-28出土 第16図 190	鉢	口径 (28.0) 残存高4.5	陶器 1mmの石粒含む	鉄漿	口縁部上部に六条の溝				口縁部片
SK-28出土 第16図 191	挿鉢	残存高4.7 底径 (9.0)	陶器 微細な粒		内面に挿目				底部残0.2
SK-20・28出土 第17図 192	風炉	口径 (29.8) 残存高10.4	土師質 良 灰褐色		外面 ハケのちに斜め方向のミガキ、縦ナデ、 口縁部ヨコナデ 内面ハケのちにオサエ 口縁部ヨコナデ				窓、口縁一部
SK-28出土 第17図 193	碗	口径 (12.0) 器高5.0 底径 (5.0)	陶器 黄灰色 0.1～0.2mmの砂粒含む	灰釉	内面 白化粧土の刷毛掛け 外面 オリーブ色の灰釉 口縁の一部に釉の剥げ				残0.2
SK-28出土 第17図 194	碗	口径 (11.6) 残存高3.0～	陶器 黒粒子含む		貫入				口縁部片
SK-28出土 第17図 195	碗	残存高3.0～	白磁 精良 淡灰白色	透明					底部片
SK-28出土 第17図 196	鉢	残存高6.4～ 底径 (13.2)	陶器 0.1～0.3mmの白砂粒 含む 微細な白雲母 明赤褐色		内面 白化粧土を波状に櫛掻き		武雄		底部片
SK-28出土 第17図 197	染付皿	口径 (12.6) 残存高2.0	磁器 白色	透明	見込み 花文		肥前		口縁部片

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-28出土 第17図 198	染付碗	口径 (8.8) 残存高3.6~	磁器 白色	透明	外面 胴部花文		肥前		口縁部片
SK-28出土 第17図 199	染付碗	口径 (8.8) 器高4.6 底径 (3.8)	磁器 精良 白灰色	透明	外面 花唐草文	畳付砂付着	肥前	17C~ 18C	残0.7
SK-29出土 第17図 200	挿鉢	残存高4.5~ 底径 (8.4)	土師質土器 石英、微細な砂粒 にぶい橙色		挿目9本				底部片
SK-29出土 第17図 201	鉢	残存高4.2 底径 (17.2)	土師質土器 2mmの砂粒、微細な 白雲母、黒雲母含む						底部残0.2
SK-29出土 第17図 202	火鉢	残存高5.9~	瓦質土器 微細な砂粒、雲母含む		外面口縁部印花				口縁部片
SK-29出土 第17図 203	挿鉢	残存高4.7~ 底径 (9.0)	陶器 0.1mmの白砂粒含む 赤褐色		挿目8本				底部片
SK-29出土 第17図 204	皿	残存高1.15 底径4.4	陶器 精良 灰白色		見込み胎土目痕 (3ヶ所) 胴部に軸だれ	底部露胎	唐津	16C後半 ~ 17C前半	高台残0.8
SK-29出土 第17図 205	小皿	残存高2.5 底径4.3	陶器 精良 灰白色	灰釉					底部完形
SK-29出土 第17図 206	碗	口径 (11.6) 残存高4.1~	陶器 精良 灰黄色		見込み 山水文 貫入		京焼風		口縁部片
SK-29出土 第17図 207	皿	口径11.6 器高3.6 底径4.8	陶器 灰白色			見込み 蛇ノ目釉剥ぎ 高台と見込みに若干の 砂付着	肥前系	18C	完形
SK-29出土 第17図 208	皿	残存高2.8~ 底径 (6.0)	陶器 3mmの砂粒含む		貫入		唐津	16C後半 ~ 17C前半	底部一部欠損
SK-29出土 第17図 209	皿	口径 (19.8) 残存高2.8~	陶器 精良 褐灰色		内面鉄絵が残る		唐津	17C前半	口縁部片
SK-29出土 第17図 210	壺	残存高5.1 底径6.2	陶器 精良 黒い粒子を含む 灰色	鉄釉	見込みに3ヶ所、畳付に4ヶ所胎土目痕が残る 内面ナデ 外面 ナデとケズリ	外面下半から高台内に かけて露胎	肥前系	17C	残0.3
SK-29出土 第17図 211	鉢	残存高4.0 底径 (9.0)	陶器 4mmの石粒含む	鉄釉	見込み重ね痕で砂と器の胎土		武雄		底部残0.3
SK-29出土 第17図 212	皿	口径 (16.6) 残存高3.1~	陶器 精良 にぶい橙色				唐津	17C前半	口縁部片
SK-29出土 第17図 213	火入	口径 (10.4) 残存高5.5~	陶器		筒形 長石釉 貫入				口縁部片
SK-29出土 第17図 214	火入	残存高5.1~ 底径 (7.0)	陶器 細かい粒子	鉄釉			京焼風		底部残0.5
SK-29出土 第17図 215	仏飯器	口径5.8 器高5.7 底径3.3	陶器 黒い粒子含む						底部完存
SK-29出土 第18図 216	碗	口径 (6.8) 残存高4.2~	陶器 精良 黄灰色		内外面刷毛目模様		現川		口縁部片
SK-29出土 第18図 217	皿	口径 (19.0) 残存高2.3~	陶器 精良 褐灰色		内外面刷毛目模様		現川		口縁部片
SK-29出土 第18図 218	皿	残存高1.8~ 底径4.4	陶器 精良 赤灰色		見込みに刷毛目模様を施す	見込み 胎土目痕4つ 高台に胎土目痕4つ	武雄	17C前半	底部完存
SK-29出土 第18図 219	皿	残存高2.3~ 底径 (7.8)	陶器 2mmの石英含む		見込みに白土を掛けて刷毛目模様 その上に砂目跡が4ヶ所	外面の畳付に胎土目 を取り除く時かけた痕跡 あり	武雄		底部残0.5
SK-29出土 第18図 220	鉢	残存高4.9~ 底径 (11.0)	陶器 0.1~2mmの白砂粒 多く含む 明赤橙色	灰釉 オリープ釉 鉄漿	内面 白化粧土ハケ掛け後灰釉掛け 外面 オリープ釉ハケ掛け 高台内 鉄漿ハケ掛け		唐津		底部残0.5

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-29出土 第18図 221	鉢	残存高7.6～	陶器 白砂粒含む 明褐色	鉄漿	口縁部玉縁肥厚、外面下位は鉄漿 外面白化粧土櫛歯掻き取り 内面白化粧土をハケ掛け		武雄		口縁部片
SK-29出土 第18図 222	皿	口径(14.5) 器高(2.8) 底径(6.7)	白磁 精良 白色	透明	型押し成形、見込み花卉文様を陽刻 文様を陰刻、外面布跡 貫入 口縁部軸剥ぎのち鉄を塗布	底部蛇ノ目軸剥ぎ 口縁部軸剥ぎ		19C	残0.3
SK-29出土 第18図 223	染付碗	口径(6.8) 残存高3.6～	磁器 精良 灰白色	透明	外面 花唐草文		肥前	19C	残0.3
SK-29出土 第18図 224	染付碗	残存高3.6 底径4.0	磁器 精良 灰白色	透明	胴部文様 高台軸だれ	高台内は露胎	肥前		底部残0.5
SK-29出土 第18図 225	染付碗	残存高1.9 底径3.6	磁器 精良 白色	透明	見込み文様 高台、高台脇 一条圏線 胴部 一条圏線、二条圏線		肥前	19C	底部残0.5
SK-29出土 第18図 226	染付碗	口径(9.8) 残存高3.7～	磁器 精良 灰白色	透明	外面 藤花文 貫入		肥前	18C	口縁部片
SK-29出土 第18図 227	染付鉢	残存高5.9 底径(9.4)	磁器 精良 白色	透明	見込み花唐草文、胴部に唐草文、一条圏線 高台二条圏線、高台内一条圏線 全体透明釉		肥前		底部残0.1
SK-29出土 第18図 228	瓶	残存高2.3～ 底径(5.8)	白磁 精良 灰白色	透明	内面 釉だれ		肥前系	17C	底部片
SK-29出土 第18図 229	瓶	口径5.7 残存高5.9～	磁器 精良 灰白色	透明	文様不明				口縁部片
SK-29出土 第18図 230	染付碗	口径(11.8) 器高6.3 底径(5.6)	磁器 精良 黒い粒子を含む 灰白色	透明	山・船が描かれる 高台に二条圏線 高台の上には雷文	畳付に砂付着	肥前		残0.5
SK-29出土 第18図 231	染付皿	口径12.8 器高4.1 底径4.5	磁器 精良 白色	透明	内面 折松葉文 高台付近 釉だれ	見込み 蛇ノ目軸剥ぎ	肥前	18C	残0.8
SK-31出土 第18図 232	播鉢	残存高2.6～	陶器 1mm程度の石	鉄釉	口縁部は、くの字に内側に突出				口縁部片
SK-31出土 第18図 233	土鍋	口径(35.0) 残存高5.0	土師質土器 3mmの石英、 白雲母含む		外面 ハケメ				口縁部片
SK-31出土 第18図 234	播鉢	口径(34.0) 残存高8.2～	陶器 1mmの白粒、白雲母 含む	鉄釉	播目12本				口縁部片
SK-31出土 第18図 235	碗	口径(13.4) 残存高3.2～	陶器 1mm白粒含む	白色					口縁部片
SK-31出土 第18図 236	片口	口径(22.0) 残存高5.5～	陶器 0.5mmの石英含む				肥前系	16C～ 17C前半	口縁部片
SK-32出土 第19図 237	染付碗	残存高4.3～ 底径(5.2)	磁器 黒い粒子含む		外面 文様の一部				底部残0.5
SD-35出土 第19図 238	仏花瓶	残存高14.3～ 底径(6.2)	陶器 微細な粒子含む	鉄釉	外面口縁部から内面にかけて茶褐色の鉄釉上掛け、 体部に鉄絵の笹文、オリーブと青色の山文 貫入、高台内に一部アルミナ跡が残る		武雄		口縁部欠損
SD-35出土 第19図 239	染付皿	口径(11.4) 残存高2.3～	磁器 黒い粒子含む	透明	見込み 葉文		肥前		口縁部片
SK-36出土 第19図 240	火鉢	残存高5.0	瓦質土器 1mmの石粒、 微細な白雲母含む		外面、口縁部付近に印花				口縁部片
SK-36出土 第19図 241	碗	残存高2.5～ 底径(4.6)	陶器 精良 にぶい橙色		内面から外面中ほどまで施釉				底部残0.5
SK-36出土 第19図 242	皿	口径8.4 器高2.0 底径5.1	白磁 微細な黒粒子含む	透明	貫入、高台内布目 糸切り成形、高台を円形に貼り付け 高台内に同一方向の筋 輪花		肥前	18C	残0.8
SK-36出土 第19図 243	壺	口径(9.2) 残存高4.0～	陶器 2mmの黒粒子、 微細な白雲母含む	鉄釉					口縁部片

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-36出土 第19図 244	皿	残存高2.5～	陶器 精良 黄灰色		内面に白化粧土を掛け櫛状掻き取り 貫入				口縁部片
SK-36出土 第19図 245	染付碗	残存高1.6～ 底径(4.6)	磁器 精良 灰白色	透明	高台に一条圈線 高台におそらく「大明年製」 貫入		肥前		底部片
SA-37出土 第22図 246	灯明皿	残存高1.6 底径3.7	陶器 精良 赤褐色	鉄釉	糸切り 内側鉄釉 外側赤褐色、ナデ				底部完存
SA-37出土 第22図 247	小皿	口径9.1 器高2.6 底径3.3	陶器 暗橙褐色～紫灰色	鉄釉 透明	三鳥手のモチーフを見込みに刻印し 鉄釉を全面掛けした後、印刻部に白化粧土を 掛けて印刻部以外を拭きとって象嵌し、 透明釉を全面掛け 見込みに窯当て具痕3ヶ所		八代焼又は 小代焼		一部欠損
SA-37出土 第22図 248	鉢	残存高6.2～ 底径(10.8)	陶器 0.1～2mmの砂粒含む 石英 赤褐色			見込みに環状の砂目跡 高台内砂目跡			底部片
SA-37出土 第22図 249	皿	残存高5.4～ 底径(15.6)	陶器 0.1～2mmの砂粒含む 石英 赤褐色			見込みに環状の砂目跡 あり			底部片
SA-37出土 第22図 250	皿	残存高4.6～ 底径(18.4)	陶器 0.1～1mmの白黒砂粒 含む 明赤褐色	鉄釉	内面白化粧土を櫛状掻き取りその上に鉄釉 貼り付け高台	見込みに砂目跡が環状 に付着する 高台に2つの大きな目 跡が付く	武雄	18C	底部片
SA-37出土 第22図 251	土鍋	口径(13.6) 残存高3.4～	陶器 白い粒含む	鉄漿	口縁部付近は無釉、内面は鉄泥 外面鉋後が連続した飛び文様				口縁部残0.2
SA-37出土 第22図 252	鉢	口径(31.6) 残存高7.9～	陶器 1mmの石含む		口縁部を白化粧土を塗った後、 ハケでナデた様な痕				口縁部片
SA-37出土 第22図 253	菊皿	口径(11.0) 器高2.0 底径(6.2)	陶器 良 黄白色	透明? 黄緑色?	見込みに輪花 三条の沈線 貫入	壺付に砂付着	瀬戸美濃		残0.3
SA-37出土 第22図 254	鉢	口径(30.6) 残存高5.4～	陶器 1mmの白、茶粒含む	鉄釉	鉄釉をハケ染り後、白化粧				口縁部片
SA-37出土 第22図 255	壺	口径(31.0) 残存高7.2～	白磁 1mmの石英含む	透明			中国	16C～ 17C	口縁部片
SA-37出土 第22図 256	鉢	残存高6.0～ 底径(14.6)	陶器 5mmの石英含む	鉄釉 鉄漿		見込み、高台内外に砂 目痕			底部残0.2
SA-37出土 第22図 257	壺	残存高8.0～ 底径4.7	陶器 0.1～2mmの白・ 黒砂粒多含 明赤褐色				上野高取系		残0.8
SA-37出土 第22図 258	鉢	口径(22.4) 残存高6.8～	陶器 2mmの石英含む	鉄釉 灰釉	内面腹部に鉄釉、上から灰釉 口縁付近から外面にかけて白化粧土 外面白化粧土の上から文様の一部あり		武雄		口縁部片
SA-37出土 第22図 259	壺	残存高6.2～ 底径(9.8)	白磁 精良 淡赤橙色	透明釉 鉄漿	内面 鉄漿 外面 イッチン描きにより文様を描く				
SA-37出土 第22図 260	鉢	残存高5.3 底径(9.4)	陶器 精良 赤灰色		内外面ナデ 底部糸切り 外面：指頭圧痕				底部残0.3
SA-37出土 第22図 261	壺	残存高10.2～ 底径4.4	陶器 0.1～2mmの砂粒多含 明赤褐色				上野高取系		残0.8
SA-37出土 第22図 262	茶道具	口径(13.4) 残存高(11.3)	陶器 精良 黄白色		獅子頭貼り付け、外面、内面上部施釉 オリーブ 黄釉 内面 中部ナデ、指頭圧痕 貫入、オリーブ黄釉のうち外面口縁から獅子頭上 部まで薬灰釉、獅子頭から下はオリーブ黄釉 同遺構から出土した同一個体と考えられる遺物 には獅子の口横から左右に貫通した穴あり、ま た口縁と獅子頭の中間に穿孔を2ヶ所確認		高取?	18Cか 19C	
SA-37出土 第23図 263	小杯	残存高2.4 底径(3.4)	磁器 精良 白色	透明	全体は無地				底部残0.5
SA-37出土 第23図 264	合子	口径(4.6) 残存高19.0～	白磁 黒い粒子含む	透明					口縁残0.3

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SA-37出土 第23図 265	筒型碗	口径 (9.4) 器高6.8 底径 (5.4)	白磁 精良 白色	透明				19C	残0.3
SA-37出土 第23図 266	耳付壺	幅10.7 高8.6	磁器 精良 白色	黒色	貫入 ナデ 耳貼り付け		中国南部		肩部片
SA-37出土 第23図 267	色絵小杯	口径 (5.6) 器高2.4 底径 (2.4)	磁器 青白色	透明	内面の口縁付近に金色の雷文 見込み青色で「青陽之春」落款 福寿草文		肥前		残0.5
SA-37出土 第23図 268	染付碗	口径 (68.0) 器高5.0 底径 (3.1)	磁器 黒い粒子含む	透明	外面胴部に松文、裾部から高台外側に 四条圏線、裾部に連文、緑錆		肥前		残0.5
SA-37出土 第23図 269	染付筒型碗	口径7.5 器高5.5 底径3.6	磁器 精良 灰白色	透明	横線を描いた間に葉文	畳付に砂付着	肥前	19C	残0.8
SA-37出土 第23図 270	染付杯	口径 (8.4) 残存高3.6～	磁器 精良 灰白色	透明	外面 東屋・樹木などの風景 内面 下部に二条圏線 内面口縁に三条圏線か		肥前		残0.3
SA-37出土 第23図 271	染付碗	残存高4.8～ 底径6.8	磁器 精良 灰白色	透明	外面 水裂文地に菊花散し文 高台に二条圏線 貫入		有田	19C	残0.3
SA-37出土 第23図 272	染付碗	口径 (11.0) 器高6.1 底径3.6	磁器 精良 灰白色	透明	外面 丸文 上部と下部に圏線 見込み コンニャク印判、五弁花	見込みに砂付着	肥前	17C後半	残0.3
SA-37出土 第23図 273	染付皿	残存高3.3 底径 (10.2)	磁器 精良 白色	透明	見込み 文様		肥前		破片
SA-37出土 第23図 274	皿	残存高1.6～ 底径 (4.8)	陶器 精良 灰白色	透明	外面の胴部 透明釉 見込み 緑釉		嬉野		底部片
SA-37出土 第23図 275	染付皿	残存高2.1 底径 (8.2)	磁器 精良 灰白色	透明	見込み 蛸唐草文と二条圏線 胴部 蛸唐草文、胴下部 一条圏線 高台 二条圏線、高台内 一条圏線 貫入		肥前	19C	底部残0.3
SA-37出土 第23図 276	染付皿	口径 (14.1) 器高4.55 底径 (8.8)	磁器 精良 灰白色	透明	胴部に唐草文 一条圏線、高台 二条圏線 高台内に一条圏線、見込み 宝文 口縁部 段差あり、全体 透明釉	高台砂付着 高台内に砂付着		18C	残0.2
SA-37出土 第23図 277	染付皿	残存高2.6 底径 (9.8)	磁器 精良 白色	透明	胴部 一条圏線、 高台 二条圏線 見込み 五弁花文、二条圏線 貫入		肥前	19C	底部残0.3
SA-37出土 第23図 278	染付徳利	残存高11.3～ 底径7.6	磁器 精良 青白色	透明	外面 遠山の文様 釉のかかりが薄く、文様は灰オリープ色			17C中葉 後半	残0.3
SA-37出土 第23図 279	染付皿	残存高6.5～ 底径 (12.4)	磁器 精良 灰白色	透明	内面 文様 外面 唐草文様	高台内 蛇ノ目釉剥ぎ 蛇ノ目釉剥ぎ内に環状 に砂付着	肥前	19C	残0.3
SA-37出土 第23図 280	染付仏飯器	口径5.8 器高5.8 底径3.2	磁器 精良 灰白色	透明	外面 蛸唐草文 高台に釉がたれる		肥前	19C	残0.8
SA-37出土 第23図 281	染付花瓶	口径 (6.3) 器高14.0 底径 (4.8)	磁器 黒い粒子含む	透明	山水、雁、草花文		有田	17C半ば	残0.5
SA-37出土 第23図 282	染付皿	残存高6.0～	磁器 精良 灰白色	透明	口縁 連弧文・花文 外面 唐草文		肥前	18C	口縁部片
SA-37出土 第23図 283	基石	径2.2 厚0.5			粘板岩製 黒 よく研磨されている				完形
SK-39出土 第26図 284	鉢	口径 (19.4) 残存高4.2	陶器 精良 暗赤灰色	鉄釉	内外面 鉄釉を施す 口縁部釉剥ぎ 外面 一部釉だけか		肥前系	18C	口縁部破片
SK-39出土 第26図 285	碗	残存高3.1 底径4.3	陶器 精良 白と黒い粒子を含む 灰白色	透明 オリープ色	内面 透明釉を施し、貫入 胴部にオリープ色の釉	畳付、胴部に砂付着			残0.7
SK-39出土 第26図 286	挿鉢	残存高7.9 底径 (11.6)	陶器 精良 暗赤灰色		播目の単位十四条 外面 ナデ 糸切り				
SK-41出土 第26図 287	碗	口径 (10.8) 器高7.1 底径 (4.3)	陶器 黄白色	緑釉	見込み 窯当具痕		嬉野系統	17C代	一部欠損

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-41出土 第26図 288	鉢	残存高4.0 底径 (9.8)	陶器 1mmの白粒含む	オリープ色	内面は暗褐色の胎土で、白土による刷毛目装飾 (波状) その上からオリープ色の釉だれ		武雄	17C後半	底片
SK-42出土 第26図 289	合子の蓋	口径 (6.6) 残存高1.9	陶器 微細な粒含む	鉄釉			蒲池?		残0.2
SK-42出土 第26図 290	皿	口径 (19.8) 残存高3.9~	陶器 2mmの石粒含む	鉄釉	口縁部に鉄釉 皮鯨手風		唐津?	18C~ 19C	口縁部片
SK-42出土 第26図 291	碗	残存高3.0~ 底径 (4.2)	陶器 微細な粒子含む		ひび焼 文様の 陶胎染付			18C	底部完存
SK-43出土 第26図 292	小皿	口径6.4 器高1.9 底径4.5	土師器 灰白色 白雲母を含む		糸切り ヨコナデ				ほぼ完形
SK-43出土 第26図 293	小皿	口径 (7.7) 器高1.7 底径 (4.6)	土師器 微細な白雲母あり		糸切り ヨコナデ				残0.5
SK-43出土 第26図 294	小皿	口径8.0 器高2.1 底径4.5	土師器 微細な黒雲母、白雲母 あり 石英あり		糸切り ヨコナデ				残0.8
SK-43出土 第26図 295	小皿	口径 (8.2) 器高2.0 底径 (4.8)	土師器 微細な白雲母		糸切り ヨコナデ 内面に黒煤				残0.5
SK-43出土 第26図 296	小皿	口径8.1 器高2.1 底径4.4	土師器 灰白色 白雲母を含む		糸切りとヨコナデ、 口縁部に焼け跡 外面状態が悪い				ほぼ完形
SK-43出土 第26図 297	小皿	口径 (8.3) 器高2.0 底径 (5.6)	土師器 微細な黒雲母あり		糸切り ヨコナデ				残0.2
SK-43出土 第26図 298	皿	口径8.0 器高1.7 底径4.9	土師器 微細な金雲母含む		内面、口縁部付近に墨書 糸切り				ほぼ完形
SK-43出土 第26図 299	小皿	口径8.9 器高2.0 底径4.8	土師器 微細な黒雲母、白雲母 あり 浅黄色		糸切り ヨコナデ				残0.8
SK-43出土 第26図 300	皿	口径 (11.4) 器高2.2 底径6.7	土師器 灰白色 白雲母を含む		ヨコナデ 内外面黒斑 底ヘラ切り				残0.8
SK-43出土 第26図 301	焼塩壺	口径6.2 器高6.0 底径4.8	土師質土器 1mmの砂粒		外面煤付着 指押え跡				完形
SK-43出土 第26図 302	小皿	口径8.4 器高2.4 底径4.0	陶器 0.1~1.0mmの白砂粒 含む 赤褐色	鉄釉	鉄釉を内面から外面口縁部までかけるが広い範 囲に釉だれが広がる 高台内にも鉄釉がかかる		高取		残0.8
SK-43出土 第26図 303	小杯	口径6.2 器高3.8 底径2.5	陶器 灰色						残0.5
SK-43出土 第26図 304	小碗	口径 (7.3) 器高3.9 底径 (2.4)	陶器 精良 黄白色	透明 銅緑色	口縁部銅緑釉、横ナデ 釉だれあり、貫入	高台から腰部まで露胎	嬉野系統		残0.5
SK-43出土 第26図 305	碗	残存高1.5~ 底径3.6	陶器 精良 灰色		貫入		現川		底部完存
SK-43出土 第26図 306	皿	残存高2.7~ 底径4.5	陶器 白灰色			見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		17C?	底部完存
SK-43出土 第26図 307	皿	残存高2.0~ 底径 (7.4)	陶器 1mmの白粒含む 淡灰橙色			見込みに蛇ノ目釉剥ぎ			底部残0.8
SK-43出土 第26図 308	皿	口径11.5 器高3.6 底径4.0	陶器 淡白灰色			見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	肥前系	17C	完形
SK-43出土 第26図 309	壺	残存高3.0 底径 (17.4)	陶器 灰色	鉄釉	外面底部貝の目跡		唐津又は高 取	17C前半	底部小片
SK-20出土 SK-43出土 第26図 310	鉢	残存高3.5~ 底径 (9.6)	陶器 微細な白雲母		内面 鉄泥 糸切り				底部残0.5

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-43出土 第27図 311	鉢	残存高～ 幅14.6 底径 (7.8)	陶器 0.1～1mmの白砂粒 含む 紫灰色	鉄釉	外面下部に指オサエ	見込みに大量の砂目	肥前系		残0.2
SK-43出土 第27図 312	瓶	器高10.5～ 底径 (9.8)	陶器 精良 赤褐色		内面 無釉、高台置付は無釉 二彩手 高台内と体部下半に鉄漿		武雄		底部残0.5
SK-43出土 第27図 313	鉢	残存高4.0～ 底径 (11.0)	陶器 3mmの石粒含む	鉄釉		見込みに砂目			底部残0.3
SK-43出土 第27図 314	皿	口径 (20.0) 残存高5.8	陶器 淡黄白色	鉄漿 透明	貫入 鉄漿	見込みを釉剥ぎ			口縁部残0.1
SK-43出土 第27図 315	播鉢	口径 (36.8) 残存高5.5～	陶器 1mm程度の粒含む	鉄釉	口縁部 鉄釉 内面に11本の播目				口縁部片
SK-43出土 第27図 316	播鉢	口径 (25.6) 残存高9.5～	陶器 6mmの石粒を含む		内面、胴部に9本の播目				口縁部残0.3
SK-43出土 第27図 317	播鉢	口径 (30.8) 残存高3.5～	陶器 1mmの白粒含む	鉄釉	口縁部 鉄釉 内面 播目				口縁部片
SK-43出土 第27図 318	播鉢	口径 (37.0) 残存高8.0	陶器 褐灰色	鉄釉	口縁部 鉄釉 外面 横ナデ 内面 横ナデのち櫛掻き				口縁破片
SK-43出土 第27図 319	播鉢	口径 (34.8) 残存高7.3～	陶器 2mmの石粒	鉄釉	内面 播目 玉縁状の口縁				口縁部片
SK-43出土 第27図 320	播鉢	残存高4.9～ 底径 (11.0)	陶器 精良 暗黒褐色		内面 播目を施す	底部に胎土目跡			底部残0.3
SK-43出土 第27図 321	皿	残存高3.5 底径 (6.0)	陶器 精良 白灰色	鉄漿 透明	見込み 蛇ノ目釉剥ぎのち鉄漿 見込み1.4cm幅で白化粧土を施した後、櫛掻き 貫入 底部ハリ跡	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 置付釉剥ぎ			残0.3?
SK-43出土 第27図 322	壺	残存高9.9～ 底径 (6.0)	陶器 0.3～2mmの石多く 含む 灰褐色	鉄釉 灰釉	内外面胴下位に鉄釉刷毛掛け 外面 オリーブ色の灰釉を流し掛け釉だれ	置付に5mmの石付着	肥前系	17C後半	残0.3
SK-43出土 第27図 323	碗	残存高4.0 底径4.2	陶器 淡黄白色		肥前系京風陶器の碗 見込み 山水文(鉄絵) 高台内 線刻「清水」	置付は露胎	京焼風		底部完存
SK-43出土 第27図 324	花生	残存高8.7～ 底径 (4.3)	陶器 灰白色					18C	底部完存
SK-43出土 第27図 325	皿	口径 (19.6) 器高4.7 底径 (8.8)	陶器 精良 灰紫色	鉄釉 灰釉	緑灰色の灰釉が内面から外面口縁、内面はその 上から打ち刷毛目文様 外面 胴下部に鉄釉 刷毛掛け	内面 見込みに蛇ノ目 釉剥ぎ	武雄	18C	残0.2
SK-43出土 第28図 326	皿	口径 (25.6) 残存高4.3～	陶器		内面 打刷毛目		武雄		口縁部小片
SK-43出土 第28図 327	皿	幅7.6 高4.7	陶器 精良 灰黄色		高台を除く内外白化粧土の刷毛掛け	見込み 蛇ノ目釉剥ぎ	現川?	18C	底部片
SK-43出土 第28図 328	土瓶	口径 (9.8) 残存高7.9 幅 (17.4)	陶器 精良 黄褐色	鉄釉	外面 鉄釉を施す、その上に白化粧土で文字 緑釉で草文を表す、内面 ナデ 鉄漿を塗付 鉄顔料、汽車土瓶			19C	口縁破片
SK-43出土 第28図 329	鉢	口径 (38.0) 残存高4.0～	陶器 精良 明褐色	灰釉 鉄釉	内面白化粧土で刷毛目模様の上からオリーブ色 の灰釉を口縁部まで 外面口縁に鉄釉				口縁部片
SK-43出土 第28図 330	小杯	口径 (7.0) 器高4.5 底径 (3.8)	白磁 精良 灰白色	透明	外面 柿右衛門系にごし手風楓				残0.5
SK-43出土 第28図 331	碗	口径8.2 器高3.8 底径3.7	白磁 精良 白色	透明					残0.5
SK-43出土 第28図 332	小皿	口径10.4 器高2.9 底径5.2	磁器 精良 白色	透明	口縁口鏝 無文 花卉形 柿右衛門		有田	17C後半 ～18C前 半	残0.8

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-43出土 第28図 333	碗	残存高3.7～ 幅9.6 底径5.2	青磁 精良 灰白色		高台が高い				残0.5?
SK-43出土 第28図 334	小杯 端反	口径6.4 器高3.8 底径2.8	陶器 1mmの砂粒含む 淡黄褐色	薬灰釉	外面 草文 外面胴下部 二条圏線		高取上野系	17C前半	完形
SK-43出土 第28図 335	染付小碗	残存高3.2～ 底径3.1	磁器 精良 灰白色	透明	外面 華文	畳付にかなりの砂が 付着	肥前		底部完存
SK-43出土 第28図 336	染付小碗	器高2.2～ 底径3.2 幅7.6	磁器 精良 灰白色	透明	外面 草花文		肥前		残0.3
SK-43出土 第28図 337	染付碗	口径(7.9) 器高4.2 底径2.6	磁器 精良 白色	透明	外面 草花文と宝文		肥前		残0.3
SK-43出土 第28図 338	染付碗	口径8.1 器高4.9 底径(3.4)	磁器 精良 白色	透明	外面高台から胴下部 三条圏線 外面胴部草花文 内外面 貫入		肥前		ほぼ完形
SK-43出土 第28図 339	染付碗	口径(8.2) 器高4.7 底径(3.5)	磁器 灰白色	透明	外面 楓文				残0.5
SK-43出土 第28図 340	染付碗	口径4.4 器高4.2 底径3.0	磁器 精良 白色	透明	外面 蛇籠草花文		肥前		残0.7
SK-43出土 第28図 341	染付碗	口径8.7 器高5.1 底径3.7	磁器 精良 白色	透明	外面胴部草文(暗青色) 高台・高台際 三条圏線	畳付釉剥ぎ	肥前		ほぼ完形
SK-43出土 第28図 342	染付碗	口径(10.0) 残存高5.2～	磁器 精良 白灰色	透明	外面 草文 底部 高台内 圏線あり		肥前	17C～ 18C	残0.3
SK-43出土 第28図 343	染付碗	口径9.6 器高4.8 底径3.4	磁器 精良 白色	透明	外面 花卉文、柿文		肥前		残0.8
SK-43出土 第28図 344	染付碗	口径(10.8) 器高5.5 底径(5.0)	磁器 精良 白色	透明	外面 竹文 口縁 口籍				残0.3
SK-43出土 第28図 345	染付碗	残存高6.3 幅4.8	磁器 精良 白色	透明	外面 高台に二条、高台上に一条圏線 円に釣人 また、草花文 内面：見込み 菊文		肥前		残0.3?
SK-43出土 第28図 346	染付皿	口径(13.3) 器高4.8 底径(4.8)	磁器 灰白色 微細な黒粒子	透明	貫入 内面、口縁付近に折松葉文	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	18C	底部完存
SK-43出土 第28図 347	染付手塩皿	一辺8.2 器高2.6 底径5.2	磁器 精良 灰白色	透明	糸切り細工の型打ち成型 見込み 草花文、外面 唐草文 高台内「大明年製」 口縁 口籍		肥前		ほぼ完形
SK-43出土 第28図 348	染付碗	残存高2.5～	磁器 精良 灰白色	透明	内面 松文 外面 口縁近く近くに釉だれ		肥前	17C～ 18C	口縁部片
SK-43出土 第28図 349	染付皿	口径13.2 器高3.5 底径7.8	磁器 精良 灰白色	透明	見込み コンニャク印判五弁花 内面 半菊唐草文、外面 唐草文 外面 唐草文 高台内「大明年製」	畳付に砂目痕がかなり 残る	有田	18C前半	残0.8
SK-43出土 第28図 350	瓶	残存高11.3～ 底径5.2	陶器 精良 青灰色	透明		畳付砂付着 陶胎染付	肥前系	18C	胴上部欠損
SK-43出土 第29図 351	染付皿	口径14.0 器高3.8 底径8.1	磁器 精良 白色	透明	見込み コンニャク印判五弁花 内面 菊唐草文、外面 唐草文 高台内「全」、花卉形		有田	18C前半	完形
SK-43出土 第29図 352	染付皿	口径20.8 器高3.3 底径14.0	磁器 精良 白色	透明	外面 唐草文、内面 花唐草文 見込み 五弁花文 裏銘は満福を呉須染付 高台内にハリ支え熔着痕5、輪花	畳付砂付着	有田	18C前半	残0.7
SK-44出土 第29図 353	皿	残存高3.1～ 底径(7.6)	陶器 2mmの石英含む		窯当て具痕	見込みに2ヶ所胎土目	高取? 唐津?	17C前半	底部残0.5
SK-44出土 第29図 354	銅鑼鉢 茶道具	口径(17.2) 器高5.5 底径(10.2)	陶器 1.5mmの砂粒含む		貫入 口縁部の欠損が大きい 高台内に窯当て具痕		志野	16C後半	残0.5
SK-44出土 第29図 355	染付瓶	残存高5.5～ 底径(6.8)	磁器 黒い粒子含む	透明	外面 蜻唐草文 外面裾部 二条の圏線		肥前	19C	底部残0.2

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-44出土 第29図 356	染付碗	残存高3.4～ 底径(4.7)	磁器 青白色	透明	高台の外三条圏線 見込みと外面 文様		肥前		底部残0.3
SK-44出土 第29図 357	染付碗	残存高2.2～ 底径(4.4)	磁器 黒い粒子含む	透明	貫入 高台内 一条圏線、「大明年製」 外面の裾部から高台にかけて三条圏線と 文様の一部		肥前		底部残0.5
SK-45出土 第29図 358	碗	残存高2.9 底径3.8	陶器 精良 灰白色	鉄釉 透明	全体に貫入 胴部、高台、高台内 鉄釉のハケガケ 胴中部と内面 透明釉				底部残0.3
SK-45出土 第29図 359	染付小杯	残存高1.5 底径2.3	磁器 精良 白色	透明	全体に透明釉 高台内 深川製磁の商標		肥前		高台部残0.3
SK-45出土 第29図 360	染付碗	口径11.8 残存高3.6	磁器 精良 白色	透明	見込み 一条圏線 胴部 不明文 全体に透明釉		肥前		口縁部破片
SK-45出土 第29図 361	染付皿	口径15.5 器高3.75 底径8.8	磁器 精良 白色	透明	全体に透明釉 高台内に文様が描かれる		肥前	18C～ 19C	残0.5
第3遺構面出土 第32図 362	火鉢	残存高8.6 底径(19.4)	瓦質土器 1mmの白雲母含む		胴部が多角形、脚部と火鉢部は別個に作られ接 合されている 外面は丁寧な調整だが、内面はナデ、刷毛目や 指圧痕が明瞭である、脚付の火鉢 外面は型押しによる方形区画内に珠文の陽刻 外面区画の窓枠はミガキを施す		蒲池?		底部残0.3
第3遺構面出土 第32図 363	碗	口径(8.6) 残存高4.0～	陶器 精良 灰白色	緑釉	口縁部緑釉		織部風	19C	口縁部片
第3遺構面出土 第32図 364	碗	残存高3.1 底径(3.8)	陶器 精良 白と黒い粒子を含む 灰白色	透明	貫入 見込みに足付ハマ溶着痕か 透明釉を施す	外面下部から高台内に かけて露胎	京焼風		底部残0.5
第3遺構面出土 第32図 365	碗	口径9.4 器高5.4 底径3.1	陶器 精良 黒い粒子を含む 灰白色		貫入				残0.7
第3遺構面出土 第32図 366	碗	口径4.3～ 残存高(3.6)	陶器 黒、白粒子含む		貫入 葉文				底部残0.3
第3遺構面出土 第32図 367	碗	残存高3.6 底径(3.6)	陶器 精良 白と黒い粒子を含む 灰白色	透明	貫入 見込みは山水文 透明釉	外面下部から高台内に かけて露胎	京焼風		底部残0.7
第3遺構面出土 第32図 368	皿	残存高1.2 底径4.1	陶器 精良 灰色	透明	貫入 見込みに胎土目痕(3ヶ所) 全体に透明釉	畳付に砂目あり	唐津	16C	高台完形
第3遺構面出土 第32図 369	碗	残存高2.2～ 底径(4.0)	陶器 0.1～1mmの砂粒含む 淡黄褐色		外面に釉だれ	高台内面に砂付着			底部片
第3遺構面出土 第32図 370	皿	残存高1.5～ 底径(6.0)	陶器 精良 灰白黄色		外面胴下部に粒状の突帯、白化粧土		肥前系		底部片
第3遺構面出土 第32図 371	小皿	口径11.3 器高3.2 底径4.6	青磁 黒、白い粒子含む		貫入	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	中国南部	17C	完形
第3遺構面出土 第32図 372	皿	残存高2.6 底径4.7	陶器 精良 灰白色						底部完形
第3遺構面出土 第32図 373	蓋	口径(11.4) 残存高2.1～	陶器 微細な白、黒粒含む		内面 貫入 外面は露胎に直に櫛孫文、その上に白化粧で絵 付け				口縁残0.2
第3遺構面出土 第32図 374	甕	残存高6.1～	陶器 石英 0.5～1mmの砂粒含む 暗赤褐色						口縁部片
第3遺構面出土 第32図 375	鉢	残存高8.8～	陶器 0.1～1mmの白砂粒 含む 暗赤灰色	灰釉	内面口縁から外面にかけて黄褐色の灰釉かけ				口縁部片
第3遺構面出土 第32図 376	挿鉢	残存高2.0～ 底径(7.4)	陶器 精良 灰白色						底部片

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
第3遺構面出土 第32図 377	挿鉢	残存高5.3～ 底径(9.6)	陶器 0.5～1mmの白砂粒 含む 暗赤褐色			外面胴下部に胎土目跡 2ヶ所 見込みに重ね焼きの痕 跡あり			底部残0.5
第3遺構面出土 第32図 378	皿	残存高2.2～ 底径4.6	青磁 精良 青灰色	青磁	貫入		龍泉窯	17C	底部片
第3遺構面出土 第32図 379	碗	残存高3.8 底径(5.4)	磁器 精良 黒褐色の粒子を含む 灰白色	透明 褐色	高台に1ヶ所押したような跡が見られる 褐釉を施す	壘付釉剥ぎ 高台内に砂付着			底部残0.3
第3遺構面出土 第32図 380	皿	残存高3.3 底径(6.8)	白磁 精良 黒い粒子を含む 灰白色	透明	透明釉を施す	見込みに釉剥ぎ、 砂付着 壘付釉剥ぎ、砂付着			底部残0.5
第3遺構面出土 第32図 381	染付碗	残存高1.6～ 底径(2.8)	磁器 精良 灰白色	透明	見込み コンニャク印判 五弁花文 外面 区画文		肥前系	18Cか 19C	底部片
第3遺構面出土 第32図 382	染付小碗	口径(8.0) 器高4.7 底径(2.7)	磁器 精良 黒い粒子を含む 灰白色	透明	内面 草花文	壘付釉剥ぎ	肥前		残0.3
第3遺構面出土 第32図 383	染付小杯	口径(4.8) 器高3.4 底径(2.9)	磁器 灰白色	透明	外面裾部に二条の圏線 口縁部付近に文様 貫入		肥前		残0.5弱
第3遺構面出土 第32図 384	小杯	残存高2.4～	白磁 精良 灰白色	透明	高台内 文字		肥前	19C	残0.3
第3遺構面出土 第32図 385	染付小碗	口径7.1 器高3.3 底径2.2	磁器 精良 灰白色	透明	外面 桐文		肥前	19C	残0.8
第3遺構面出土 第32図 386	染付そば猪口	口径(5.8) 残存高3.6～	磁器 精良 灰白色	透明	外面 二重格子文		肥前	19C	口縁部片
第3遺構面出土 第32図 387	染付盃	口径6.8 器高2.5 底径2.7	磁器 精良 白色	透明	見込み 鳥・藤など描く 銅板刷		肥前	近代	残0.7
第3遺構面出土 第32図 388	染付碗	残存高3.2～ 底径3.1	磁器 精良 灰白色	透明	外面 唐草文		肥前	19C	残0.7
第3遺構面出土 第33図 389	染付碗	残存高3.1 底径3.3	磁器 精良 白色	透明	全体に透明釉 胴部に葉文	壘付砂目			高台部完形
第3遺構面出土 第33図 390	染付碗	残存高3.0～ 底径4.2	磁器 精良 灰白色	透明	外面 区画間文 高台 二条の圏線 見込み 鳥が描かれる		肥前	19C	残0.3
第3遺構面出土 第33図 391	染付蓋	つまみ径3.4 裾径8.5 器高2.7	磁器 精良 白色	透明	外面はよろけ縞文、つまみ外に二条の圏線 内面 天井部は花文、一条の圏線 内面口縁部は雷帯文 つまみ内に不明文字、一条の圏線 全体に透明釉				残0.8
第3遺構面出土 第33図 392	染付碗 蓋付き碗	口径(8.8) 残存高3.7～	磁器 精良 灰白色	透明	貫入 外面 草花文		肥前	19C	口縁部片
第3遺構面出土 第33図 393	染付碗	口径(10.4) 器高6.0 底径(3.6)	磁器 精良 白色	透明	内面 区画文 外面 文様不明		肥前	19C	残0.3
第3遺構面出土 第33図 394	染付碗	残存高4.4 底径4.2	磁器 精良 白色	透明	見込み 草花文 胴部に区画の中に草花文 高台に二条の圏線 全体に透明釉		肥前		残0.3
第3遺構面出土 第33図 395	染付皿	残存高2.5～ 底径(7.6)	磁器 精良 灰白色	透明	内面 花唐草文 見込み 五弁花文 外面 唐草文 外底に文様	高台内面に砂付着	肥前	19C	底部片
第3遺構面出土 第33図 396	染付皿	残存高2.8～ 底径(7.8)	磁器 精良 灰白色	透明	見込み 山・波・樹木等 外面 水・家屋等 高台 櫛歯文 高台に割れた磁器を直した跡がみられる	高台内蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	19C	残0.2
第3遺構面出土 第33図 397	染付輪花皿	口径(13.4) 器高3.3 底径7.5	磁器 精良 黒い粒子を含む 灰白色	透明	外面は唐草文と高台二条、胴下部一条の圏線 内面 微塵唐草文 見込み 環状松竹梅を具須染付 高台内款に「大明年製」 型打ち成型	高台内蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	19C	底部完存

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SD-10出土 第34図 398	土製品 土人形	高3.2 幅3.2 厚0.9	土製品		型押成形				
SK-20出土 第34図 399	土製品 土馬	長6.9 幅2.2 高さ5.0	土師質土器 0.5~1mmの砂粒含む 黒雲母含む 明褐灰色		手握ね				胴部から 上のみ
SK-2出土 第34図 400	土製品 土人形	長4.0 幅3.2 厚1.2			手握ね				
SD-35出土 第34図 401	土製品 土馬	高6.5 幅8.7 奥行8.3			手握ね 鞍の造形はない 淡白橙色				
SK-20出土 第34図 402	土製品 土人形	長7.4 幅6.1 厚3.5	土師質土器 暗黄灰白色		手握ね				下部欠損
SD-35出土 第34図 403	土製品 管状土鍾	長3.5 幅1.25 厚1.25			手握ね				
SK-第3遺構面 出土 第34図 404	土製品 管状土鍾	長4.7 幅1.4 厚1.4			手握ね				完形
SK-第3遺構面 出土 第34図 405	土製品 管状土鍾	長4.8 幅1.3 厚1.3			手握ね				完形
SK-28出土 第34図 406	土製品 土鈴	長5.5 幅3.9	土製品 白雲母		手握ね				残0.8
SK-26出土 第35図 407	丸瓦	器高6.7 長19.0 幅14.0 厚2.1	瓦質 精良 灰色		凹面布目痕 凸面ヘラケズリ後ヨコナデ				残0.5
SK-29出土 第35図 408	丸瓦	長18.2 幅11.9 厚2.0	瓦質		凹面 ケズリ 凸面 ナデ 釘穴あり				
SK-第3遺構面 出土 第35図 409	丸瓦	長16.1 幅14.0 厚2.0	瓦質 灰色		凹面ケズリと面取り・蓆痕 凸面ナデ仕上げ				
SK-18出土 第36図 410	丸瓦	幅14.0 厚2.1 端部0.8	瓦質 精良		凹面に布跡 凸面に型跡?形跡				
SK-20出土 第36図 411	瓦	幅13.7 厚2.0	瓦質 精良 灰色		表面に溝を施す 裏面に溝を施す				
SK-22出土 第36図 412	平瓦	幅16.8 厚2.5	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む		摩滅が著しい ナデ仕上げ				
SK-10出土 第36図 413	切り込み棧瓦	幅15.1 厚1.8	瓦質		黒灰色 凸面 ミガキ 凹面 ナデ仕上げ 小口部に菊形のスタンプ				
SK-10出土 第37図 414	切り込み棧瓦	幅30.8 厚2.0	瓦質		ナデ仕上げ 小口部に菊形のスタンプ 黒灰色				
SK-第3遺構面 出土 第37図 415	軒棧瓦	幅13.8 厚2.0	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む		ナデ仕上げ 巴文				
SK-40出土 第38図 416	桶板材	長12.3 幅11.5 厚1.0	木製品						
SK-40出土 第38図 417	桶板材	長12.7 幅12.5 厚1.0	木製品						
SK-40出土 第38図 418	桶板材	長12.5 幅12.5 厚1.1	木製品						
SK-40出土 第38図 419	曲物底板	長13.3 幅13.4 厚1.0	木製品						
第3遺構面出土 第38図 420	底板	長19.8 幅8.8~ 厚1.0	木製品						

図番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () 復元値	胎の特徴 胎の色	釉薬	調整・成形・装飾技法・特徴	窯詰技法	産地	年代	備考
SK-40出土 第38図 421	木製品 桶板材	長29.9 幅34.0 厚1.8							
第3遺構面 第38図 422	木製品 不明	長17.9 幅1.5 厚1.4							
第3遺構面出土 第38図 423	木製品	長9.2 幅3.5 厚0.9							
SK-40出土 第38図 424	木製品	長14.7 幅12.8 厚1.9							
SK-40 第38図 425	木製品 羽子板形製品	長45.6 幅10.7 厚7.0							
SK-40出土 第39図 426	下駄 (露卯?)	長15.8 幅6.4~8.4 厚0.6~4.2	木製品		下部破損 (横緒穴・後歯なし) 厚さ 0.6~4.2 (足部分) 柄は1つ				
SK-43出土 第39図 427	椀蓋	つまみ径(5.4) 楕径(10.4) 器高3.0	漆器	黒漆 赤漆	外面黒漆、内面赤漆で外面に3ヶ所金彩で丸に 五弁の花、梅花と双葉の家紋文				
SK-36出土 第39図 428	椀	残存高4.1 底径(7.0)	漆器	黒漆	一文字腰形 内外面黒漆 高台内に白色で不明な柄あり				
SK-6出土 第40図 429	頭折釘	長5.6 幅1.2 厚0.9	鉄製品						
SK-28出土 第40図 430	角釘	長3.8~ 幅1.2 厚4.2	鉄製品						
SK-29出土 第40図 431	釘	長4.7 幅0.8 厚0.7	金属製品						
SK-6出土 第40図 432	角釘	長9.12 幅0.5 厚4.2	鉄製品						
SK-44出土 第40図 433	不明	長7.6 幅2.7 厚1.3	金属製品						
SK-29出土 第40図 434	小柄	長5.4 幅2.0 厚0.6	金属製品						
第3遺構面出土 第40図 435	煙管吸口	長5.6 径1.0	金属製品		真鍮製				
SK-28出土 第40図 436	煙管吸口	長5.3 径1.0	金属製品		真鍮製				
SK-43出土 第40図 437	鎌	長13.6 厚3.0	鉄製品						
SK-43出土 第41図 438	銭 寛永通宝	縦横: 2.4cm	銅銭						
SK-43出土 第41図 439	銭 寛永通宝	縦横: 2.4cm	銅銭						

圖 版

1 宮永町遺跡調査区遠景
(東から)



2 宮永町遺跡調査区遠景
(西から)



3 宮永町遺跡調査区
(直上)





1 SK-3 完掘状況
(南から)



2 SK-4 完掘状況
(南から)



3 SK-5 完掘状況
(南西から)

1 SK-6 完掘状況
(南から)



2 SK-16完掘状況
(南西から)



3 SK-20有機物検出状況
(東から)





1 SK-20完掘状況
(南から)



2 第2遺構面遠景
(直上)



3 第2遺構面全景
(直上)

1 SA-37完掘状況遠景
(北から)



2 SA-37完掘状況
(南から)



3 SA-37土層堆積状況
(東から)





1 SK-38完掘状況
(東から)



2 SK-39土層堆積状況
(西から)



3 SK-41完掘状況
(北西から)

1 SK-44完掘状況
(南西から)



2 SK-46完掘状況
(西から)



3 SK-47完掘状況
(北西から)







24



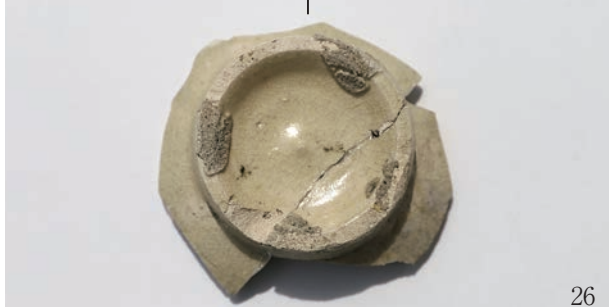
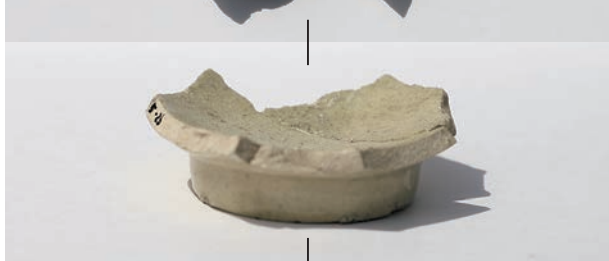
31



25



33



26



34



27



35



29



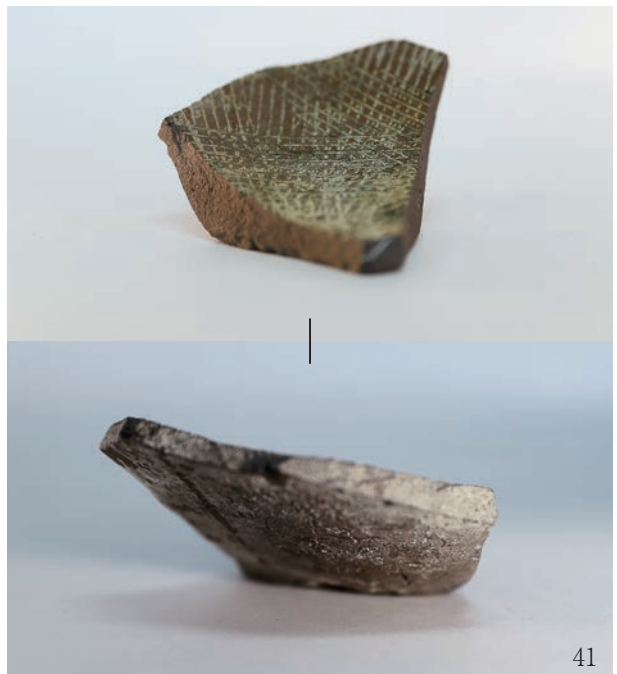
37



40



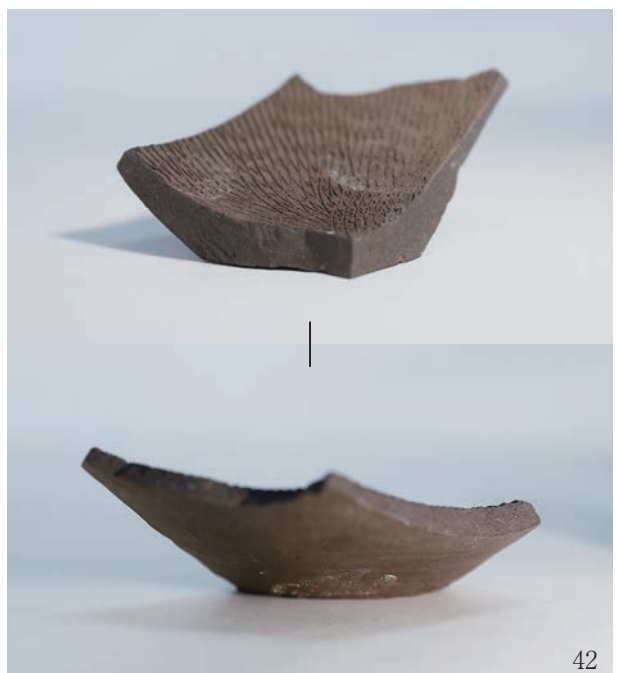
38



41



39



42



43



44



45



46



47



61



78



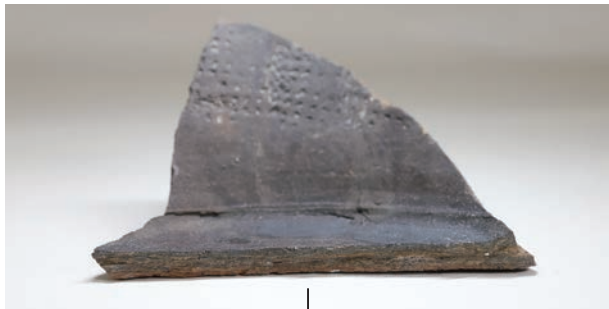
79



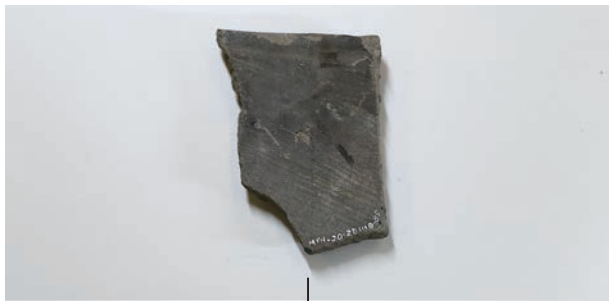
82



83



84



85





117



118



119



120



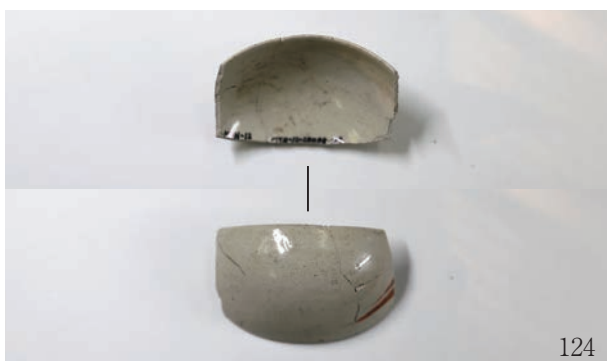
121



122



123



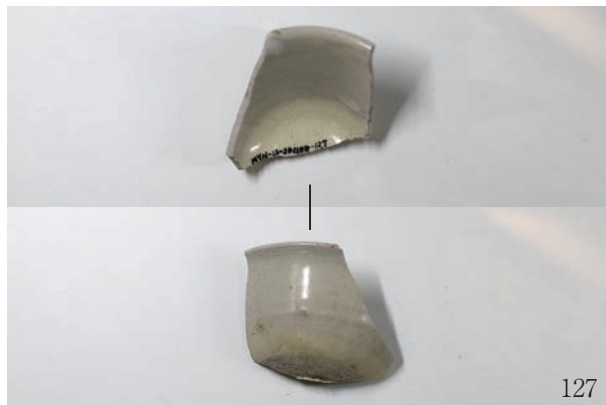
124



125



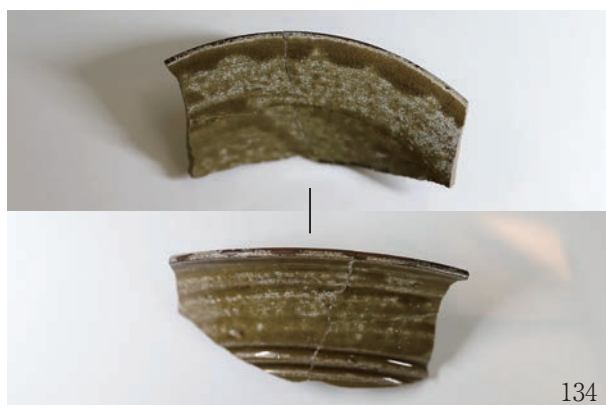
126



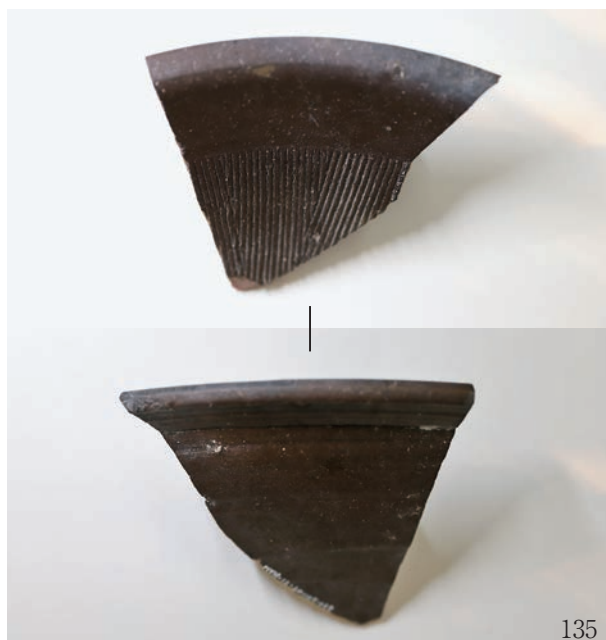
127



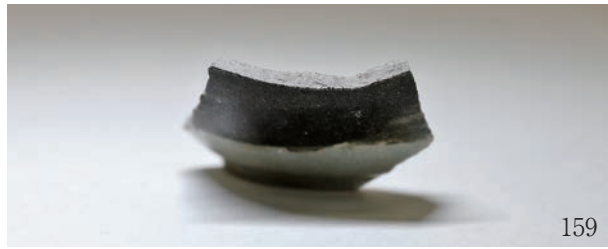
129



134



135



135

136

137

138

139

140

141

142

155

158

159

163

164

165

171





204



205



207



208



210



211



215



222



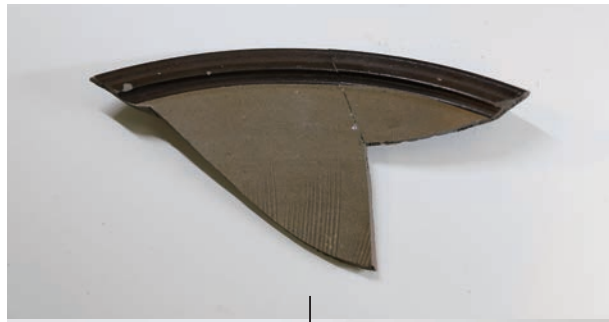
224



228



229



234



235





237



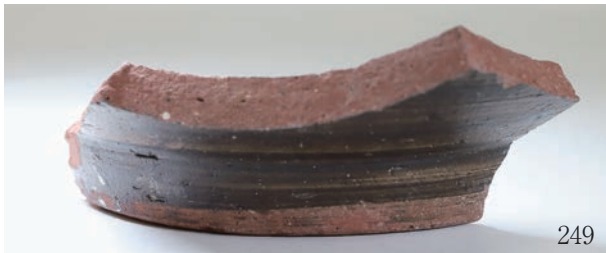
259



241



260



249



261



251



263



252



264



257



265



285



287



302



289



303



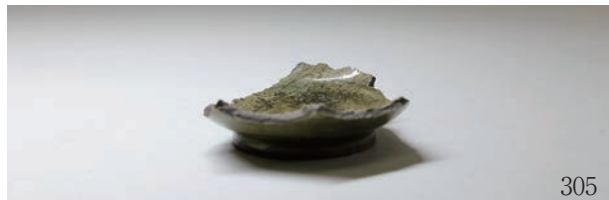
292



304



294



305



296



306



299



307



300



308



301



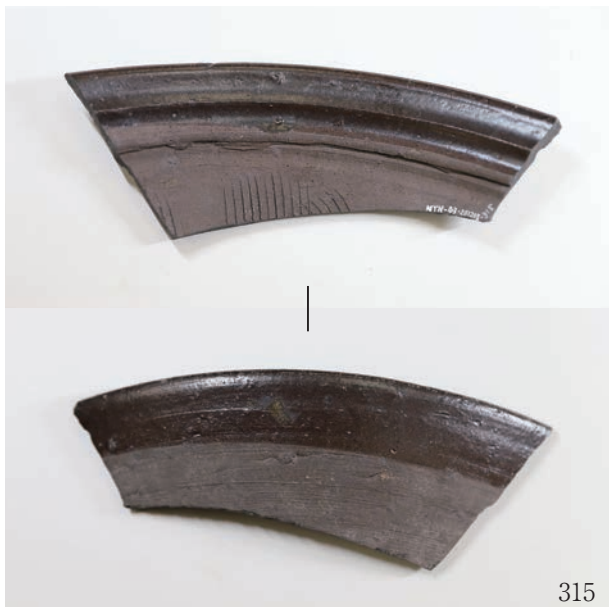
311



312



313



315



316



318



319



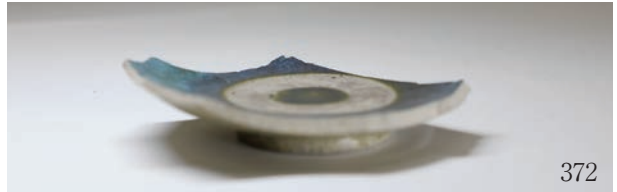
324



330



331





407



413



408



414



409



411



415



412



417



418



419



420



424



425



426



428



報告書抄録

ふりがな	みやながまちいせき							
書名	宮永町遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	柳川市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	橋本清美 牧之角健太							
編集機関	柳川市教育委員会							
所在地	〒832-8555 福岡県柳川市三橋町正行431							
発行年月日	2024年9月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃〃	〃〃		(㎡)	
みやながまちいせき 宮永町遺跡	ふくおかけんやながわし みやながまち 福岡県柳川市宮永町 4-1外 ^{ほか}	40207	80167	33° 9' 25"	130° 24' 22"	2020.10.23 ～ 2020.12.25	287	市道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮永町遺跡	城下町	近世	土坑、柱穴	陶磁器、土師質土器、 木製品、鉄製品、銅銭		16世紀末～幕末		
当遺跡は、有明海に面した筑後平野の南西部、筑後川左岸と矢部川右岸に挟まれた標高3.8m程の沖積平野上に位置する。近世柳川城下町の武家地が集中する、城内地区の宮永小路である。武家地の生活遺構とこれに伴う遺物を確認することができた。遺物は土師器、瓦質土器、近世陶磁器、木製品、鉄製品、銅銭が出土している。								

宮永町遺跡

柳川市文化財調査報告書
第18集

令和6年(2024)9月30日

発行 柳川市教育委員会
〒832-8555 福岡県柳川市三橋町正行431
電話 0944-77-8832

印刷 大同印刷株式会社
〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20
電話 0952-71-8520(代)